岳　山

第七十年

第三號

山岳

第十七年第三號　大正十三年五月發行

目次

樽前火山彙の地形及植物景觀　竹內亮……一頁
西澤紀行　書上喜太郎……三九
錫ケ岳　黑田正夫……四七
雪の上ノ岳へ　榎谷徹藏……六一

圖版

○樽前山東峯……對頁八
○樽前山新出山最高點とフップシヌプリ○東方の外輪山頂より新出山を望む……二四
○樽前山中腹より見たるフップシヌプリ○東峯最高點より中央火口丘を距てゝ西峯を望む……三二
○白果累々たるシラタマノキ○オポップ空澤の上流……四八

○ウチハマンネンスギ○イハヒゲ……六四
○上ノ岳北方尾根より見たる黑岳○上ノ岳尾根の樹氷狀凍雪……七二
○上ノ岳頂下より黑部川水源を望む……八〇

雜錄

○長白山(Changpai Shan)に就て(吉岡八二郎)○大井川の荒廢(冠)○屋久島行(竹內)○板倉勝宣君を想ふ(加納一郎)○第三回エヴェレスト山遠征(木暮)○テッチョウの茶屋の一夜(MK生)

雜報

○頸城アルプスの登山路完成○避難小屋と觀賞地をアルプスに設置○黑部の門戸を開く峽谷鐵道○南アルプスで行方不明となる○伊藤氏の映畫隊大成功○榛名山麓の御料林○英國の探險隊今年もエ峰登山を決行○大鳴動の後噴煙猛烈○十七の火山活動
○會員通信

會報

○臨時茶話會○第二十三回小集會記事○會務報告○名譽會員城氏の訃報○本會規則拔萃○投稿規定

附錄

山岳第十一年、十二年、十三年、十四年、十五年、十六年總目錄

樽前火山彙の地形及植物景觀

竹内亮

一緒言

樽前火山彙と云ふのは膽振國支笏湖の南岸から太平洋岸との間の、樽前山及フップシヌプリを中心とした一帶の臺地を抱括した、勇拂・白老・千歳の三郡に跨がる區域に對して、便宜上命名したものであつて、こゝでは主として東は苫小牧から支笏湖湖畔を連絡する王子製紙株式會社輕便鐵道線、西は社臺谷を包括する區域に限ることにする。

此の區域は一帶の低い臺地であつて、其略中心に活火山である樽前山と、死火山であるフップシヌプリとがいづれも一千米以上の高度で南北に竝立するあり、臺地の處々には其の單調を破つて小火山丘の凸起があり、一帶の地域は概して原始的密林に被はれ、その中にあつて樽前山は獨り山腹以上を裸出して、山頂よりは不斷の噴烟を見、地形上頗る興味ある地域であると共に、植物景觀の研究上幾多の興味ある對象を提供して居る。

私は大正六年より十一年に亘る六年間此の一帶の地域に親しむ機會を得て、地形及植物景觀の觀察に從事した。

今こゝにこの收獲を讀者に捧げるに方つて、今更其の内容の乏しいことを恥ぢ入る次第であるが、この乏しい内容のどこかから幾分でも或參考資料の提供が出來れば私の大なる幸福である。

元來支笏湖及樽前山に關しては既に多くの研究がなされて居り、この稿の如きも全くそれ等の研究

に負ふ所大なるものがあるのであつて、私はこゝに大なる感謝を表する次第である。

二　地　形

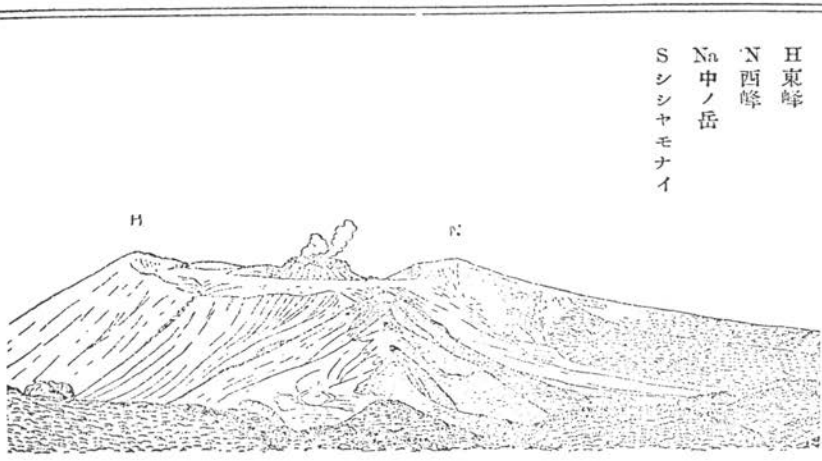
膽振火山彙の東端臺地の大陷沒湖である支笏湖の南部は一帶の低い臺地をなし、南及東へ緩く低下して居て、西部の白老臺地では平均高度約四百米であるが、東部モラップ附近では三百米、南及南東部では約四〇米内外に低下し、段丘をなして太平洋岸の狹い平原に臨んで居る。

此の臺地の略中央に樽前火山（一〇二四米）の噴出があり、長く美しい裾野を引き、北にこれに接して噴出したフップシヌプリ（一一〇三米）を抱擁して居る。フップシヌプリの北の裾は支笏湖に斗出し、俗に大崎と稱せられ、對岸恵庭岳の峻峯と相呼應して居る。

樽前山の裾野は南部及東部に良好なる發達をなし、其の東部は平均高度一〇〇米内外の平坦な臺地に終り、其の臺地の單調を破つてピシュウンモラップ（五〇六米）キムウンモラップ（四七七米）南北に相並んで凸起し、其の南東に方つて丸山（丸山遠見）（三二七米）の一小隆起がある。

西部は平均高度四〇〇米内外の白老臺地の接觸により裾野の發達不良であるのみならず、山體は東部に比して侵蝕甚しく、他の斜面と稍其の趣を異にして居る。白老臺地上には樽前に近くモユクウンタプコプ（六五五米）タプコプ（六六一米）の二小丘略南北に相並んで凸起して居る。

樽前山　樽前山は膽振國勇拂郡・白老郡・千歳郡に跨がり、廣く裾野を引く活火山で、山頂の圓頂丘からは常に噴烟を斷たず、屢々小爆發を繰り返へして居る。該山は二重式のホマーテ火山の上に去る明治四十二年に噴出したトロイデ火山の圓頂丘を乘せた整正な三重式火山であつて、東部及南部にゆるく美しい裾野を引き、北部支笏湖岸はフップシヌプリの噴出の爲めにその發達中斷され、西部は白老臺地に及んで居る。



フツブシヌプリ山頂より樺前山を望む

山頂には直徑約一粁に達するカルデラがあつて、其の南半部は稍完全で內側は急崖狀をなして居るが、北部は全く削磨し去られて其の原形を止めない、此のカルデラの南半の外輪山と第二次火口丘との間には火口原の發達があり、其の中に發達する淺い谷の末端は外輪山の南西部の一部を決して火口瀨をなし、覺生空澤の上源をなして居る。

第二次火口丘はカルデラの稍北東部に偏存する低平な丘地で、其の火口は現今圓頂丘の噴出によつて全く埋沒され、僅に其の東部に狹い凹處として其の原形を止むるに過ぎない。該火口丘の南部の頂部には、圓頂丘から南に出た裂罅の末端の凹孔から盛んに噴烟して居る。

第二次火口を埋めて噴出した圓頂丘は、高さ約一〇五米底部の直徑約四〇〇米に達する黑色の岩丘であつて、海拔一〇四三米に達す。中腹以上は殆ど直立した岩壁で、その下部は崩壞した岩塊の堆積した裾をなして、猶岩丘の麓を囘つて巨大な崩壞した岩塊が散布されてゐる。岩丘の頂部は概して平坦であるが凹凸の多い荒々しい地貌をなし、其の中央部に大なる凹陷部がある。

現今圓頂丘には東西に亙る裂罅とその中央部から南に派出する裂罅とがあつて、主としてそれ等の部分から噴烟して居て、

噴烟孔にはしばしば粉末狀に昇華した硫黄を認める。

外輪山の北東部は樽前山の最高點をなし一〇二四米に達し東峯（ヒガシミネ）（東岳）と稱せられ、其の南西部に位置する外輪山の西部の殘缺である西峯（ニシミネ）（西岳）と相呼應してゐる。西峯は九九五米に達し、其の最高點は往時の外輪山壁より更に約三〇〇米西偏して居る。この部分の外輪山の内壁には火山構造を明示する岩層の美しい露出がある。

外輪山の外側は急斜をなし、二〇度乃至四〇度に達し、高度約六〇〇米に至つて急に緩斜面に移つて居る。

樽前山は有史以來屢活動した山であつて、明治以前にあつては元文四年・文化年中の記錄があり、明治以後に於ては明治七年に大爆發があり、其後明治十六年・明治十八年・明治二十年・明治二十七年に爆發した記錄がある。其後稍平穩であつたが明治四十二年一月頃より活動を初め漸次其の勢を增し、四月に入つて益々甚しく、遂に四月十七日より十九日に亘る間に頂上の火口に圓頂丘の噴出を見るに至つた。

該圓頂丘は大正六年の爆發に因つて東西に亘る裂罅を形成し、其後絶えず小爆發を繰り返し、漸次崩壞の運命をとりつゝあり、殊に今年（大正十二年）は二月以來數回の爆發を繰り返したことが報ぜられて居る。

樽前山の過去に於ける活動の著しい特徴は非常に多量な火山灰礫を拋出堆積したことであつて、實に十數里の間に其の堆積を見、北海道本島中著明な火山灰地を形成して居る。

樽前山の山頂部は現今前記の如く南部のみ略外輪山の原形を止むるにすぎず、カルデラの直徑も一粁に達するのみであるが、過去に於ては樽前山とフップシヌプリとを連ぬる山稜の中央の一小隆起である中の岳（ペウレプヌプリ）も其の外輪山の北側の一部であつたと考へられて居て、この想像から

現今の地形を基礎として過去の外輪山を復舊すれば、其直徑約二粁の壯大なものとなり、又西峯の最高點が外輪山の內壁より遙かに西偏する事實からこの方面の外輪山は現今より遙かに高かつたと想像せらて居る。

この過去の大外輪山の北側には二個の火口瀨の發達があつたが、この火口瀨の侵蝕は現今の中の岳の隆起を中心にした狹い山稜を殘して外輪山の大部分を削磨し去り、その岩礫の大部分はシシャモナイ及クチャウツッカナイの上流に堆積して裸出した大荒原を現出したと想像される。

現今火口瀨として認められるものは圓頂丘の南部の火口原の南西・西峯に寄つた側にあつて覺生空澤の上流をなし、西岳の東側を深く侵蝕削磨し、其の下方には堆石の荒原を現出し、其の末端は遙か山腹に降下して居る。この火口瀨は最も新しく形成されたもので、明治初年山上火口原にあつたと傳へられて居る湖沼の缺潰によつて一時に形成されたものであらうと思ふ。

山頂に斯くの如き侵蝕による破壞の行はれた一方、明治四十二年の噴火によつて山頂に圓頂丘の附加を見たが、該圓頂丘もすでに破壞時代に入つたことは前記の如くである。

山頂部に於ける地形の變化と共に樽前山を南部山麓から望む時、其の山側の西部と東部とに地形的差異が明かに現出して居ることを認むることが出來る。即ち西峯より南西に派出せる尾根は其の上部は極めて緩斜をなすに反し、其の末端は急斜して樽前谷及別々谷の上流に臨み、其の部分の斜面は著しく小さい谷に彫刻されてゐるが、東峯の斜面は極めて緩漫な美しい弧線をなして高臺地に了り、標式的な火山裾野の地貌を現出して居る。又西部の別々谷社臺谷等が概して深く廣く侵蝕されて比較的老成の谷をなすに反し、東部の谷の上流は著しく地形的に若い相に止まる等の事實は、明かに少くともこの東西の兩斜面に於て地形的發達の異つた經過を辿つたことを想像し得る樣である。

今火山噴出物堆積の狀態を見ると、東部山側と西部山側とは甚しく其の狀態を異にし、西部山側で

は火山灰礫の堆積が東部山側に比して著しく少量である。又山頂部に於ても西峰は東峰に比して遙かに甚しく侵蝕された形跡を有すること等のことから、樺前山の火山活動による噴出物の堆積が概して東偏性を示して居ることを認むるに足る。殊にこの作用は山側の植物景觀の發達に大なる影響を及ぼし、西部山側の植物景觀は他の斜面に比して著しく老成型を呈して居る。

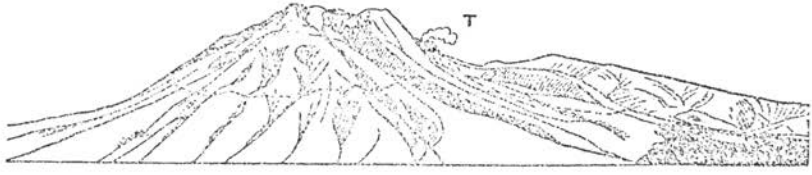
フップシヌプリ　フップシヌプリは樺前の北に近く聳立するコニーデ火山であるが、有史以來活動したことのない死火山である。其の最高點は樺前山頂から約四粁の距離にあり、北部山脚は支笏湖に斗出し、南部は中の岳の隆起を中央にした狹い山稜によつて樺前山に連つて居る。山體は東・西の兩側から樺前山の北部の裾野によつて抱擁されて居るので裾野の發達は不良である。

山體は甚しく侵蝕されて、其の頂部は數個の峰に分かれ、火口の認むべきものがない。最高峰は北東に偏して一一〇三米に達し、其の北東面は甚しく崩壞裸出した谷をなして居る。此の最高峰に近く四個の一千米以上の峰が聳立し、其の二峯は最高峯を中心として南西の方向に、他の二峯は南東の方向に竝立して居る。この最高峯に最も近い南の一支峯からは一條の尾根が南に走り、更に西に轉じ、其の末端はシシャモナイ上流に臨む約九〇〇餘米の一支峯を形成して居る。該山の主として南面せる山側には屢々安山岩壁の露出があつて山容甚だ峻險である。

樺前山の中腹以上が概して甚しく裸出せるに反して、フップシヌプリは全山樹林に被はれ、殊に山頂部は密な灌木林を形成して居るのと地形の複雜であるために跋渉困難である。

前記の如く樺前山が厚い浮石質の火山灰礫の層に被はれて居るのに反して、フップシヌプリでは遙かに少量であるが、南面は北面に比して概して堆積量が多い。

フップシヌプリは惠庭山及樺前山と共に支笏湖盆地の形成後の補足噴火によつて形成されたものであるが、該三火山が略南東から北西の一線上に配置されて居ることは、支笏湖東のピシュウンモラッ



フツプシヌプリの北面　　支笏湖北岸オコタンペンよりの

プ、キムウンモラップ、紋別岳及イチヤンコッペ等がこれと平行した一線狀に配列する事實と共に、支笏湖周に於ける二大火山列として著しく注目に値する。

（附）中の岳（ペウレプヌプリ）　中の岳は元樽前山の外輪山の北部の一部の殘存したものと想像されて居る。高度約九三〇米の三角錐體狀の小隆起である。

白老臺地（タプコプ臺地）　樽前山の西部別々谷・社臺谷・白老谷の上流部をなす火山臺地であつて、遠望に於ては頗る美麗なる卓子狀をなしてゐる。

臺地の北端は支笏湖及シシャモナイ谷に面して約三〇〇米以上の急斜面をなし、處々に懸崖の露出がある、南端は概して連續せる懸崖列を形成して谷に望み、到處ツリカケ谷を見、瀑布處々に懸り、特殊の景觀を形成して居る。

臺地の上面は甚しく平坦であるが、略北から南に緩斜し、北端に於ては高度約五四〇米であるが、南端では四〇〇米乃至三〇〇米未滿に低下して居る。

臺地上には樽前山頂より約八粁の位置にタプコプ（六六一米）モユクウンタプコプ（六五五米）の二火山小丘南北に竝立し、臺地の單調を破つて居る。猶此の外にこの丘列の北西に方り支笏湖に面して東・西に並ぶ二小丘があつて支笏湖々畔から望む

時著しく人目を引いて居る。

この臺地の北端の斜面は過去の支笏湖盆陷沒により形成されたものであるが、現今は其の西半部のみ湖岸に臨み、東半部は一部はシシャモナイ谷の南壁をなし、其他は樽前山のために被覆されて居る。

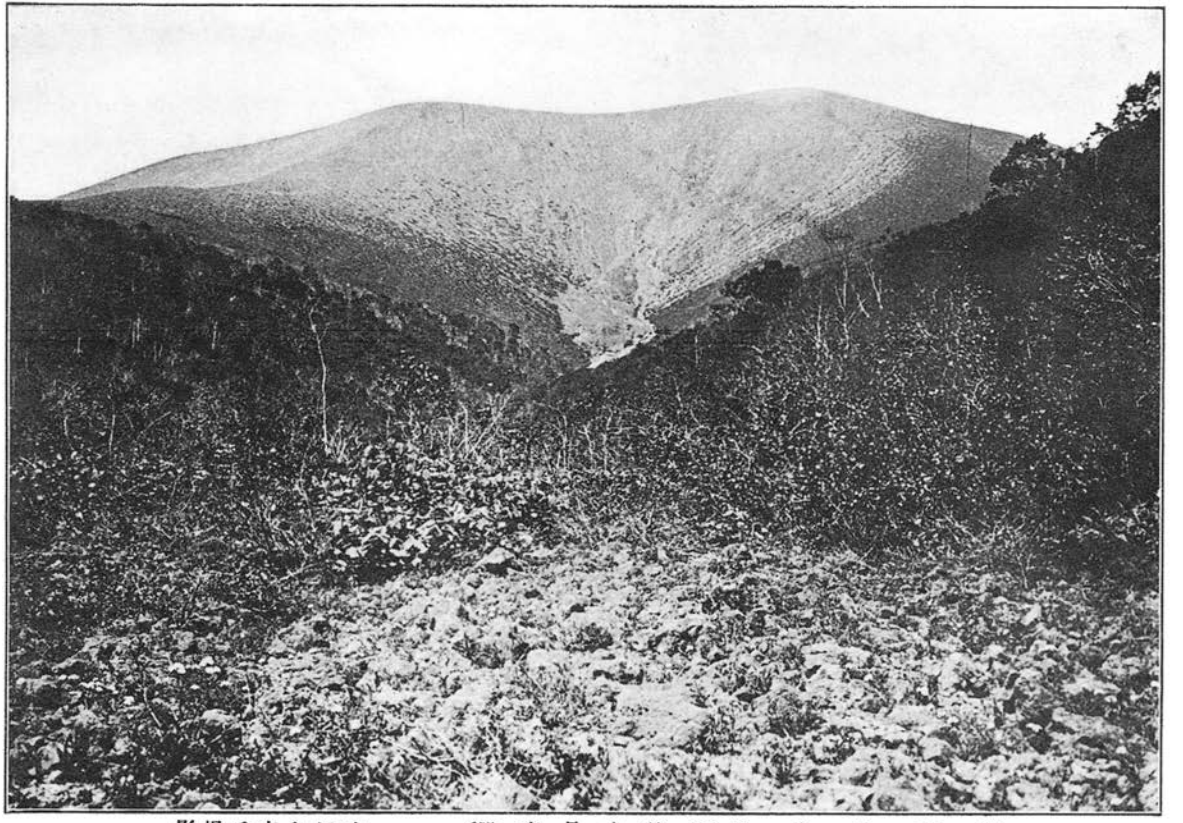
東部の小丘　樽前山の東部臺地の北東隅の支笏湖岸モラップに近くピシュウンモラップ（五〇七米）キムウンモラップ（四七七米）の二火山小丘南北に竝立し、紋別岳と相對して、千歳川の流出口を扼して居る。

此の外ピシュウンモラップの南東東約三粁には丸山（丸山遠見）（三二一七米）の低い隆起がある外特に記すべきものがない。

溪谷　樽前火山彙の地域の大部分は浮石質の火山灰礫の厚い堆積地であつて、透水性大なるため谷の多くは平時水流を有せざる所謂空澤をなし、地形上の一特徴をなして居る、水流の現出は侵蝕が進行して不透水地層に達するか、斷層の露出により、樽前山中では空澤の下流に於て突然多量の流水の現出する例が多い。しかしこの地域の西部では地形的に他の部分と劃然と分離し、深く廣く侵蝕された谷には多量の流水を見、下流には大なる河積地の發達がある。

樽前山の谷は概して幼齢であつて、斜面をV字形乃至U字形に侵蝕して降下するに止まり、未だ側面的侵蝕が充分に働いて居らない。北部支笏湖側の谷は湖岸に僅かの沖積地を形成して居るが、殆んど平時流水を見ないものが多い。その主なるものはフップシヌプリの東部ではクチャウワッカナイ・イパラセッピナイ外數條の空澤で、いづれも天然の登山路として利用されて居る。

フップシヌプリの西部はフップシヌプリと白老臺地の間の廣い谷に發達するシルス及シシャモナイの二條の空澤を見るが、後者は中部に於て白老臺から入る支流により一時水流を現出するけれども、



樺前山東麓（外輪山最高點）　武田久吉氏撮影

下流に於て消失し、再び溯岸に於て僅かに現出する、この下流は幅僅々二米未滿の峽谷をなして居る。

南部に開く谷はその下流は往時の溺れ谷であるラッパ狀の低平な谷に開き、中流部以上は常に空澤をなして居る。その代表的なものは覺生川(オボッケ)であつて、樽前山の火口瀨の下流である覺生空澤は中流部には四〇米以上に達する懸崖あり壯觀を極む。覺生本澤はその東部にあつて下流は一條となつて海に入る。この西部に樽前川がある。この下流には俗にガローと稱せらるゝ峽流があつて一異觀を呈して居る。

東部には顯著な溪流なく、淺い谷はすべてニシタップ谷に歸し、平時水流を有するもの殆んどなく、唯覺生川の東に接する一條のみ大なる空澤をなし、ニシタップ谷に合する附近より多量な水流を見る。

空澤の中流部には屢々懸崖があつて所謂空瀑をなし、その現出の高度が常に約四〇〇米内外にあることは注意すべき特徴である。

フップシヌプリの谷は山頂部より四方に放射狀に形成されて居るが、南部山側は地形の關係から其下流の發達が充分でない。谷の多くは甚だ深くV字狀に侵蝕され、水流を有するもの少なく、しかも下流は水流消失するか著しく少量となる。

白老臺地の頂面には著しい谷がないが、其の南端は別々川(ベッベッ)・社臺川(シャダイ)・白老川(シラオイ)等の谷に臨み、著しく侵蝕された地貌をなし、壯大なる懸崖の連續を見る。臺地上の水流はこの懸崖より屢々瀑布をなし流下して居る。臺地の北端は急峻な小なる谷が多數に發達して居るが著しい水流を有するものがない。

樽前山の東部山側の放射谷は略ニシタップ谷に終つて、その以東の臺地の谷は樽前山のものと系統を異にした臺地上に形成された谷である。

その著しいものはニシタップ谷・小糸魚谷・苫小牧谷及勇振谷で、前三者は殆んど同一個處から發源して、南及南東に向ひ、後者はこの三者から北に離れた丸山の北部に發源して東南東に向つて居る。いづれも高度約一六〇米内外の同高線附近より水流を有し、中流以下の水量極めて豊富且清冽であつて、苫小牧川の如きは簡單なる沈澱操作を經たるのみで直ちに王子製紙會社苫小牧工場の用水及飲料水に使用されて居る。

ニシタップ、小糸魚（イトイ）、苫小牧（トマコマイ）の三川は平原部に於ては著しく蛇行し、海濱に於てしばらく海岸線と平行して東流し、しかる後海に入る。苫小牧川の如きは海岸線と平行して流れる距離實に四粁に達する。

湖沼　樽前火山彙の南部山麓には大小無數の池沼があつて、處々に丘地の森林を背景にした幽邃なる水境を現出し、水禽の群游を見る。

しかし山地では東部ニシタップ谷の上部に唯一の口無沼があるのみである。

口無沼はニシタップ川の上流高度約一六〇米にある一の堰塞湖で、略南北に瓢簞形を呈し、其の長徑約五〇〇米短徑平均約一五〇米を算する。その上下いづれにも注入口乃至流出口を見ない。口無沼の名は蓋しこれに由來して居ると思はれる。

現今の地形及植物景觀から推察すると、水面はかつて一層上部迄擴大したことがあるらしく思はれる。周圍は原始的な針闊混淆林に圍まれて幽邃な一地區を形成してゐる。

三　登山路

樽前火山彙の地域は概して地形が簡單であつて、北海道の山地に於て最も不愉快なネマガリダケの密生する區域少なく、跋渉比較的容易である。

（一）檜前山の登路

檜前山は其の傾斜緩漫で山中何等の險なく、登降極めて容易である。

イ　南側よりするもの。

この方面は檜前山の表口とでも云ふべき側で、便宜上錦多峯驛を基點とする。

1　覺生空澤

錦多峯驛より室蘭街道を西に約二粁餘行き、更に約四粁久末農場（舊高木牧場）を通過して、覺生の左股の谷俗稱空澤に入り、約六粁で澤の右岸の岸上の細徑に出で、白樺林を通過して約二粁、開闊な燒石の高原に出て、更に約二粁で外輪山に達する。

この登路は最も人の登降する路線で、微かながら細徑を認むることが出來るのみならず、極めて平易に登降し得る。普通錦多峯驛から五時間內外で外輪山に達することが出來る。

此の登路で水を得ることの出來る最後の地點は、空澤の入口の右岸の一地區で、實に清冽甘美な湧泉であるが、大正十一年秋に登山した友人の話によると、上流の空澤からその上緣に登る地點附近にも湧泉が出來たと云ふことである。

2　覺生本澤

一部を除いて全く路らしいものはないけれども、可成上流迄清冽な水流のあることは一特徵である。

覺生空澤に入る路の途中で、久末農場の先から右股に入り、何處迄も澤を登つて外輪山の南部に出るのである。途中下半部はアキタブキ其他の高大な雜草の多い狹い谷を水流を徒渉して登り、上半部ではイツツヽシ其他の灌木に苦しむことを覺悟せねばならないが、時々熊の通行路が斷續して居るので幾分補助になる。しかし愉快な路線ではない。

猶この澤に入るには錦多峯川に沿つて約四粁入り、左手の臺地に登り、御料の林道を行けば覺生本澤に出るから、こゝから入つても同じことである。

錦多峯から山上迄五時間以上を要するものと豫定する必要がある。

3　樽前川

錦多峯から室蘭街道を西に約四粁行き、字樽前から樽前川の谷に入り、約四粁俗にガローと稱する峽流の上部に出る。その橋を渡り、馬車道を左へ左へと森林中を行くと樽前川の支谷の空澤に出る。これをどこ迄も登れば樽前山の西峯の直下に出る。しかしこの路線は錦多峯から少くとも六時間を要し、森林中では極めて迷ひ易く、前同樣愉快な登路ではない。

ロ　東側よりするもの

1　錦多峯川上流

錦多峯驛から錦多峯川の谷に入り、約六粁で御料林に入り、實に心地のイ、林道を約六粁内外行けば、針葉樹林の下草がイハツヽジ、イチヤクサウ屬、蘚類等で一面に疊を敷いた樣な美しい處に出る、そこで左折して、路のない林中を登るのである。森林中の氣分は全く素敵で、針葉樹林の落付いた氣分もいゝが、中腹以上のガンピ林の明快な氣分は忘れることの出來ない印象を殘すであらう。

森林帶の終りではウコンウツギ、ミヤマハンノキ等の藪で一寸困難するけれども、間もなく東峯直下の裸地に出る。

錦多峯驛から東峯の頂上迄約六時間内外で到達する。路程は比較的長いけれども興味の豊かな路で、この路と覺生空澤とをかけて上下することは、錦多峯驛を起點としての路線では最も面白い登山である。

2　郡境の刈分道

王子の輕便線で十三哩迄行き、林道を支笏湖岸モラップの上部に出で、そこから左折して勇拂・千歳の郡界の刈分けにつけられた馬車道を行くと一時道が切れるが、何でも尾根らしい處を目標にして登ると、郡界の測標を追つた刈分けを行くことが出來る。しかしそれも上方では兎角見失ひ勝ちになるから、その邊からは唯上へ上へと適當な方向に登りさへすれば、北東面から東峯にとつつくことが出來る。十三哩から東峯の頂上迄約六時間内外を要する。中腹の針葉樹林は心地がいゝが、下部の馬車道の雜草・雜木の茂生は不愉快である。

ハ　北側よりするもの（支笏湖方面）。

1　モラップ

王子の輕便線で支笏湖畔に出で、舟又は陸路でモラップに行き、そこの貯木場のある邊から西約二粁の間の湖岸に開口する空澤のいづれをとつても、約三時間内外で東峯附近の外輪山に達することが出來る。

私はこの西の方のクチャウワツカナイ（隱れ水の澤）を登つた。兩岸の懸崖は壯大であるし、白樺林下のトドマツ、エゾマツの苗木の密生狀態は一異觀であつた。途中二ヶ所許り空瀑があつて横道をとつた。

2　シシャモナイ

支笏湖の湖畔から舟で三時間、徒歩約四時間でシシャモナイに達する。

俗にシシャモナイと呼ばれる湖岸には約三條の大澤が開いてゐるが、其の西端のシシャモナイ澤の澤口附近から木材搬出路を奥に行くと、水のある澤に出る、それについて登ると左に空澤が開ける、その空澤に入つて行けば間もなく開闊な燒石原に出る。

前方にはフップシヌプリ・中の岳・樽前山が眼近くそゝり立つて、背後は支笏湖を下瞰し、非常に眺望がいゝ。

こゝからすぐ前方の尾根にかゝると、間もなく集塊岩盤の露出した非常に足場のいゝ斜面になつて、更に可成登つて圓頂丘の北方の岩原に出る。そこから右折すれば西峯であるし、左折すれば東峯に達する。湖岸から約三時間乃至四時間の見當で充分と思ふ。

途中の針闊混淆林は可成荒されて居るけれども、猶未だ原始の面影を存し、澤の中部では水成岩のいゝ露出があり、登りいゝ且興味多い路線である。

猶東部の空澤(シルス)の左岸に沿つて森林中を行つても、上部では同じ燒石原に出ることが出來る。

二　西側よりするもの。

1　白老(シラヲイ)臺地よりの登路

社臺(シヤダイ)驛から其のすぐ北の谷であるベツベツ澤に入り、約六粁で御料林に入り、林道を約二粁で臺地に上る。臺地の林道は一本道で迷ふことはない。更に約八粁で高大な根曲り竹の間に郡境の刈り分けを右に發見し得らるゝから、それを西峯さして登れる筈だが、最早刈分けが大部分閉ざされてしまつて居るために、通過困難で且非常に不愉快である。私はかつて社臺から約五時間を費やして刈分道を分けて見たけれど、遂に斷念した。しかし西峯から刈り分けを下つて來ることは幾分登るよりは樂だらうと思ふ。

別々澤の上流には壯大な懸崖があり、處々に瀑布もかゝつて居り、一遊の價値がある。また澤の侵蝕が深いので第三紀層の水成岩地が火山岩に被はれた狀態を見るのにも都合のいゝ處である。

ホ　頂上圓頂丘への登路

私は東部の崩壞した斜面から登降したが、頂面に登る今一息といふ處で一寸足場に困難した。猶圓頂丘の南西側からも登れさうであるが、其の他の斜面からは容易に登れさうにも見えない。

(二)　フップシヌプリの登路

フップシヌプリは山容が非常に憧憬的であるが、その位置が偏在して居るために、登山者も極めて稀で、從つて登路の如き餘り知られて居ない。私は數回この山へ登攀を試みて、いつも失敗を繰り返へして來た。唯一度大正十年秋一人の友人と共に樽前山から尾根傳ひに南面を約一千餘米の一支峯迄登つて、この方面から頂へ確實に到達出來る自信を得たのみで下山しなければならなかつた。

しかし大正十一年七月多年の宿望を達して、人夫一人を同行し、シシャモナイ側から登つて北面に下り、完全に其の最高峯を極めることが出來た。

イ　シシャモナイよりの登路

七月二十三日、苫小牧より輕便線で十三哩に行き、モラップを經て、支笏湖岸の道をシシャモナイの東部湖岸に辿りつき、露營した。

七月二十四日、午前六時露營地を出發し、シシャモナイ東部の大空澤の左岸を傳ひ、樽前山北西部の岩原に出て、その左手に聳ゆる家屋形のフップシヌプリの一支峯の東部の尾根に登り、尾根傳ひに主峯の直ぐ南の一支峯約一一〇〇米にとりつき、更に灌木林と苦鬪して午後十二時四十五分頂上に達することが出來た。

途中中腹のガンピ林の印象はたとへ樣のない明快な心地のいゝものであつた。恐らく樽前山案中最明美な森林の一であらうと思ふ。

處々に笹原があるけれども、或程度迄は避けて通過出來る。下りは頂上から少し北東によつた尾

根の一端から一直線に灌木の繁みを傳つて下り、約四〇分で水のある谷に入り、その水流を傳つて下る内懸崖に出會し、やむなく右手の比較的低い尾根に登つて見たが、その下が又懸崖であるのに驚いて、左の非常に高い尾根に移り、厚い笹原と苦闘してどうにか露營地に歸着することが出來た。時間は頂上を午後一時十五分に出て、露營地に五時についた。

總じて北面は地形が非常に複雜で、且中腹に懸崖線が存在し、尾根は高大なネマガリダケの厚い籔に被はれ、この方面からの登降はむしろ徒勞に近い樣に思ふ。

ロ　樽前山よりするもの

樽前山の火口原の北部からフップシヌプリに連なる尾根を中の岳を越へて、約一時間でフップシヌプリの南側の裸地に出る。

ここから更に笹の多い急な斜面を約一時間登ると、約一千米のフップシヌプリの支峯にとりつくことが出來る。それから少し回處になつた厚い笹原のある地域を經て、尾根傳ひに最高點に達することが出來る。勿論この路線はモラップ方面から樽前山北東部直下の岩原に出て、右折し、すぐフップシヌプリの南面にかゝつてもいゝと思ふ。

しかし注意すべきことは、錦多峰から樽前山を越えて行くのでは、一日で往復は困難だらうと思はれることである。

(三)　山中の主要なる林道

樽前山彙中東部及南部の山麓に近い臺地では、御料林で作つた林道が縱横に通じてゐるので、その一帶の原始的森林の幽邃な氣分を味ふのに非常に便利である。

その主なるものは東部では輕便鐵道線に沿つて苫小牧からモラップに出る馬車道、苫小牧字坊主山から臺地を北西に苫小牧川と小絲魚川との間の臺地を通過して口無沼附近に達するもの、更に字勇

振の南から前記の馬車道に分かれて南行し、口無沼の東部を經てニシタップ谷の右岸及左岸を通じ、ニシタップ谷の下流に出るもの等がある。

輕便線で十三哩迄行き、口無沼を經てニシタップに出るのは、最も興味のある一日行程である。

檜前山の南麓ではニシタップ谷の下流から右岸の臺地に登り、北西の方向に臺地を行き、更に西に折れて覺生空澤の中流に出るものがある。

北部には湖畔から支笏湖岸をモラップを經てシシャモナイに達する林道があつて、支笏湖の風光を賞しつゝ湖岸の森林を縫ふ氣分は他に比類がない。この途中フップシヌプリの北麓大崎にはその岩壁の洞穴にヒカリゴケの豐産するものがあり、一見の價値がある。

西部には別々川上流から白老臺地に登つて、白老、千歳の郡界を西にピプイへ通ずる村道がある。

この道は別々谷の懸崖の壯觀を見ることが出來るが、森林の美觀は他の部分に比して遙かに劣る。

しかし臺地の登り口附近から北西に白老岳・ホロホロヌプリ等を近く望む景觀は壯觀である。

四　植物景觀及其の變遷

(一)　植物景觀

檜前火山彙の植物景觀は概括して高度に應じて四帶の變化を認めることが出來る。即ち平原帶・喬木帶・灌木帶・裸出帶であるが、其の帶線の配布の狀態は部分的に差異がある。

平原帶と云ふのは檜前山の南麓海岸に沿つた狹い平原の部分であつて、汀線から高度約四〇米の段丘の末端に亘つて居る。

汀線に近く海岸植物の群落があつて特殊の植物景觀を形成し、其の第一線は全く植物を生じない砂漠で、其次にハマバウフウ・オカヒジキ等の貧弱な群落をなすが、それに續いて低い砂丘にかけてシ

ロヨモギ・ハマナス・ハマバウフウ等を主にした可成豐富な群落を形成し、ハマナスの開花了る時季には美觀を呈する處がある。

この砂丘から山麓の段丘に至る間の平原には、高低の兩地形が帶狀に交互に現出し、植物景觀もそれに應じて變化して居る。

即ち凸起した地區は一樣な草原で、六月から九月に亘つて美しい花野を現出する。殊に晩春のタニマノヒメユリ、初夏のニックワウキスゲ、ノハナシヤウブ、秋のゴマナ、オミナヘシ等の滿開の景觀は實に壯觀である。この間に稀にエゾズミ・ミヅナラ・オニウコギ等の木本が點生して居るが生長が不良である。

凹入した地區は一帶に濕地又は池沼をなして特殊の植物景觀を現出して居る。即ち濕原には一帶にキタヨシが繁茂し、その間にエゾハンノキが點生し、キタヨシの間にはミヅバセウ等も見られる。そして森林としては處々にエゾハンノキの小團林が見られるのみである。

池沼にはヒツジグサ・カハホネ・ミヅガシハ・キタヨシ・ガマ・多くの莎草科植物等を見ることが出來る。そしてキタヨシ・ガマ等は主として周邊部に、ミヅガシハ・カハホネ等はその內方に、ヒツジグサは最も內方に生ずるのを普通とする。

かゝる景觀も苫小牧附近では稍趣を異にしてヤチヤナギ・エゾマルバシモツケ・イソツツジ・ツルコケモモ等の泥炭地に普通な植物群落が現出し、又サハギキヨウが多生し、夏秋の候美觀を呈する。

喬木帶は南部山麓約四〇米以上の概して原始的森林に被はれた山地であつて、その上部限界は樽前山の西側では約七〇〇米乃至九〇〇米、其東・北・南側では約五〇〇米であるが、フップシヌプリでは實に約一〇〇〇米に達して居る。

そしてこの景觀は下部から上部に下部落葉闊葉樹林・中部針闊混淆林・上部落葉闊葉樹林の三帶の

推移を認めることが出來る。

下部落葉闊葉樹林は五〇米乃至一〇〇米以下の樽前山の南麓丘地の部分を占め、主としてヤマモミヂ・ミヅナラ・サハシバ等の多い森林を形成して居る。其の上部に於ける針闊混淆林は樽前山では約四〇〇米以下、フップシヌプリでは約六〇〇米以下の山地に汎布し、エゾマツ・トドマツ及其他數種の落葉闊葉樹との混淆林を形成し、山中最も幽邃な氣分に富む區域をなして居る。針葉樹種の發達は、樽前山の東部斜面に最も良好で、フップシヌプリは甚だ不良である。殊に支笏湖岸大崎一帶では殆んど全く闊葉樹林で、ウダイカンバの大樹が多い。上部落葉闊葉樹林は樽前山の西側では七〇〇米乃至九〇〇米以下、北・東・南側では約五〇〇米以下であるが、フップシヌプリでは約一〇〇〇米以下、白老臺地では六〇〇米以下の山地を占め、エゾノダケカンバを主とし、ナナカマド・ミヤマハンノキ等を混じ、猶エゾマツ・トドマツ等も幾分混淆して居るが、この上部限界線附近ではミヤマハンノキが多く、ウコンウツギ・ミネヤナギ等の灌木帶性の灌木の繁茂が甚しい。

灌木帶は其の發達充分でないが樽前山ではその西側では約七五〇米乃至九五〇米以下、北・東・南側では約五五〇米以下、フップシヌプリでは一〇〇〇米以上の山頂部を占有し、主としてミヤマハンノキ・ウコンウツギ・ミネヤナギ・エゾノダケカンバ等の非常に密な叢林をなしてゐる。

裸出帶はフップシヌプリでは殆んど見ることが出來ず、僅かに岩石の露出した部分等に局部的に點在するのみであるが、樽前山では前記の灌木帶以上の上部山側一帶を包括し、その下部は主にイソツツジ・シラタマノキ・マルバシモツケ・ウコンウツギ等の矮小灌木の密な群落を形成するが、山側を登るに從つて疎生し、八〇〇米以上では山骨著しく裸出し、所產植物の種類も限定されて來て、概して草本が多く、タルマイサウ・ウラジロタデ・ミヤマヌカボ・ヒメスゲ等を主とする。

上記の植物景觀の帶狀分布に於て、樽前山とフップシヌプリとに於て高度的に非常に差があること

を見逃し得ないが、その原因は實にこの兩火山の火山活動による地表形成の新舊によるものであつて、換言すれば樺前山の火山活動が比較的近い過去に於て其の植物景觀に大なる影響を及ぼしたことによるべく、此の見地から私はこの山彙の植物景觀を老成型と幼稚型の二型に分けた。

即ち樺前山に於ける一〇〇米以上の山地は後者に屬し、其の以外の山地――フップシヌプリ・白老臺地・東部臺地・高度一〇〇以下の丘地――は前者に屬する。

この幼稚型植物景觀は過去に於ける非常に大量な火山噴出物の堆積のために、殆んど全く當時の地上植物を消盡して裸出した地表に新らしく現出したもので、其後次第に老成型への過程をとりつゝあるものである。この景觀の特徴は一般に各植物帶の上界線の甚しい降下と裸出帶の發達とであつて、其の裸出帶の下部限界は山側によつて異つて居つて、東部では概して西部に比して低く、其の最大差は實に四〇〇米に達して居る。斯樣な顯著な差が現出したことは樺前山の火山活動の影響が概して常に東偏性であつたといふ事に對するいゝ資料である。

老成型植物景觀は其の生成が比較的古く、其間に種々の植物を生じ、次第に高位に及んだために幼稚型のものに比し老型であつて、フップシヌプリに於ける各植物帶の上部限界は樺前山に比して著しく高く、其の峯頭に於て猶灌木帶の發達を見る狀態である。

以上の如き植物景觀も局部的に稍趣きを異にする處があつて、白老臺地の北側湖に面せる急斜地では、僅々三〇〇餘米の高度迄に下部からウダイカンバ・ミヅナラ・イタヤ等を主とする落葉闊葉樹林、エゾマツ・トドマツ・エゾノダケカンバ等を主とする針闊混淆林、エゾノダケカンバを主とする落葉闊葉樹林の三條の變移が現出するが、臺地上は再び針闊混淆林の景觀になつて居る。

又東部臺地の約一〇〇米乃至一五〇米内外の高度では針葉樹の純林と闊葉樹の純林とが團狀に點々交雜して居る處がある。

（二）植物景觀の變遷

先きに樽前火山彙の植物景觀を幼稚・老成の二型に區別し、前者は樽前山の火山活動の影響によつて既に形成されてゐた植物景觀が埋沒破壞されて、其後新たに形成されたものであることを指摘したが、この過去に於ける植物景觀の埋沒破壞の證跡は樽前山腹の空澤の兩崖に露出する地層中に歷然として保存されてゐる。

樽前山の南側にある覺生空澤で見られるものは、地層の最下部は水中起原を示す礫岩であつて、其の上部には粘土狀に變質した赤褐色の火山灰礫層があり、其の上部は厚い火山灰礫の互層で、其間に厚さ約三糎內外の炭化した比較的新鮮な狀態に保存された落葉・小枝・根・莖等の植物遺體層が介在して居り、屢々炭化した樹幹が直立したまゝで見られることがあり、其の大なるものでは直徑往々三〇糎に達するものがある。

此の層は下部高度約一〇〇米內外で現今の地表に露出して居るが、上部は高度約三八〇米內外迄迄ることが出來る。

又北側のシシャモナイ澤及シルス澤では、其の最下部は南側と同じく水中起原である礫岩或は砂岩の層で、其の上に厚い凝灰岩及セメント狀に凝固した火山灰礫層を見るが、其の上は厚い非結合性な火山灰礫層の互層である。其間には南側に見られる如く一條の新鮮な狀態に保存された炭化植物の遺體層が約三糎の厚さで發達して居る。其間には又南側と同じく直立したまゝ炭化した樹幹の露出があるが、其量は南側よりむしろ多い位である。この層の高度的下部限界は不明であるが、上部は約五〇〇米附近の高度迄迄ることが出來る。

この炭化保存された植物遺體層から採集したものゝ內から檢出することの出來た植物は、エゾメンマ（羊齒類）エゾマツ・トドマツ（針葉樹）エゾノダケカンバ・ミヤマハンノキ（闊葉樹）禾本科及莎草科

に屬する草本等であるが、又甲蟲の死骸も多量に埋藏されて居た。

この樺前山の南北兩斜面に發達する二つの空澤の地層の所見によると、略其の埋藏時期を同じくするものと考へられる一層の植物遺體層が存在し、それが高度的上限界は三八〇米（南側）乃至五〇〇米（北側）に達し、下部は高度約一〇〇米（南側）に及んで居る。そしてこの南側に於ける下部限界が現今の地表に露出して居るといふ事實は當時の火山噴出物の破壞的堆積が、南側の高度約一〇〇米以下には及ばなかつたことを示すものである。且又シシャモナイ澤やシルス澤の高度約五〇〇米に於て猶屢々直徑三〇糎にも達する樹幹の埋藏されたものを發見することから考へると、現今著しく裸出して森林を缺いて居るその部分にも、過去に於ては猶美麗な喬木林が發達して居たものであることが推知されるのである。

しかし白老臺やフップシヌプリ等では斯樣な遺體層の存在を認めることが出來ないし、又比較的新しい火山噴出物の堆積も甚しくない。

以上の如く山地に於て認めた過去に於ける植物埋沒の證跡は南部山麓の平原でも見ることが出來る。

勿論平原部では地層の良好な露出地を得ることが困難であるために充分な觀察を缺くけれども、河岸の崩壞地や土木工事等の觀察によつて多少の資料を得ることが出來た。

平原部の地層の上部は山地と同じく厚い火山灰礫層であつて、其の上部に約三〇糎以上に達するキタヨシの遺體層を認め、時にイタヤ・ヤマモミヂ・ケヤマハンノキ・ミヅナラ等の落葉闊葉樹種の落葉の堆積をも散見した。斯樣な遺體層はしばしば海岸砂丘の下部にも見られることから、過去に於てキタヨシの繁茂した植物景觀が現時の汀線に一層近い區域迄發達して居つたものと考へられる。

又苫小牧附近では非常に厚い泥炭層を埋藏する區域があつて、其の層の間にはエゾハンノキの樹幹

を見ることが出來る。

斯くの如く過去の激烈な火山活動の影響によつて、樽前山の植物景觀が破壞され、裸出した地表面には種々の植物の侵入によつて次第に植物景觀が回復されて、現今では其中腹以上迄森林に被はれるに至つた。しかしこの狀態は猶未だ頗る不安定なものであつて、更に上部山側へ上昇的變化の過程にあつて、漸次フップシヌプリ等で見られる老成型の植物景觀に到達しやうとする傾向を認むるのである。

前記せる如く樽前山彙に於ける現在の植物景觀は、下部から上部に平原・喬木・灌木・裸出の四帶に大別したが、それ等は各々外觀上判然たる特徵があると同時に、相互に非常に密接な連鎖を有して居る。

今數種の森林樹種について其の高度的分布を見るに、ケヤマハンノキは山麓部に限られる樣であるが、エゾマツ・トドマツ・ナナカマド・エゾノダケカンバ・ミヤマハンノキ等は、喬木帶から裸出帶の下部に迄に及んで居る。しかし今喬木帶中針闊混淆林について分布狀態を見るに、其狀況は下部から上部へ漸減的なもの、中部から上下に漸減的なものとの二型に分けることが出來る。前者の例であるトドマツ・エゾマツは、針闊混淆林帶では主要林木をなして居るが、灌木帶では著しく劣勢となつて、殊にエゾマツは概して針闊混淆林帶を通じて上層の林冠を形成して居るが、上部落葉闊葉樹林では最下層の幼齡樹として現出するのみである。

後者に屬するエゾノダケカンバは强い陽樹で日蔭に堪へないもので、森林を形成する場合常に最上層の林冠を占むる傾向があるが、斯樣な樹種の繁茂するのに適當な地表の裸出或はそれに近い狀態が一時其の部に及んだものであらうと考へられる。又下部帶のものは上部帶のものに比して概して老木であることから、エゾノダケカンバ林の形成が下部から上部へ次第に進行したことを想像し得る。又

喬木帶の上部及灌木帶ではミヤマハンノキが最も多く繁茂してゐるが、該樹種はエゾノダケカンバと共に常に森林形成の前驅者として現出するものと見ることが出來る。

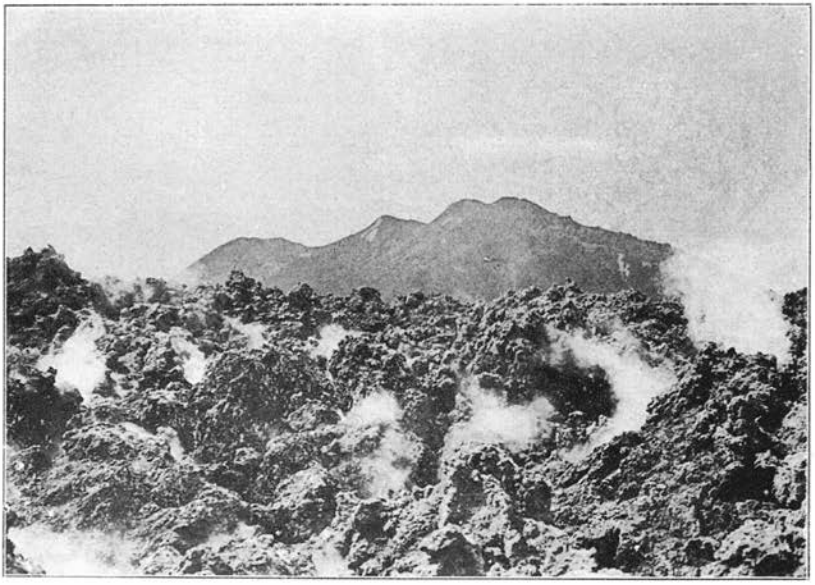
これによつて樽前山に於ける森林形成の第一歩は、エゾノダケカンバ・ミヤマハンノキ等の強い陽樹によつて行はれ、次で其の樹陰にエゾマツ・トドマツ等の侵入を見、やがてそれ等の樹種の成長と共に上部の陽樹を壓倒して、針葉樹の優勢な森林景觀を現出するに至るのであるが、樽前山彙に於ける觀察では、エゾマツは概してトドマツに先んづる樣である。

又裸出帶の植物について見るに、それ等が灌木・喬木兩帶に及ぶものが少くない。即ちウコンウツギ・エゾマルバシモツケ・イソツヽジ・シラタマノキ・コケモモ等は灌木帶及上部落葉闊葉樹林に於て樹下の群落として現出し、漸次下部に減少して居る。之等の植物は裸出帶に最も多く繁茂するものであるが、之等が喬木帶に至つて猶劣勢的に現出してゐることは、種々外的條件が之等の植物に不利であるといふ理由によることも勿論であるが、一方に於ては過去に於て之等の植物の發生に都合のいゝ狀態即ち裸出帶に於ける狀態の如きが此區域に存在して居つたものと考へることが出來る。

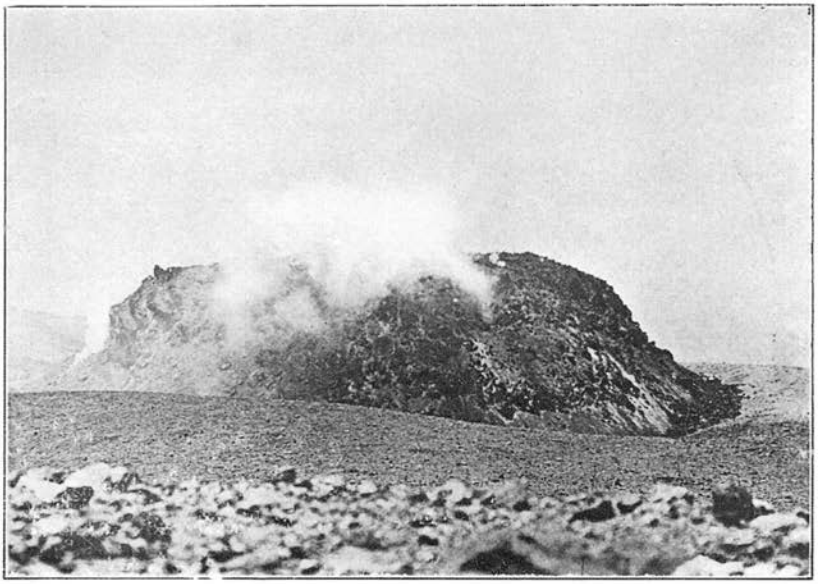
又私が裸出帶として區劃した部分について見ると、其の土壤が火山灰礫の堆積層であつて乾燥性であることや、高處に位置して居るために荒い氣候に曝され易い樣なことから高山乾原の性質を有し、又山側の傾斜の急なことや、土壤の水分保留性が大變少ないことや、崩壞性が大であること等によつて著しく植物の生育が阻害されて、特殊な植物景觀を形成して居る。即ち其の植物は概して著しい乾燥に堪え得る樣な形態をもつ高山植物であつて、それ等は山側に沿つて下部から上部に略次の樣な分布をなして居る。

（イ）　ウコンウツギ・エゾノマルバシモツケ・イソツヽジ等の灌木の密生する區域。

（ロ）　イソツヽジ・シラタマノキを主とした小灌木の稍密生する區域。



檜前山新出山最高點とフツプシヌプリ



東方の外輪山頂より新出山を望む　武田久吉氏撮影

（ハ）　コメバツガザクラ・イハヒゲ等の矮小灌木の疎生する區域。
（ニ）　タルマイサウ・ウラジロタデ等の草本の疎生する區域。
（ホ）　ヒメスゲ・ミヤマヌカボ等の禾本・莎草を疎生する區域。

等の順序を認めることが出來て、下部の灌木群落から上部の草本群落へ推移して居るが、火口原内ではその部分が外部山側に比して氣象的の條件が幾分和はらげられるために再び下部に生ずる灌木が見られるが、其の生育の狀態は僅かに點生するのみである。

裸出帶に於ける斯樣な狀況は、其の山側に於ける植物景觀の變遷の狀態を示すもので、裸出部に最初に發生するのは草本群落であつて、これに次いで矮小灌木群落の侵入を見、更に森林樹種の侵入を見るに至るものである。こゝに注意すべきことは最初に侵入する森林樹種は、エゾノダケカンバにしてもミヤマハンノキにしても、いづれも其の種子は翅を有して飛散し易く、且大量に生産されるものであることである。

かくの如くして裸出帶が漸次樹木要素の侵入によつて森林の形成さるゝに至ると、裸出地に優勢であつた植物は一時殘存するが漸次他の一層樹陰に堪へ得る植物の侵入によつて壓倒される。其の順序は先づヒメノガリヤス・クルマバヒヨドリ等の草本の侵入を見、これに次いでエゾメンマ・フッキサウ等の陰地性群落が發達する傾向を認め得る。從つて概して充分に發達した下部帶の森林では、その樹下の群落は主としてエゾメンマ・フッキサウ等を主にした景觀を現出して居る。

針葉樹林の樹下群落は屢々特異な狀態を現出し、其の林冠の甚しい發達の結果として樹下に射入する光線の減少を來し、從つて殆んど樹下群落を缺き、厚く堆積した腐植土には屢々シャクジャウサウ・ギンリャウサウ等の腐生植物の生育を見る。又林冠形成の幾分疎な處では概して蘚類の良好なる發生を見、毛氈狀を呈し、之にアスヒカヅラ・コイチヤクサウ・ベニバナイチヤクサウ・コフタバラン・イチ

大正十三年五月發行

エフランン・イハツツジ等の生育するのを見る。

以上幼稚型植物景觀について記して來たが、老成型植物景觀について注意すべきことは、樹下にネマガリダケが甚しく密生すること、針闊混淆林の針葉樹の更素はトドマツが多い等のことである。

それからフップシヌプリでは其のエゾノダケカンバを主とする陽性落葉闊葉樹林は約一〇〇〇米の高度に於て陽性灌木林に推移して居るが、フップシヌプリの森林で注意すべき事は、南側のものは北側のものに比して概して森林が若く、ネマガリダケの發生も甚しくないことであるが、これはこの方面が樽前山の火山活動の影響を可成ひどく受けて居ることを示すものである。

今參考のために支笏湖周に聳ゆる他の火山の植物帶を見ると、支笏湖の東部に聳ゆる紋別岳（八六五米、死火山）では、

針闊混淆林　約五〇〇米以下。
エゾノダケカンバ林　約七〇〇米以下。
亜喬木林又は灌木林　約八〇〇米以下。
草本帶　約八〇〇米以上。

支笏湖北岸の惠庭山（一三一九米休火山）では、

針闊混淆林　約六〇〇米以下。
エゾノダケカンバ林　約一一〇〇米以下。
灌木林（ハヒマツ現出す）　約一二〇〇米以上。
矮小灌木　約一二〇〇米以上。

であつて、各植物帶の高度に少なからざる差異があるが、フップシヌプリに於けるエゾノダケカンバ林の上限界が約一〇〇〇米であつて、紋別岳と惠庭山との中間に位する事實は、必らずしも絶對的の

ものではなくて、其の山の位置其他のいろ〳〵の條件の合成による相對的關係にあるものと認むべきである。

斯樣に私は樽前火山彙の植物景觀を老成型と幼稚型とに分けたけれども。先にも一言した如くこの兩型は決して絶對的對立ではなくて、幼稚型植物景觀と稱するのは要するに老成型植物景觀への過程であつて、將來著しい火山活動の大なる影響のない限り、下部の植物景觀は次第に上昇して現今廣大な區域を占めて居る樽前山の裸出帶も被覆され、且つ植物帶の高度の部分的不齊一も平均せらるゝに至るであらう。

こゝに附記すべきことは、樽前山のハヒマツ生育の狀況である。ハヒマツは山彙を通じて唯樽前山西峯の北西側及南西側約七〇〇米乃至九〇〇米の高度に亘る喬木林の上限界附近から裸出帶の下部に亘つて圓狀に點生し、極稀に東部山側の喬木帶上部に見られるのみである。

斯樣な局限的な現出の理由は過去に於ける樽前山の火山活動の影響が概して東偏性を示して居つたために、西部は東部に比してその激甚な埋沒作用を免かれたため、其當時即ち埋沒以前の樽前火山の基礎山體の上部植物景觀の重要な要素であつたハヒマツを、主として西部の山側に殘留したものではないだらうかと思はれる。

そして更に興味のあることは、フップシヌプリにはハヒマツを全く見ないことであるが、これは該火山の成立が樽前山の埋沒以前の基礎山體よりも新しい起原を有することを暗示して居るものではないかと思はれる。蓋しハヒマツは他の松屬の種子と異なり非常に撒布に不便な種類であつて、斯樣な樹種の現出は普通第四紀洪積世に於ける寒冷氣候の現出した際の遺物として考へられて居るからである。

猶樽前火山彙に於ける植物の分布について興味のあることは、支笏湖附近の他の山地にあつて樽前

火山彙を通じて現出しない種類はキバナシヤクナゲ・チシマフウロ・メタカラカウ・エゾリンダウ・コタニワタリ・リヨウメンシダ・オホバキスミレ等であるが、幼稚型植物景觀の區域には現出しない種類も亦少なくない。その主なるものはサンカエフ・シラネアフヒ・フクロシダ・アヅマイチゲ等である。又全地域を通じて極めて稀に且つ局部的に發見されるものには、東部針闊混淆林中に於けるゴゼンタチバナ、東峯の山側に於けるイハウメ、覺生空澤の上流に於けるミネヅハウ、西峯山側のハクサンチドリ等を數へることが出來る。

以上の如き植物景觀の變化と共に見逃すことの出來ないのは雨水の侵蝕による第二次的變化である。

樽前火山彙殊に樽前山の火山噴出物の堆積した土壤は非常に崩壞し易いために、雨水の侵蝕作用による地形の變化が著しく、從つて其の部分に植物景觀の第二次的變遷を來すのである。

樽前山頂部の外輪山の地形が水蝕によつて著しく變化して、其の北側の如きは二つの火口瀦の發達により殆んど原形を失ひ、其の一部が中の岳の隆起として殘留したものであらうといふ推定は前記した通りである。

かゝる大なる水蝕の結果は山側は椀狀に深く削り去られ、其の結果として下部の斜面に岩礫の堆積原が形成され、第二次的に著しく裸出帶が降下する。

斯樣にして形成された裸出帶は、シシャモナイの上流、クチャウワッカナイの上流、覺生空澤の上流等に見られ、猶小規模のものは他の空澤の上流部にも見ることが出來る。

この堆積原の植物景觀は特殊な狀態を呈し、磊々たる岩礫性の地表は全く地衣・蘚苔に被はれ、殊に地衣類に屬するハナゴケの一種が多い。其の間に矮小な乾燥に堪える灌木、例へばイソツツジ・ツガザクラ・シラタマノキ等が點在し、又極端に小さく萎縮したエゾノダケカンバ・ミヤマハンノキ・エ

ゾマツ・トドマツ等の疎生を見る。このエゾマツ・トドマツ等は俗に檜前松と云つて盆栽として珍重されて居るが、近來登山者の增加と共に濫採されて行くのは惜しいことである。

先きに記した如く檜前山の火山噴出物の堆積が概して東偏性を示したために西部山側の森林限界は、東部山側のものに比して甚しく高く、シシャモナイ澤の上流をなす西峯の最高點の少し下方から北西に斗出した尾根では約九〇〇米に及んで居る。これが裸出した谷を距てゝ中の岳の頂上約九〇〇米以上の地に繁茂する灌木林の孤立的に發達するものと相呼應してゐるが、この兩者は最初に於ては恐らく連絡して居つたものであらうと思はれる。この部の裸出斜面には島嶼狀をなしてエゾノダケカンバ・ミヤマハンノキを主とする森林が點々殘留して見られる。

次に山腹の谷の侵蝕について見ると、檜前山山腹以下の樣な傾斜の緩漫な山側の谷は、其の初期には屢々流下する泥流の氾濫によつて兩側に堆積原が生じ、その部分の植物景觀を變化せしめる。斯樣な堆積作用は既に形成されて居た森林の樹下群落を破壞し、又一部森林樹種を枯死せしめて、その部分にドロノキ・エゾノダケカンバ・ミヤマハンノキ・ケヤマハンノキ等の落葉闊葉樹種の侵入の好機會を與へるのである、從つて谷の兩側はしばしばそれ等の樹木の帶狀の繁茂を來して遙か山麓に及んで居る。

斯樣な表面的破壞作用の一方、谷は益々深く垂直的に侵蝕されて行つて、V字形からU字形に發達して行く。この間は地形が非常に不安定であるために植物景觀も極めて初期型を現出し、崩壞性の兩崖に草本を主とする景觀を現出し、次に灌木性となり、斜面が緩和されると喬木林が形成され漸次谷の底面に及ぶ順序となる。谷に水流が現出すると、谷底は巨大なアキタブキの群落に被はれ、エゾイラクサ・クロクモサウ等も見出される。

谷は又高地性の植物の下流への分布の通路として重要な役目をして居る。例へばミヤマハンノキ・

ケヤマハンノキ等が山腹から遙か山麓の平原地に迄谷に沿つて降下し、平原地に特殊な景觀を現出する。又シラタマノキ・イソツヽジ・ヒメスゲ・タルマイザウ・イハヰキヤウ・ウラジロタデ等主として上部裸出帶に生ずる矮小灌木や草本も谷に沿つて降下する。山麓平原のウラジロタデの甚しい繁茂も其の起原の一として斯樣な通路の存在を考へることが出來る。

（三）人爲による植物景觀の變化

こゝに植物景觀の變化を考へるに方つて度外することの出來ないのは人といふ惡戲者である。

樽前火山彙の一帶は前記せる如く森林地帶が大面積を占めて居り、エゾマツ・トドマツ・ドロノキ・シナノキ・センノキ・ミヅナラ等の有用樹木が豊富である。而して之等の有用樹木は年々伐採されて行き、南部山麓の丘地の如き民有林に屬する部分の如きは殆んど全く伐採し盡された觀があり、御料林に於ても一定の施業計劃によつて年々部分的に伐採しつゝある。勿論御料林では其の跡地は直ちに造林されて居るけれども、それによつて回復された森林は劃一的な人工林にすぎない。原生林の極まりなき變化と趣味とは失はれて行く。

しかし民有林に於ては殆んど大部分は放置されて居るために跡地は概して草原性或は笹原を呈する處が多く、部分的に自然的に落葉闊葉樹林が回復されつゝある。しかし極一分には年々造林が行はれて居るが、其の造林樹種はカラマツ、歐洲トウヒ等の輸入樹種を主にして居るので、將來山麓地の森林景觀は非常に異樣な景趣をもたらすであらう。

又森林中の道路が設けられると其の部分には常に特徴的にオホバコ・イヌカウジユ・オホアハガヘリ等が生じて來て、路が全く廢絶に歸しても猶路の痕跡を植物によつて保存して居る。

又しばしば問題となつてゐることはニシタップ谷の上部に少量のアカマツがエゾマツ林中に混じて、殆んど自然生の狀態を示して居ることであるが、アカマツは北海道野生の樹種でないことは既に

知られたことであり、この狀態の現出も恐らく其部分に特に植えられたものであらう。往時膽振のこの附近の海岸は松前藩の警備に屬して居つたものであるから、恐らくそれ等の人々によつて植えられたものであらうと考へられて居る。

五　樽前火山彙植物目錄（未定稿）

（ハナヤスリ科）　エゾノフユノハナワラビ・ナガボノナツノハナワラビ。
（コケシノブ科）　コケシノブ。
（ウラボシ科）　クヂャクシダ・メシダ・ヤマイヌワラビ・シシガシラ・クモノスシダ・イハガネゼンマイ・イハオモダカ・カウライミゾシダ・ミヤマベニシダ・シラネワラビ・ミヤマワラビ・エゾメンマ・ヒメシダモドキ・ナラヒシダ・クサソテツ・イヌシダ・ワウレンシダ・カウヤワラビ・ミヤマノキシノブ・ホテイシダ・イタチシダ・ミツデウラボシ・ホソヰノデ・ワラビ・フクロシダ。
（ゼンマイ科）　ヤマドリゼンマイ・ゼンマイ。
（トクサ科）　スギナ・ミヅスギナ・イヌスギナ。
（ヒカゲノカヅラ科）　アスヒカヅラ・スギカヅラ・ヒカゲノカヅラ・ヒメスギラン・ホソバノタウゲシバ・タチマンネンスギ・ウチハマンネンスギ。
（イチヰ科）　イチヰ。
（マツ科）　トドマツ・アカエゾマツ・エゾマツ・ハヒマツ。
（ガマ科）　ヒラガマ。
（ミクリ科）　ミクリ。
（ヒルムシロ科）　オホヒルムシロ・イトモ・ホソバノヒルムシロ・リユウノヒゲモ。

（シバナ科）　ホソバノシバナ。

（オモダカ科）　サジオモダカ・ヘラオモダカ。

（クワホン科）　ヒメカモジグサ・エゾヌカボ・ミヤマヌカボ・コヌカグサ・ヤマヌカボ・コブナグサ・ヤマカモジグサ・ハヂガヘリ・ヤマアハ・ヒメノガリヤス・イハノガリヤス・タツノヒゲ・ハマニンニク・カウボウムギ・サヤヌカグサ・イブキヌカボ・クサヨシ・オホアハガヘリ・キタヨシ・ナガハグサ・シバ・マコモ。

（スゲ科）　ツルスゲ・オホカサスゲ・タニカハズスゲ・オニナルコスゲ・エゾアゼスゲ・エゾサハスゲ・ネムロスゲ・カハズスゲ・ヒメガウソ・カウボウシバ・サハスゲ・クロカハズスゲ・ヒメスゲ・ガウソ・カウボウムギ・アヲスゲ・ミノボロスゲ・ヒメカンスゲ・ヤチカハズスゲ・ハクサンスゲ・エゾマツバスゲ・ハリガネスゲ・クロハキ・ヌマハリキ・ミヅヒキキ・サキスゲ・ミヤマサキスゲ・ミカヅキグサ・ヒメミカヅキグサ・サンカクスゲ・エゾアブラガヤ・ホタルキ。

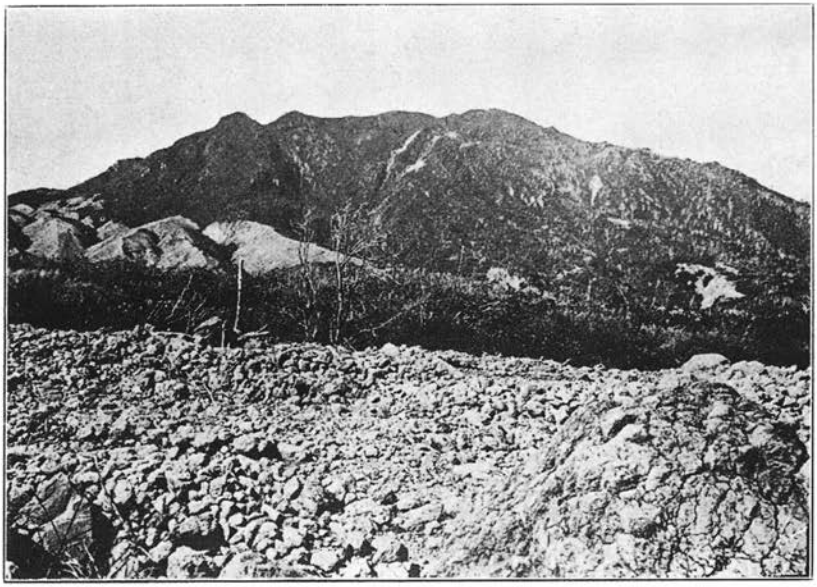
（テンナンセウ科）　テンナンセウ・ミヅザゼン・ミヅバセウ。

（ツユクサ科）　ツユクサ。

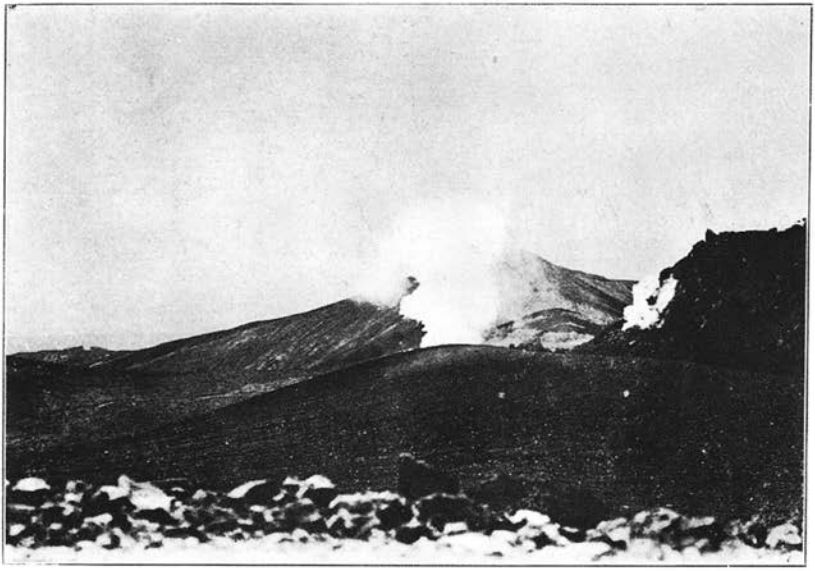
（トウシンサウ科）　ヒメカウガイセキセウ・オホイヌキ・ヒラキ・クサキ・エゾミクリゼキセウ・ヒラカウガイゼキセウ・ホロムイカウガイ・ヌカボシサウ。

（ユリ科）　エゾネギ・アイヌネギ・ネバリノギラン・キヅカクシ・キミカゲサウ・ツバメオモト・チゴユリ・ハウチャクサウ・カタクリ・クロユリ・ゼンテイクワ・ギバウシ・エゾスカシユリ・エゾウバユリ・クルマユリ・ツクバネサウ・ヒメイズイ・オホアマドコロ・ヤマホトトギス・ミヤマエンレイサウ・シロバナエンレイサウ・エンレイサウ・バイケイサウ・ホソバノアマナ。

（アヤメ科）　ヒアフギアヤメ・アヤメ・ノハナシヤウブ。



樽前山中腹より見たるフップシヌプリ



東峯最高點より中央火口丘を距てゝ西峯を望む
武田久吉氏撮影

（ラン科）　サルメンエビネ・アヲチドリ・コイチエフラン・イチエフラン・エゾスズラン・ヌスビトノアシ・シユスラン・ツリシユスラン・コアニチドリ・ノビネチドリ・ミヤマモヂヅリ・ミヅトンボ・ジガバチサウ・セイタカスズムシ・スズムシサウ・コフタバラン・ホザキノイチエフラン・アリドホシラン・ハクサンチドリ・ヒメケイラン・オホヤマサギサウ・コトンボサウ・ミヤケラン・トキサウ・ヤマトキサウ・ネヂバナ。

（センリヨウ科）　フタリシヅカ。

（ヤナギ科）　カラフトヤナギ・ミネヤナギ・オホバコリヤナギ・キヌヤナギ・エゾカハヤナギ・バツコヤナギ・ドロノキ・ヤマナラシ。

（クルミ科）　オニグルミ。

（ハンノキ科）　エゾハンノキ・ケヤマハンノキ・ミヤマハンノキ・エゾダケカンバ・シラカンバ・ウダイカンバ・アカシデ・ザハシバ・アサダ。

（ブナ科）　ミヅナラ。

（ニレ科）　オヒヤウ・アカダモ。

（クハ科）　カラハナサウ・ヤマグハ。

（イラクサ科）　アカソ・ムカゴイラクサ・エゾイラクサ。

（タデ科）　ソバカヅラ・オホイタドリ・ミヅヒキ・ウラジロタデ・タニソバ・ミゾソバ・ミチヤナギ・ヤナギタデ・ナガバノウナギツカミ・イシミカハ・イヌタデ・エゾギシギシ・ヒメスイバ。

（アカザ科）　アカザ・オカヒジキ。

（スベリヒユ科）　ヌマハコベ・スベリヒユ。

（セキチク科）　ハマハコベ・オホバノミミナグサ・ナンバンハコベ・タチハコベ・ツメクサ・ヒロハノマ

大正十三年五月發行

ソテマ・フシグロ・ウシハコベ・シラオイハコベ・ナガバツメクサ・ハコベ。

（ヒツジグサ科）　ジユンサイ・ヒツジグサ。

（カツラ科）　カツラ。

（キンポウゲ科）　ルヰエフシヤウマ・フクジュサウ・ヒメイチゲ・フタマタイチゲ・サラシナシヤウマ・ミヤマハンセウヅル・シラネアフヒ・ハヒキンポウゲ・ウメバチモ・キツネノボタン・ミヤマキンポウゲ・エゾカラマツ・ミヤマカラマツ・アキカラマツ・カラマツサウ。

（メギ科）　ヒロハノヘビノボラズ・サンカエフ。

（ツヾラフヂ科）　カウモリカヅラ。

（モクレン科）　コブシ・ホホノキ・テウセンゴミシ。

（ケシ科）　クサノワウ・エゾキケマン・ムラサキケマン。

（ジウジ科）　ヤマハタザオ・ハマハタザオ・ハタザオ・ヤマカラシ・コンロンサウ・シャニンジン・ナヅナ・セイヤウワサビ・マメグンバイ。

（モウセンゴケ科）　モウセンゴケ。

（ベンケイサウ科）　ホソバキリンサウ。

（ユキノシタ科）　トリアシシヤウマ・コバノネコノメサウ・チシマネコノメサウ・ノリノキ・サハアヂサヰ・ツルアヂサヰ・ウメバチサウ・ダイモンヂサウ・クロクモサウ・イハガラミ・ツルアヂサヰ・ヅタヤクシユ。

（バラ科）　キンミヅヒキ・チシマヤマブキシヤウマ・ヤマブキシヤウマ・ヤチザクラ・ヘビイチゴ・オニシモツケ・オホダイコンサウ・ダイコンサウ・エゾズミ・アヅキナシ・ウシコロシ・カハラサイコ・クロバナラウゲ・キジムシロ・ミツモトサウ・ヒメヘビイチゴ・エゾツルキンバイ・ケヤマザクラ・エゾヤマ

ザクラ・シウリザクラ・シロザクラ・ハマナス・ヒメゴエフイチゴ・クロイチゴ・ウラシロイチゴ・エゾイチゴ・エゾノホザキシモツケ・ナヽカマド・ホザキシモツケ・エゾマルバシモツケ・コキンバイ。

（マメ科）　ヌスビトハギ・エゾレンリサウ・ハマエンドウ・ヤハズサウ・イヌエンジユ・センダイハギ・アカツメクサ・シロツメクサ・ツルフヂバカマ・タニワタシ。

（グンノシヤウコ科）　ミツバフウロ・グンノシヤウコ・エゾフウロ。

（カタバミ科）　ヒメミヤマカタバミ・カタバミ。

（キハダ科）　ヒロハノキハダ（或はシコロ）・サウセウ。

（ミヅハコベ科）　ミヅハコベ。

（ツゲ科）　フツキサウ。

（ガンカウラン科）　ガンカウラン。

（ウルシノキ科）　ツタウルシ・ヤマウルシ。

（モチノキ科）　イヌツゲ・アヲハダ。

（マユミ科）　ツルウメモドキ・ニシキギ・マユミ・ツルマサキ・ツリバナ。

（モミヂ科）　アカイタヤ・ヤマモミヂ・イタヤ・ヲガラバナ・メイゲツカヘデ。

（ホウセンクワ科）　キツリフネ・ツリフネサウ。

（クロウメモドキ科）　クロウメモドキ。

（ブダウ科）　ノブダウ・ナツヅタ・ヤマブダウ。

（シナノキ科）　シナノキ・オヒヤウ。

（サルナシ科）　マタタビ・ミヤママタタビ・コクワ。

（ビヤウヤナギ科）　トモエサウ・ミヅオトギリ・オトギリサウ・ヒメオトギリ。

（スミレ科）　シロバナスミレ・スミレ・サクラスミレ・タチツボスミレ・ミヤマスミレ・ツボスミレ・エゾタチツボスミレ。

（ヂンチヤウゲ科）　ナニハヅ・カラスシキミ。

（ミソハギ科）　エゾミソハギ。

（ツキミサウ科）　ヤナギラン・ミヤマタニタデ・ヤマタニタデ・ツキミサウ・カラフトアカバナ。

（スギナモ科）　スギナモ。

（アリノタウ科）　ホザキノフサモ。

（ウコギ科）　ウド・オニウコギ・コシアブラ・センノキ。

（サンケイ科）　エゾニウ・ハマニウ・エゾオホバセンキユウ・ホタルサイコ・セントウサウ・ウシウド・チシマニンジン・ドクゼリ・ミヤマセンキウ・ミツバ・マルバタウキ・セリ・ヤブニンジン・ハマバウフウ・ダケゼリ・オホカサモチ・ウマノミツバ・トウヌマゼリ。

（ミヅキ科）　ゴゼンタチバナ・ミヅキ。

（イチヤクサウ科）　ウメガササウ・オホウメガササウ・コイチヤクサウ・ヒトツバイチヤクサウ・マルバイチヤクサウ・ベニバナイチヤクサウ・シンエフイチヤクサウ・イチヤクサウ。

（シヤクナゲ科）　イハヒゲ・シラタマノキ・イソツヽジ・ハナヒリノキ・ミネズハウ・コエウラクツヽジ・ツルコケモモ・ツガザクラ・コメバツガザクラ・ヤマツヽジ・ムラサキヤシホツヽジ・シロバナコメツツジ・ハコツヽジ・スノキ・コケモモ・イハツヽジ。

（イハウメ科）　イハウメ。

（サクラサウ科）　クサレダマ・コナスビ・クリンサウ・ツマトリサウ。

（エゴノキ科）　ハクウンボク・ヤチダモ・アヲダモ。

（リンダウ科）　ツルリンダウ・ホロムイリンダウ・フデリンダウ・ハナイカリ・ミヅガシハ・アケボノサウ。

（ガガイモ科）　イケマ・ガガイモ。

（ヒルガホ科）　ハマヒルガホ・ヒルガホ。

（ムラサキ科）　オホルリサウ・ハマベンケイ・ワスレナグサ・スナビキサウ。

（クマツヅラ科）　ムラサキシキブ・カリガネサウ・クサギ。

（シソケイ科）　カハミドリ・カヒシンドウ・ニシキゴロモ・ナギナタカウジユ・エゾコシロネ・シロネ・エゾハクカ・ミゾカウジユ・ヤマハクカ・エゾウツボグサ・クルマバナ・ナミキサウ・エゾタツナミ。ヒメナミキ・イヌゴマ。

（ゴマノハグサ科）　シホガマギク・エゾシホガマ・ミゾホホヅキ・ウンラン・エゾコゴメグサ・イハブクロ（或はタルマイサウ）・コシホガマ・エゾカハヂサ。

（ナスビ科）　マルバノホロシ・イガホホヅキ。

（タヌキモ科）　ムラサキミミカキグサ・タヌキモ・コタヌキモ。

（ハヘドクサウ科）　ハヘドクサウ。

（オホバコ科）　エゾオホバコ・オホバコ。

（アカネ科）　クルマバムグラ・エゾキヌタサウ・エゾノヨツバムグラ・ホソバノヨツバムグラ・ヨツバムグラ・オホバノヤヘムグラ。

（スヒカヅラ科）　タニウツギ・ウコンウツギ・オホバイボタ・クロミノウグヒスカグラ・ヒロハノニハトコ・カンボク・オホカメノキ・ガマズミ。

（オミナヘシ科）　マルバノキンレイクワ・ヲトコヘシ・オミナヘシ。

（レンプクサウ科）　レンプクサウ。

（ヘウタン科）　アマチャヅル・ミヤマニガウリ。

（キキヤウ科）　ツリガネニンジン・シラグシャジン・ハマシャジン・イハギキャウ・ツルニンジン・サハギキャウ・タニギキャウ。

（キク科）　ノコギリサウ・エゾノコギリサウ・ノブキ・ヤマハハコ・シロヨモギ・ホソバノオトコヨモギ・エゾヨモギ・シラヤマギク・ゴマナ・エゾノタウコギ・ヨブスマサウ・モミヂサウ・ミヤマヤブタバコ・エゾノノアザミ・エゾノサハアザミ・ヒメムカシヨモギ・エゾムカシヨモギ・サヽヒヨドリ・ヒヨドリバナ・クルマバヒヨドリ・センボンヤリ・ヒメチチコグサ・ヤナギタンポポ・カセンサウ・エゾヲグルマ・ヤマニガナ・シロバナニガナ・ニガナ・タカネニガナ・ハマニガナ・ヒメヂシバリ・ヤクシサウ・アキノゲシ・アキタブキ・カウゾリナ・ヒメヒゴタイ・キヲン・ハンゴンサウ・ノボロギク・メナモミ・アキノキリンサウ・ハチヂャウナ・タンポポ・セイヤウタンポポ。

（附記）　地形の記事は主として左の著書を參考とし、それに私見を加へたものである。

大井上義親・樽前岳噴火實況調査報告・震災豫防調査會報告・六四號。北海道廳・支笏湖。田中阿歌麿・趣味の湖沼學。山崎直方・佐藤傳藏・大日本地誌・卷九。高頭式・日本山岳誌。志賀重昂・日本風景論。小藤文次郎・日本の火山・地質學雜誌二三卷（英文）。神保小虎・北海道の火山・山岳・第一年。竹内亮・樽前山の近況及支笏湖・山岳・第一五年。私の見た惠庭山・山とスキー・一七號。樽前山及フップシヌプリの登路・山とスキー・二〇號。

地圖は陸地測量部五萬分の一地形圖の内樽前山・白老・苫小牧・千歳等を參照した。（一九二三年夏福岡市外堅粕の假寓にて本稿を草す）

「後記」　樽前山は大正十二年七月廿九日午後九時四十分（苫小牧字坊主山千葉發助君報）大音響と共に近來にない大爆發をしたことが報ぜられた。これによつて山頂圓頂丘の形狀にも可成顯著な變化があつたといふことである。

西澤紀行

書上喜太郎

大正十一年十月二十一日の朝、私は芹澤の獵師廣瀨伍甫の家で目覺めた。戸締りもない東側の椽の障子を開けると爽かな朝の空氣がサッと室内に流込み、笛吹川を隔てた對岸の山が欄間にさはるかと思ふやうに近くのしかゝつて來る。數へて見ればその日は東京を出て中津川を秩父に入つてから七日目で、私は可なり疲れてゐた。殊にその前日は川端下川の左俣からたつた獨りで、木花白く咲く國師續きの國境連嶺を辿り、地圖を頼りに大嶽山の路を下つて夕立などに會ひ、ほとんど日が暮れてからこの芹澤にたどりつき、昔馴染のこの家に上り込んでほつとしたその翌日のことであつたから、今日はいよいよ秩父の險峽西澤の溯行をやらうと云ふのに、心は一向に奮ひ立たず、氣持は勇ましい冒險に躍るよりは、稍もすれば靜かな觀賞に詠歎を懷しまうとするのであつた。

そんなわけで正確な記錄を殘さうと云ふよりは、茸でも取り乍ら遊んで來やうと云ふつもりで、荷物も重いものは皆家に殘し、二日間の食糧としてはばあさんの心盡しの赤のまんまの握飯と燒餅を持ち、もういくらか腰の曲りの目に立つ伍甫爺さんを先に立てゝ、ぶらりぶらり村を出掛けたのはもう午前八時半を過ぎてゐた。

廣瀨では爺さんの爲に御初酒を仕入れ、やがて雁坂街道と別れて左へ入る。バラ平では道の右手山際近くにあつた開墾小舍は燒けたさうで今は形も見えず、丁度その代りの小舍を道のすぐ左に作つてゐる處であつた。青笹川を過ぎて暫く行くと小徑が分れて右手の山腹を斜に上つて行く。この路は何

處までもゆる〳〵とこの山腹をめぐり、ナレイ澤を横切つて、ヌク澤の上流にある水晶掘りや經木造りの小屋あたりに出るのださうだ、從つてそれから戸渡り尾根に上ッて行けば甲武信への最短距離となるわけだ。ナレイ澤の附近で三四人の男が手に手に鍬やシャベルを持つて道普請をしてゐる。聞けばこの邊の林道が改修され、尙西澤へ林道が開かれるのださうで、ナレイ澤やヌク澤は勿論、二俣のあたりでは本流をも數十間の釣橋で渡り、遠く國師の方へまで達する計畫ださうだ。請負で受渡は十二年の夏と云ふことであるが、完成の時期は當てにならないにしても、早晩この谷にも一變化が來なくては濟むまい。ヌク澤も過ぎ、やがて東澤の河原へ下りたのは十一時であつた。砂の上に腰を下して辨當を食べる。こゝは合流點より少し上つた處だが、その少し上手に今年新しく炭燒小屋が出來たさうで、なるほどよく見すかすとそれらしいものが見えるやうだ。

三十分ばかり休んで出發、河原を渉つて少し下ると間もなく西澤の落合である。徒渉は淺い處を拾へば膝までぬらさないで濟む。水量はやはり西澤の方が少し多いやうだ。これからいよ〳〵西澤を上り初める。暫くは廣い河原をゆるやかな流れが續く。飛石を傳つたり或は淺瀨をピシャ〳〵やつたりして二三町行くと左から大窪澤の瀧が落ちてゐる。その少し先で河は急に右に折れると同時に兩岸は數十尺の岩壁となつて暗い門を形造る。その奥にドウ〳〵音のしてゐるのが魚留の瀑である。まだ此所では音ばかりで瀑の姿は見えない。尙狹ばめられた流れの中をジャブ〳〵遡り、丁度河床の眞中に腰を水に浸して蟠つてゐる大石に、幾度か滑り落ちさうになつてはひ上るとやつと瀑の全身を見ることが出來た。谷はいよ〳〵狹くなつて、また一つ思ひ切つてグット右に曲り、その上から瀑はほとばしり落ちてゐる。高さこそ高くないが、大きな洞窟の壁のやうにあたりを取圍んだ岩は、黑く冷くしぶきにぬれ、その岩に瀑壺の音響がゴーゴーと反響するので、幽暗凄慘の氣に滿ち、流石西澤第一の關門の名に反かない。

瀑のそばはどう見ても通れそうもないので、少し後戻りをし、左岸の方から高廻りをすることにする。可なり急な處を草の根などにつかまつて上り始めると氣のせいか人の履んだ跡のやうなものが見える。岩魚取りの道だらう。瀑の頭は削壁が可なり高く且樹が茂つてゐるので、上から落口をのぞくことは出來なかつた。尙この削壁は暫く續くので、私たちが河原へ下りることの出來たのは河がもう一つぐつと左へ曲つた上手の處であつた。そのあたりから上流暫くの間が西澤の下七ッ釜で、上七ッ釜（普通所謂）の如き豪快な瀑と壯大な釜こそないが、一帶にV字形の河床を押し流れる激流の連續であつて、水について溯ることは滑石（ナメ）であるだけに一寸困難を感ずる。私たちも間もなく再び左岸の高廻りをしなければならなくなつた。左まで高く上る必要はないが、茂みを分けてからむので流れは見えたりかくれたりする。この高廻りは三十分ばかりで終り、左岸が大削壁をなして河がグッと左へ曲る處で河原へ下りる。こゝは河幅も廣く流れも淺くゆるやかな處なので、樂に徒渉することが出來る。河はまたすぐ右へ曲ると思ふとその上が瀑になつてゐる。これが鎌倉淵と云ふ處で、瀑は上下二段になつて中々美事である。下七ッ釜の範圍はこの先もう暫く續くのであるから、正確な記錄をとる爲なら何處までも水について溯るべきであるが、殊にまた前日黑金山附近から遙に見た處によると、この上手あたりに可なり高くまではげた處があつたやうだし、そして伍甫爺さんの言葉によつても兩岸とも餘程高廻りをしなければ通れぬ處があると云ふことだから、假令通れるにしても、どの位の高さまで高廻りをしなければならぬかを確める必要があるのだが、もう今までの樣子によつても、下七ッ釜は大したことはないと云ふ氣がしてしまつたし、尙今朝からの遊び氣分がまだぬけ切らないので、爺さんに『この上の尾根に松茸（栂茸）のうんと出る處があるから其處を廻つて行きませう』と云はれるまゝに、どうせ高廻りをする序ならと云ふ氣になつて、瀑の手前の空澤を傳つて左の尾根に上ることにしてしまつた。

尾根と云ふのは大窪澤と本流とを別ける尾根であるが、傾斜は可なり急なので、上り切るのに小一時間かゝつてしまつた。尾根は美しい栂の林で、下生えもなく、稍路らしいものが尾根すぢを走り下つてゐる。栂茸は少なかつたが、それでも椎茸や栗茸があつたので、汗をかいて上つた甲斐はあつた。尾根すぢを上らず暫く西澤側の等高線に沿ふて山腹をからみ、カラ澤を傳つてまた西澤に下る。このあたりにどうも時々路のあとらしいものがあるやうな氣がするので、聞いて見ると、一時盜伐の盛んだつた頃の路だと云ふ。間もなく再び西澤の河原に立つ。一寸した小淵の下で、此處は先刻尾根上りを初めた地點から四五丁上流に當る處だと云ふ。その小淵を避ける爲に左岸に徒渉し、それを通り過ぎて溯つて行くと凄い水音が聞えて、私たちはいよ〳〵七ッ釜の下に出た。地圖で云へば西澤の西と云ふ字のあたりらしい。

瀑は仰ぐやうな高さから數段となつて、各一つの釜を挾んで落ちて居り、その上部の方はよくは見えないので、此の上何處まで連續してゐるかと疑はせる。最下の瀑だけでも高さ十間位、その瀑壺は直徑七八間の釜となつて沸いてゐる。ゴーゴーと地響をさせて鳴りはためくとどろきは、さしもに深いあたりの森林の中にも消え去ることが出來ず、湧き起る水煙と共に高く空に上つて行くのである。その瀑と釜の數は實はそれぞれ五ッづゝあるので、此所は五ッ淵と云はれ、その少し上流に離れてある不動の瀑及またその上の無名の瀑と共に西澤の所謂七ッ釜を形造るのださうだ。出來るならなるべく瀑のそばをへつり、五ッ淵の一つ一つの水際を通過したいと思つたが、そしてまたそれは出來ないことでもなさそうであつたが、泳ぎを知らぬ山の爺は、山こそ恐れないが水を恐れるので、仕方なく右岸を高廻りして下から見た二番目の瀑の上に出る。五ッ淵の中央に當る處の此處からして上下を見上げ見下して見ると、上下五段になつて百米もあるこの瀑は實に一つの岩で出來てゐるらしい。西澤の水を一つに集めてほどばしり落つる瀑の豐富な水量は、擂鉢のやうにえぐられた大釜の中に飛び込

むと共に、これぞ水の本性と云はぬばかりに狂騰亂舞の限りを盡し、溢れ落ちんとしてはまたためらつて目まぐるしい渦を卷き、ついに決する處あるものの如く滑るやうに絲を乘り超えて飛び下りる。その間に於ける色の變化、線の躍動。かくて下にはまたそれを待ちもうけてゐる釜があり、それが溢れゝばまたそれを受止める釜が用意されてゐる。凄いと云へば凄い、しかし全體の感じはやはり秩父一流の人懷しさである。水の持つ最も美しい姿の一面を現させる爲に特にこしらへられた舞踏場、しかしそれが深い密林の奥深く秘められ、遠くからは窺ひ知ることも出來ないやうになつてゐる處などは、飽までも秩父式である。大きな一つの岩に階段をなしてえぐり彫られたその五つの釜も、自然の偉力を恐れさせる前に、先づあの田舍の子供たちが泥遊びの爲めによく柔い石に穴を掘るいたづらのあとなどが聯想せられて、自然の遊戯にほゝえませられるのである。もう一度高廻りをして今度は五ツ淵の最上端に出る。第一の瀑の頭に立つて見下しても下までは見透すことが出來ない。黑くぬれた滑石に落葉がのつてゐて、稍もすると滑らうとする。さて五ツ淵もいゝ加減に別れを告げて出掛ける。

すぐ上にまた一寸した淵があるので、右岸の高廻りをし、それを越した處で左岸へ徒渉する。暫らくは尙左岸を行く。このあたり河床及河岸一面に夥しく白い花崗岩が露出して居り、その上を歩いて行く。處々岩の割目から流れ出してゐる水に注意されて指をつけて見ると生溫い。溫泉が湧いてゐると聞いて居たのがこれである。湯氣をあげる程の熱はないので、知らなければ氣づかずに過ぎてしまふだらう。不動の瀑に着く。瀑は大して驚く程でもないが瀧壺は眞に大きく、恐らく西澤第一かも知れない。十五間もあらうと思はれる大釜に紺を溶かしたやうな水が滿々とたゝえられ、無數の三角波がはね上つてわい〳〵騷ぎ乍ら片口のやうになつた一ヶ所の口から流れ出て行く。瀑の高さは五間位、落口は凹字形にすりへらされた花崗岩で、石の門となり、その上へまた大きな倒れ木がまたがつ

て自然の橋を作つてゐる。左岸を高廻りして通るのであるが、このあたり一面の滑石なのでどうも危い。河は瀑の上ですぐ左へ曲つてゐるから、自然瀑の頭の左岸は水當りがいゝわけで、岩は皆すりへらされてゐる。殊に一ヶ所丸く深くえぐられて狹い洞になつてゐる處がある。その洞の奥に不動樣の御姿が現れてゐるので、この瀑の名も起つたのださうだが、足元が危いので眞上から下つて見ることは出來ない。高廻りをして一旦瀑の上手の河原に下り、右岸へ徒渉し乍らふり返つて見ると洞の奥はすつかり見え、なるほど一寸珍しい岩の襞が複雜な線を畫いて居つて、無理に惡へば不動樣と見えないこともない。昔は此所から御光の射したのを見た者があると云ふ。

これから三十分近く行くと河原に三四人位入れさうな岩窟があり、尙暫く行くと上流から押し出して來たらしい實に夥しい巨岩の群が累々として河床一杯に重なり合つてゐる處がある。それを踏み越えて通るとすぐ上が七ッ釜の一番上流に位する無名の瀑である。河が此の處で直角以上の急角度でグッと右へ折れ曲ると同時に可なりの落差を現す爲、その曲り角の處にこの面白い瀑を造つてゐる。曲り角にあたる右岸の大岩壁には、實に大きな深い大岩窟がうがたれ、上流から非常な勢で落ちて來る全水量はこの暗い洞穴の奥を目がけてまつしぐらに飛び込むのであるが、我れと我が力にはね返されて再び岩窟の外にほうり出され、方向を轉じて斜に六七間の崖を飛び下りるのである。溪谷一ぱいにえらいしぶきをあげ、中々すさまじい瀑である。まだ名がないのださうだが、形に特徵があるのだから、それに因んで誰かいゝ名をつけてくれゝば便利だと思ふ。

この瀑を通過する爲に左岸を高廻りしやうとして、少し登ると崖の上に三人位は入れそうな石窟がある。瀑の上はまだ中々惡くて幾つかの瀑布が續いてゐるらしく、下りることが出來ない。この高廻りに十分餘りかゝつて下りた處は小さな瀑の頭であつた。尙十分ばかり行く間は中々河床が險惡であるが、それを越すともう西澤の惡場の全部を通り越したことになる。右岸に岩穴のある處あたりから

河は穩になり、小石の上をサラ〳〵流れる瀨、青いつやのある水が池の樣にたまつて流れるとも見えない程、全く女性的の景色である。氣もすつかり樂になり、晩飯の肴に岩魚でもと思つて釣竿などを切つても見たが、どうも午後四時半にしてはあたりが暗いやうなので、或は時計が遲れてゐるのではないかと思ひ、釣は止めてそろ〳〵泊り場を探すことにする。爺さんが長八ヶ窪で泊らうと云ふ頃にはもうその長八ヶ窪に來てゐた。右岸の林を分けると上に一寸した平地があり、岩が庇のやうにのしかかつてゐる。話に聞いてゐた死んだ岩茸取りの綱の殘つてゐる處と云ふのは此所で、成る程長い棕梠繩、大きい鐵鍋、小さい瀨戸引鍋、脊負子などがまだ殘つてゐた。死んだと云ふのはもう十年も前の話で、下の村の藤吉と云ふ五十ばかりの男が其の弟と悴の三人づれで岩茸取りに來て此處に泊り、朝弟と悴の二人が炊事の仕度をしてゐる間に、藤吉一人でこの上の大淵へ一寸釣りに出掛けたが、中々歸つて來ないので、悴が不思議に思つて行つて見ると淵へはまつたのだらう、もう死體となつて流れ口に引つかゝつて居たと云ふのである。それ以來その二人は決して西澤へ來やうとせず、其時殘して行つたものも取つて來た者にやると云つてゐたが、誰も持つて歸るものもないのださうだ。私達はこの藤吉の古蹟へ寢ることにする。天幕もないから張る世話も要らない。今夜燃すだけの焚木を集めて後はゆつくり晩飯の仕度にかゝる。先刻採つた栂茸、椎茸、栗茸を入れて味噌汁を煮る。婆さんの握つてくれた握り飯が香しい匂ひをして燒ける。日はもうとつぷり暮れて流水の音だけが聞える。かくてこの夜は藤吉の夢も見ずにゆつくり眠つた。

翌日も急がぬ旅なのでゆつくりしてゐたが、午前七時半には出發することが出來た。すぐ上が大淵である。大淵の瀧は飛び下りるより滑り込む方で高さ三四間、瀧壺も名の如くは大きくない。しかし昔はその倍位あつて、石を投げても對岸へ屆かなかつた位ださうだ。上流から押して來た小石の爲に埋れてしまつたものらしい。

大淵から京の澤の小舍までの間はつまらないさうだから止めて、これから西澤の名所ックェの岩を見て、山越しに芹澤へ歸ることにする。ックェの岩は芹澤村にある筑江神社の奥の院である。大淵の前の左手のカラ澤を上り初める。西澤と大窪澤の中尾根を目ざして登るのである。暫く上つてから東の方の山腹をからみ加減に上る。西澤へ派出する尾根を一つ越えると可なり廣い澤となり、山腹に大きな岩小舍がある。五六人は入つて雨も相當に防ぐことが出來る。またすぐ近くに破れかゝつた小舍がある。御料地を測量した時のものだそうだ。この邊は洞穴の瀑の上に當るらしい。此所を眞直に三十分も上ると尾根に出る。地圖の二〇二八米の獨立標高點のある處から約百五十米位尾根を下つたあたりかと想像する。すぐ上の處に芹澤からの道が來てゐる。これが村からおックェさんへの參詣道であつて、つまり地圖の點線の路は實は二〇二八に達しないうちに尾根を捨てゝ大窪澤源頭の山腹をからみ、この尾根に上り着くと共に、尾根すぢを上らず其儘尾根を越して、西澤に面した山腹の等高線に沿ふて西の方へ走つて行く。私たちも荷をこの尾根へ置いてその道を西へ辿る。おックェさんへは毎年五月とか芹澤全村の家といふ家から、夫も僅か十五六軒だが、各男一人が代表者となつて打連れて參るのだそうで、その時にこの邊の山蔭には夥しい雪があるなどゝ云ふことを聞く。三十分ばかりでックェに着く。ックェの岩は黑金山續きの尾根からは可なり下つた處であるが（西澤御料地と書いた西と云ふ小字の右あたりではないかと思ふ）、西澤へ張り出した枝尾根の頭が岩の突起となつてゐる處で、丁度物見櫓のやうにあたりの深林をぬいてつき立つてゐるので眺めは頗るいゝ。午前九時、秋の朝空はすつきりと晴れ渡つて、國師から甲武信雁坂、さては笠取唐松尾、遠く大洞までの山々が實に快いスカイラインを描いて並んでゐるのが一目に見える。眼を轉じて西澤を俯瞰すると、水の流れこそ見えないがその全相が手に取るやうに見える。溪は國師の水源から東澤との落合まで一面に黑々と盛り上るやうに茂つた針葉樹林である。昨日西澤に入つて以來、あの梓山や川端下であれ程迄に美し

かつた紅葉のことをほとんど忘れてゐたのも故ある哉と今になつて氣がついた。

歸りには荷物を置いた尾根の處で梅茸などを探し、道について下る。暫く大窪澤側の山腹を行き、やがて蕨毛山御料地へ面した尾根へ出ると、眼界が一時に開けて甲府盆地の方まで見え、眞白な富士がその向ふに浮んでゐる。一面に靑笹の生えた尾根は氣持のいゝ複曲線の波を畫いて下つて行く。それを傳つて下つて行くと陽のぽか〳〵あたるのが眠氣を誘つて歩きながらうつら〳〵しそうになる。山鳥の立つ音に驚いて目が覺める。處々に突立つた枯木立の根元を見て歩くと必ずカワフキやツバタケが生えてゐる。かくて書頃には芹澤の筑江神社の側へ出ることが出來た。（終り）

芹澤（午前八、四〇）二俣（一一、〇〇）魚止澤（一一、四五）鎌倉淵（午後一二、五〇）尾根ゐ高廻して五ッ淵（二、三〇）五ッ淵の頭（三、〇五）不動澤（三、三〇）無名の澤（三、五〇）長八ヶ窪（四、四五）翌日野營地發大淵（午前七、三〇）尾根（九、〇五）ツクエ岩（九、四五）芹澤着（午後一二、一五）

錫ヶ岳

黑田正夫

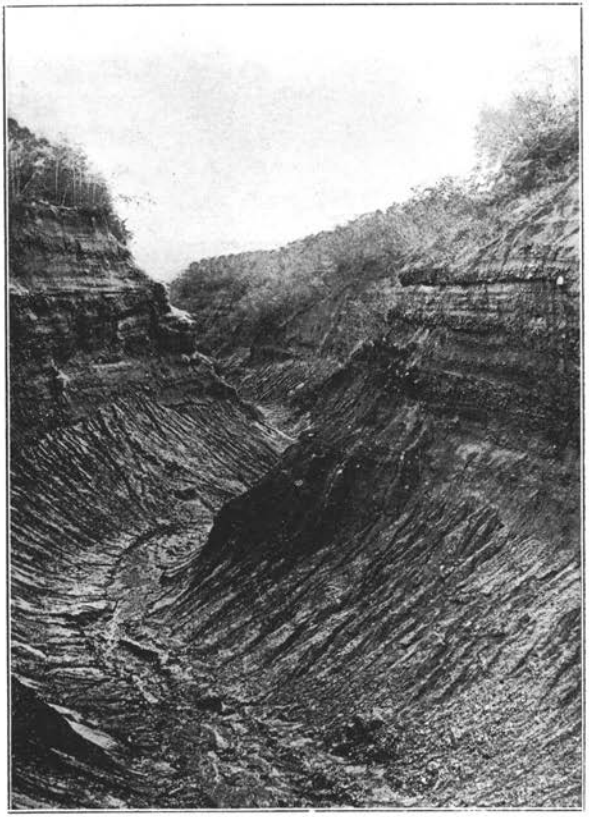
この年の夏圖らずも病を得て、その豫後のため學友山口珪次氏と日光湯元に滯在してゐました。毎日の時雨のため、只見川にはいつてみやうなどと思つてゐたのも、日限にせまられて遂に錫ヶ岳位で思ひ止まらうといふことになりました。ですからこの二日の紀行は、湯治客の散歩日記と思つて讀んでいたゞきたい。それでないと時間など、非常に長く掛つて到底達者な方々の標準とはなりますまいから。（大正十年九月廿七日）

時雨は毎日、山の湯をとぢこめてゐました、二十六日も終日宿屋にとぢこめられてゐました。夕方もつるのゆにつかつて飽かず湯の湖をみつめてゐました。

時雨の細い絲は
葦の葉に導かれて
蕭々となり響く。
湯の湖のつくるあたり
汀より湯の氣は
白く淡くたちのぼる。
のぼりては霧となり
雲となりて
青巒の間に漂ふ
ただよふ。
たゞよひて
時雨の絲に導かれ
葦の間に消え失せる。

憂々の色
丹頂の色

湖には漣おこり
葦の穂はさゆらぎわたる。
青き葦の葉と
鼠色の霧との間
丹頂はうちふるひ



オホツク空澤の上流　武田久吉氏撮影

白果累々たるシラタマノキ(樽前山)

うちふるふ。
うちふる丹頂を眞中に
漣ゆらぎ、葦の葉さゆらぐ
憂〻と鳴り、蕭々と響く。
鶴の身は黄金光を放ち
一切は紫の靄となる。

二十七日の朝ねてゐると「晴れてる」と、呼び起されました。夜半に再度湯にはいつたため、尙寢足りませんでしたけれど、一週間も待ちあぐんだ蒼空を豫想しては、出掛けないではゐられませんでした。しかし、白みかけた曉の空を見ても床は捨て難く、起きたのは午前六時半、寢坊者のくせとして朝飯はあはてていそがし、草鞋脚袢をつけ終つたのは七時半でした。その時は既に、峰には白い雲が纏ふてゐました。湯にふやけた脚の力を心配しながら、金精峠への道をいそいそと進みました。馬車屋の門先を過ぎたときは、飼料を煮る釜や、馬の鼻いきからは白い湯氣がすき通つた空氣にたゞよひ流れ冬の近いのを想はせました。

道は間もなく黑木立の中にはいつて大きな幹の間を縫つて熊笹の覆ひかぶさるうちをゆきますがそれも長くは續かず、直に石ころのごろ〳〵した澤にはいります。暗い木立を拔出ましたけれど、雲は既に谷の天井をおほひ、うすぐらい影を滿たして了つてゐました。しかしふりかへれば秋の麗日は湯元のまはりの少しの平地に照つて湖の汀の葦の葉は輝やいてゐました。

この石の河原は之から登つてゆく谷の中腹から崩れ落ちたもので、登るに從ひ小さくなり遂に岩床が直に褐色な荒くもろい肌を示してゐます。

水も潺々と音たてて這ふやうに流れて來ます。そのふちを岩かどにつかまりながら、上つてゆきま

すと、谷は二つに岐れ三つに割れて、水嵩も減じ遂に盡きてしまひました。この澤を右へ右へととつてゆくと三つに割れて後間もなく、左の尾根から徑がはひ下つて來てゐます。尾根は急な黒木立で、下生は殆んどなく。落葉や苔が石ころを覆つてゐました。下生が繁りだした頃、徑は左の方に絡らんで一番始め分れた澤のせりに導かれてゐました。柔じた脚も體もさまで疲れを感じませんでしたが、山口はこの頃、かなりおくれ出しました。谷にはいらうとするところでふいと再び上へ向きかへると思ふと黒木立を離れて小笹に出ました。笹はもうすつかり黄いろく山を覆つてゐました。谷にはいるとき心配した雲も、この谷にははいり切れず碧い碧い空は行手に輝やいて、笹に切りとられるあたりは燦然と後光をだしてゐます。光り輝やく大空と大地とを分つものは、黄にやけた笹の尾根と、ひらひらとかよはい白い枝についた白樺の葉とです。白雲は南から飛んで來ますけれど頭の上あたりで消えて了ひます。笹のうちの小徑を嘆美に包まれながら上ります。上りは次第にゆるくなつて白樺の下に苔の蒸した平地に出ました。そこでちよつと休んで樺の茂みの下を進むと遂に外山から前白根への尾根の脊に出ました。

灰色の岩石とその崩壞した砂礫とで形造られた丸い脊には殆んど樹木なく、低い栂が右側をはひ上り、左側は山の膚が谷に崩れ込んでゐました。ちよつと下つて少し上れば前白根の三角點がありました。奥白根は火口原をへだてて前に聳えてゐます。空の中にぐんと突き出た大きな岩塊は、大地の溢れた力を偲ばせます。眞黒な岩は噴火の跡をむごたらしく荒々しく殘してゐますが、その崩れてなだらかになつた斜面には、天鵞絨のやうに蒼い草が覆つてゐました。之から進むべき尾根は左手に續いて、先の高いあたりは谷からこみあげてくる雲に遮られ、雲は尚右側からも、押寄せて來ました。奥白根とこの尾根とのくぼみに青い頭が三つ西に順々に低くなつて續いて見えました。多分之が目指す錫ヶ岳だらうと思ひました。ぐるりと後を振向けば、そちらは天氣がよく、光つた池をもつた黄色

く紅葉した鬼怒沼が谷からのぼりかけてゐる雲の上に見えました。戰場原の方は雲に包れて、男體が僅か中腹から裾にかけて雲の間から顯れてゐました。山口は寫眞をうつすやら僕はクリノメーターの方位をのぞくやら大層ゆつくりしました。白根への道を尙下りて、左手に池に下りて、水をのむやら水筒につめるやらして、愈〻未知の尾根にはいる準備をしました。

十時半に愈奥白根への登山道との岐目に來ました。奥白根への道が池の傍から右の方へ斜に下らうとするあたりで、下らずに尾根を通る道を探しましたら幸ひ全く紅葉した白樺の若木の下に、ふみつけられた跡を見出しました。數年前に境界の標石を運んだとがあるから尾根には徑があるだらうと敎へられて來ましたが、それにしては古くからついてゐるやうだが何しろ結構なこと〻、それを失はないやうに全力を盡して注意して進みました。樺は數間でつきて「はまなし」などの小さな灌木となりました。それも、前に出す脚を邪魔してゐましたが、遂に全くの高山植物の原にでました。「こけもも」や「こめつが」などの割合にこはい草が多く栢眞が地を覆つてゐました。それらの草鞋にあたるタッチは高山の氣分を充分におこさせます。小さな鞍部となつて下つて再び上れば前にも增した廣い頭で、徑は幾つにも蹈分けられてゐましたが、下るにつれて一つに集つてゐました。「こけもゝ」の赤い實、また「やぶこうじ」に似たものの紫の實、白い實が足下一面になつてゐました。それらを含んで一息すれば、陽は飛ぶ雲にときどき遮られてはゐましたが、西半分は碧空が占め、のんびりした山の氣持を遺憾なく味はれました。行手には紅葉で覆はれた第三の突起を越して遙かに錫ヶ岳が定かに見えるやうになつて來ました。ふと右手を振向くと奥白根の左の肩に、白雲のうちに武尊が眞蒼に二つの尖つた峯をみせました。しかしもう正午に間もないのでゆつくりもしてゐられません。ずんずん進みます。しかし今度は尾根道は、笹や灌木で通りにくゝ、徑も右側をからんでゐますので、其儘その通り行きますと岩のひどいのなどあつて、樺の下をくぐつて又直き前と同じやうな頭にでました。

栢眞が岩の間を埋めてゐてきもちのいゝ處でした。山口はカメラをのぞいてゐたやうでした。

今度の下りは上から見られない程急でした。岩がありさうなので左手の禿げ崩れた砂の上をまわつて行きますと、ちよつとした岩壁があつたのでした。その下はまた樺のやぶ。それも潜りぬけますと東側は笹で覆はれ西は雜木の密生してゐるところの頭の上りが始まります。まだ徑が充分に見分けられます。そのまゝ西側をさぐつてゆくと大きな岩の下をからむで尾根に再び戻り、尾根に近く笹の中を南側をのぼりました。尾根通りは石楠花で、通れないので笹の中を極めて緩い上りをかさこそ〳〵と秋の陽淡く照つてゐる下をのんきに進みました。その頂上は笹の中に所々栂が生えてゐます。平い頭でしたが、西の端に御料局の三角點があつて切明が五方についてゐました。その南をとつてちよつと下るとすぐに切明が栂の木立を拔けて下つてゐました。しかし霧でもかつたらちよつと面喰ふところと思ひました。また笹が出て來ましたが傾斜はだん〳〵ゆるくなつて、黒木立が始まる頃は全く平かで、くぼみがあつて苔蒸して水さへ湧いてゐました。少し早いとは思ひましたが尾根での水をみては、腰をおろして辨當つかはずにゐられませんでした。急いで食べたつもりでしたが立ち上つたときには既に二十分を要し、十二時二十分でした。尾根は尙平たく續き、水溜が尙二つあつて最後のは深さ一二尺はありました。黒木は大して大きくなく、光は地面にまで落ちてゐました。倒木も若木もあつて共に邪魔になりました。切明はつゞき、秩父の甲武信から富士見あたりの尾根を想ひ出しながら切株に沿つて進みました。やゝ爪先上りになつた頃再び笹原となりましたが直に黒木立にはいりました。この邊に新しい標石がみえました。少し進むと之を埋めに來た人夫のとまつたあとらしく屋根に油紙でもはつたやうな小屋掛の跡がありました。床にしいた栂の葉の尙生々しいところから察すれば、こゝを去つて幾何もたゝないことを思ひました。續いてもう一つ新しい標石がありました。黒木は大きくなつて下生もなくなり、靜かな山の林に入つたと感じました。その中で鋭角に南に折れま

したが標石は尙六ッ七ッありました。切明をみつけながら木立をくぐつて下りて來ました。午後一時半頃最後の鞍部に着きました。

霧が薄く捲いて來て、早くも春きかけた秋の陽はいやが上にも薄らぎ、霜枯れた下生の齒朶の葉の褐色な上に落ちた時のみ暖い感じをゆたかにあふれさせてゐました。水たまりも樺の大きな幹と共にしつとりとした氣持を益濃くしました。

愈々錫ヶ岳の登りです。三百米ありますから、とても二時には難かしからうと危みながら、齒朶の枯葉を踏分けて進みました。破れた足袋の孔から羊齒にまじつてゐるらしい草の刺がちくりと刺します。

二度ほど笹原に出て少し上りますとどうも頂上が近いやうなので、山口の續かないのもかまはず喜び勇んで笹に力をいれ、針蕗をもふみたほしながら一目散に登りますと果して頂上でした、歡聲をあげました。三角點だとどなりましたが山口は下の方から信じません。

しかし登り着いたところから右手に南に小さなくぼみをこえて十米ものぼれば見通のために切り拂つた跡に草の生えた平たい頭があります。參謀本部と御料局と三角點が嚴存してゐます。時は丁度二時。「もし雲さへなければ」と思ひましたが、見えたのはたゞ之から下りやうとする柳澤の谷と、ひきつゞいて千手ヶ原、西湖（サイウミ）、中禪寺湖と今まで辿つて來た前白根からの尾根とだけでした。奥白根さへ雲に覆はれ勝ちで、外山は全く見えませんでした。

しかし、華嚴にもまさるといふ赤岩の瀧のある赤岩澤に踏込んだり、陸軍の地圖と御料局のとの合致しない茶釜平で間誤ついたりしないやうにとそつちの晴れてゐるのを幸に見きわめることに骨折りました。病後の私達にとつては、碌な用意もせず「のしやがみ」することは殆んど命掛けです。しかし赤岩澤をふき上げて來る雲が邪魔してよく見えません。十分ほどして山口がやつて來ました。兎に

角午飯の殘を草原に身を埋めて食べ始めました。しかしその間にも時計は容赦なく動きます。雲は陽を遮つて黄昏の近いのを思はせます。突然山口が「ねむくなつちまつた」といひだしました。「飯くつて三十分位書寢でもするやうな旅がしたくなつたなあ」「あゝ」と疲れたらしく簡單に答へます。「兎に角動かう。矢張り下るより仕方ないや。谷をみやう」とそこ〳〵に立上つて二人して、覘きましたが少しも見えません。笹原のところへ往けばどうにか見當が付きさうだといふことになつて出掛けました。既に二時三十八分、笹原まで下りました。頭を掠めてゐた霧は此處まで下りて來ず、柳澤の谷はすつかり見え、その向ふに大岳の急な斜面が聳え立てゐるのまで明らかに望まれました。この下りをひどく氣にしてゐたのは宿で御料局のお役人が隣坐敷にゐて、こゝらの二萬分の一の地圖を見せて呉れたことに始まります。柳澤の支流に赤岩澤といふのがあつて。それは華嚴にもました瀧が懸つてゐると湯元では言つてゐます。それで赤岩澤にはいることを、病後の二人はひどく心配してゐました。ところが、その赤岩澤の具合が、このみせてくれた二萬分の一の御料局測量の地圖と陸地測量部の五萬分の一圖幅とで違つてゐるのです。

錫ヶ岳から國境の尾根が東に下つて北に曲るところから枝尾根が東に出てゐます。その南に錫ヶ岳から急な平が三百米程下つた場所に柵が出來てゐます。之を茶釜ヶ平と呼んでゐます。二つの地圖の相違點は前の尾根の北側を下る赤岩澤とこの尾根と茶釜平との間の澤との關係です。測量部の方ではこの二つの澤は直接に落合つて、赤岩の瀧はその落合の下にあるらしくみえてゐます。然るに御料局の方のは、この澤は至つて小さく、錫ヶ岳とその南の獨立標高點二〇七七米との間の鞍部から流れ出る澤に一度落ち込んで後赤岩澤と合してゐます。そして赤岩の瀧はこの落合より上に示してあります。それですから後者に從へば決して瀧にぶつかる筈はありません。測量部の方とて、茶ヶ釜平さへ越せばよいと思ひました。

谷を見れば東走してゐる枝尾根は、遙かに見えて倒木や立枯が眼につきました。茶釜ヶ平も下に、黒木立で覆はれてゐるのが眺められました。それで、あの恐ろしい瀧はこの茶釜ヶ平と思はるゝものさへ越せば、遭遇せずに濟むと安心して、愈々その右側に出やうと急な平を下り始めました。

平には黒木がよく茂つて其間に倒木や若木がありましたが、下りをさまで邪魔する程でもありませんでした。却つて若木は急な下りを支へるに都合よく、次から次へとつかまりながら落ちるやうに下りました。幹と若木の葉しかみえない中を無暗に倒木や木の根をまたぎながら下りました。十五分も下つたと思つたら急に前が明るくなつたので出てみると蛇ぬけがありました。あまり急でもないのでそのまゝ下りました。木苺が實つて、其とげで手足を傷める詫の如くに、おいしい實を呉れました。この抜けた跡は平地に押出して、その儘緩るい窪みになつてゐました。窪みのあたりは既に苔が生えて、水溜もありました。こゝが茶釜ヶ平だと定めてしまひました。果してどうか、黒木立のうちでは何ともいへません。蹈んだ徑らしいものも見えました。蛇ぬけにも足跡らしいものがありました。果して人間のでしたかどうか。その徑を辿つて右の方へとゆきますとまもなく澤の音が激してきこえました。かなりの水量があつて右から流れ落ちてゐるので、茶釜ヶ平の南を流れてゐるものときめて、之を辿ることにしました。澤に沿ふて徑らしいものがあり、撈籠のすてたのもありました。山椒魚でも捕るのでせう。

澤は次第に右に廻り、一度平たくなつて再び急になりましたが、石も餘り大きくないので——木暮氏から岩が大きくなつたらひどい崖があると聞いてゐるので——まあ安心、之ならと思ひつゝ進むと石ころがなくなり岩床があらはれて來ました。さあ瀧だと恐れましたが、果してさうでした。しかしそれは瀑でなく水と共に岩床を傳ふて下ることが出來ました。一度平になつて右に直角に曲りましたが、すぐ前の方向に戻りました。と思ふと下ののぞけない崖の上に出ました。さあ愈來たなとどきッ

としました。あれほど用心してやつて來たのに、やつぱり赤岩澤に入り込んだのかと思ひましたが今更どうすることも出來ない。遲れて來た山口を待つて、右を絡むことにしました。絡み終ると尾根の右側から同じ位の澤が合流してゐました。それで尾根は細く痩せて、落合に向つて落込んでゐました。岩の露出した、さまで老いてゐない栂の間をひどい困難もなく落合に着きました。この瀧がおどかされた赤岩澤かと思つて振返つたとき、例の村人の誇張にのせられたなと苦笑せざるを得ませんでした。瀧は二段に分れて懸崖から瀑となつて落ちて左手から（上向いて）斜に出てゐる岩床にぶッつかり、そのまゝその上を撥ねて瀧壺へと辷り込んでゐました。

時既に五時を過ぎて、日足が滅切り短くなつたこの頃の暮の程近いのが犇々と、意氣地ない病後の二人を畏れさせて來ました。

瀧の後も谷水は岩床を淙々と音たてゝ洗つて、兩側は高い懸崖が續いてゐました。この間に瀧も尙五つ六つ懸つてゐました。しかしそのうちに兩側から澤も合して谷も次第にひらけ、河原や叢もあるやうになつて來ました。

この叢の中には、赤岩澤の下で落合つた左（上向いて）の澤に導かれてゐた小徑が見出されました。この小徑はこの澤を登り詰めて——その入口には石が積んでありました。——錫ヶ岳にゆくものだらうと思ひます。

宿堂坊山の北を巡つてくるネギト澤が合してからは谷は殊に廣く、左から大岳の南を流れ落ちる白檜立の澤が落合つた所は、極端に大きな石原となつてゐました。

急ぎはしたのでしたが、山口の草鞋がすつかりきれて了つたので思ふ樣に飛べず、この落合に着いたのは五時四十五分でした。みるとそのすぐ下で澤は崖に突當つて右に折れてゐます。左側も亦崖になつて未知の澤は再び深い峽となつて、水量も徒渉すれば腿をも濡らす程になつてゐました。日がと

つぶり暮れるのは、もう三十分を殘こすまいといふので、この河原に「のしやがみ」することにしました。

幸ひ流木が石原の間に充分あつたので、明るい間にと二人でやつと運べるやうなのを十本とそれに小さいのを、蟻が夏の間に蓄積するに忙しいやうに、殘りの三十分を惶たゞしく費しました。六時半となれば、秋の日足の短かいのを今更ながら喞ちつゝ、休まなくてはなりませんでした。宵の暖かいうちに一寢入しやうぢやないかと夕飯もたべず、火もつけず、勿論、山の神秘だなんて洒落れたことも言はず、寢ることにしました。

山に入れば野獸の如く、故郷に歸つた如く安らかに寢られます。柳の下の河原の砂は搖籃の如く穩やかに、澤の響は子守歌の如くに、この世の平和の限りを稱へます。

「おい變だぜ」とかすかに聞える聲に驚かされると、山口は尙寢付かれずにゐたらしく、澤の下を指さします。見れば、崖と崖とに挾まれた峽には、夜霧立罩めて、その奥の方が次第次第に明るくなつて來ます。ごう〳〵と叫ぶ澤の聲は却つて靜寂を意識せしめます。眞暗な崖はその奥から言ひ知れぬ神秘の脅迫を絞出します。しかし、霧は次第に明るく、遂に燈火がぼんやりと弱い光を出してやつて來ました。宿の迎だと思つて、あわてゝ近づきました。岩から辷つて提灯を消したりなどしながら近付いてみれば、火光は漁のカンテラでした。光の下に澤の流れはすきとほつて碧い青い色をなしてゐました。しきりと岩の間の魚を突いてゐました。兩岸を一人づゝ上つて來ました。しかし、二人とも漁に夢中になつて提灯さげて近付いた私達に氣付かないやうでした。數間の間近に行つたとき、不意に氣がついたらしく、一聲叫ぶやいきなりカンテラを吹き消しながら、逃げ出して了ひました。しかしカンテラがなかなか消えないため彼等のあはてゝゐる樣が、はつきりと見えました。魔物と思つたのでせうか、それとも密漁をつかまると思つたのでせうか、いくら呼んでも止まらずに霧と闇の中に消え

失せました。後は再び靜寂と暗黑。病氣擧句の二人は屋根の下に寢られるかと喜んだのも無駄になつて、すごすご前の所に戻つて、焚木に火をつけました。焚木は三尺も高く、一坪の三方をかこんだ程積み上げてありましたから、朝までは大丈夫と再び眠りに就きました。うとうとすると火氣に堪えられず、眼が醒めます。一夜の中に何度となく眼が醒めました。眼をあければ、眼に入るものは焚火の焔と尾根の上に輝ける星の群。しかし、星は眼の醒める度に、カシオペア、牡牛、オリオン、天狼、と變つてゐました。

午前六時頃全く夜は明け放れました。むすび一つたべて一夜の泊の跡を捨てました。この頃から、雨が小さく降つて來ました。四十分ほど、草鞋のない足をいたみながら谷を下つて來ましたら、左岸の笹の茂つた中へ登つてゆく徑がありました。そこに入いるとすぐ菜畑まである小屋がありました。小屋には草履がありましたけれど、無斷に貰ふに忍びず、痛む足をいたはりつゝ過ぎました。柳澤は大きく上高地あたりの梓川ほどになつてゐました。徑はしばらくその岸を、笹の中についてゐましたが、七時頃には千手ヶ原に達しました。

原には天を摩する山毛欅が笹原の中に點々と立つてゐます。笹原は飽くまで平で秋雨が烟つて周圍の山々を淡くぼかしてゐました。二十分程して小屋の三四軒ある千手の部落に着きました。こゝで外山澤の橋を渡り、左にとつて北に向ひました。次第に東に折れてゆきます。御料局でつけた道は坦々として、山毛欅の大木の間を通つてゐます。再び橋を渡つてから、道の兩側には車前草が生え、笹原のうちを尙ほ眞直に進んでゐました。尙三度橋を渡り外山澤の南側に出ると小屋がありました。かなり疲れて來てゐるので休息を賴めば、老人が若者一人を相手に煙草のんでゐたのが、親切に爐邊に導いて呉れました。そして脚袢、足袋など乾しながら、澁茶勸められるまゝに、二時間をいゝ氣持になつて過しました。

小屋からはすぐ登りになつてゐますが、二町程ゆるく登つて峠に着きます。峠からは前にもましたゆるい下りで小田代ノ原におりてゐます。楢の木は大きく、まつくろな幹はいかにも直く、綠の大きな葉は、高く空を覆つてゐます。細い細い秋雨は幹の間をするすると落ち、音もなく熊笹の葉にふりかゝり、ぬれた葉は鼠色の空の光を照りかへして光つてゐます。先の分らない尾根や、いつどんな深潭や瀑布に出會ふかと心配しながら歩いてゐる昨日にひきかへ、二百十日もすんで唯だ木の葉の色づくを靜かに迎ふる秋雨と共に安らかな氣持で原の方へと下つて行きました。平らたくなつたと思つた頃右手に楢の幹の間が明るくなつて來ました。雨を含んだ雲は低く下りて、雨と共にあたりを掠めてはゐますが、其中にほのかに見えるほの黄ろい草の色、白鼠の白樺の幹がぼんやりと光つた沼の水。谷や木立をぬけて來た眼にはいかにも廣々として、又、軟かく、心を惹かれずにはゐられませんでした。

沼の汀までは一二町もありませう。その距離がまた美しく軟かくするものの一つでした。近よらにとも思はず、尙柏の下を拔けて往きましたが、沼も次第に淺くどこともなく草が生えだしてゐると共に徑の兩側の柏もとぎれてしまいました。前には既に霜枯れした草原がひらけてゐます。それ出やうとするところに、白樺が二本道の兩側に立つてゐました。白皮のはげた黑い肌が、縞になつてゐるのに雨がかゝり、霧に烟ぶる遠くの林や雲につゝまれた男體の裾の前に立つて、美しい對照をなしてゐました。しかし白樺の免かれ得ない感傷の弱々しさは、二人をして「藝術寫眞」といはして振り捨てさせました。私たち、覆ひかぶさつた、沈鬱な、黑木立から、峽谷から、逃れでて來たものにとつては、かよはいかの梢に眼を與へることは堪え得ないことです。たゞ遙かに眼をやりたい。かすむ野の果てを眺めることがたゞ嬉しい。

更に五丁もゆくと再び楢の林にはいり、少し上下にうねつてゆくと、道の右側が十米ばかり低くな

つて、その下から、こんこんと泉が湧き出し、流れ出して、池となり、綠したゝる木の間にかくれ去つてゐるのに出遇ひました。池の水面には浮草が一面に覆ひ、莖と葉との間より、清艶な水が、深く暗くのぞいてゐます。秋雨は同じく細く降つて池の水と音なく合してをります。靜寂、清艶、ニンフといふものがあるなら、こゝの外にはゐまいと思はれるばかりでした。

尙一つの楢の林をもつた丘を越えると陰氣な流れを渡ります。流れは充分の水をたゝへて音なく、楢の覆ひ重つた葉で空を遮ぎられた暗い下を熊笹につゝまれた丘の間を縫ふやうに流れてゐました。湯川です。

之を渡つて道は小高い原にのぼります。植林してありますが一尺にも伸びてゐませんでした。雨は愈烈しくなつて、振返れば戰場ヶ原がけぶつてゐました。平板な單調な戰場ヶ原もかく霧がゆきかひ秋雨うちしめつて見ると美しいと感ぜられました。

この原を拔けると例の馬車道に出ました。湯の宿についたのは丁度十二時。湯につかれば、雨はなほ蕭々として降り、雲は緩舒として外山をめぐつて湖の葦は霜枯るゝ前の一屑の靑さに輝やいてゐました。

あゝ山は雨。雨の山。雲の山。
雨なくして何の木立でせう。
雲なくして何の山岳でせう。

湯につかつて限りなく山の雨を賞へてゐました。

雪の上ノ岳へ

榎谷徹藏

大正十二年十二月二十五日。晴——大阪發北陸線夜行列車。
二十六日。曇——富山下車、笹津迄自動車、土迄トロ、同所泊。
二十七日。曇後晴——大多和峠越、有峰泊。
二十八日。小雪——小畑尾峠越、眞川小舍泊。
二十九日——三十一日。雪——眞川小舍滯在、スキー練習。
一月一日。晴——上ノ岳登降、眞川小舍泊。
二日。雪——小畑尾峠、大多和峠越、大多和泊。
三日。晴——土迄徒歩、片掛迄馬橇、同所泊。
四日。曇後雨——飛驒街道笹津迄徒歩、富山迄汽車、富山發北陸線夜行列車歸途。

一、大多和峠

雪解の滴りが、ぢび〳〵と佗しい音を立てゝ、夜通し枕に通た。

飛驒街道の土の朝は靜かに明け亘つて、幾群らの卷積雲が高く天半に凝つてゐた。高原川の峽奥を取り圍む高い雪の峯々は、その雲の罅隙を漏れる日の光を、時々硬い半面に浴びると、目醒めたやうな際やかな調子に匂ひ立つのであつた。午前七時、屋内氣溫八度(c)。

けさは、富山からわざ〳〵長途を見送りに來て呉れた四人の人達と別れ、富山から別に新たに加はつた三人と、活動技師一人と共に一行十一人、人夫十三人、伊藤氏の支配人堀田銀一氏——一行の接待係——、それへ新しく雇ひ入れた荷物運搬用の駄馬二頭と馬喰二人、それ丈けが一隊を作つて、飛

越國境の大多和峠を有峰へ越すことになつた。ゆふべ迄は、殆ど土踏まずでこゝ迄運ばれて來たのであるが、これからは愈徒歩で幾日かの間雪の山路を辿るといふ樂しい期待に、私達はいづれも隱し切れない悅びの色を現はしてゐた。

私等七人が、大阪朝日新聞社の樓上で、多數の社員達に護られるやうにして乾杯を擧げ、燦んな見送りを受けて梅田を立つたのは、十二月二十五日の夜であつた。終夜北陸線の夜行列車に搖られて、富山に着いたのは二十六日の午前七時少し過ぎ。プラットには手旗を飜した多數の出迎人が一行を包圍して、沸き返るやうな歡聲が揚げられた。目映しいフラッシュの閃きが、こゝからもそこからも爆發して、一行の仰々しい登山姿が、昨夜梅田驛頭でやられたやうにして、幾つか撮られた。改札口から何心なく出て行く鼻先きには、もうちやんと活動の器械が組み立てられて、ぎり〳〵とハンドルが廻はされてゐた。大阪朝日新聞富山支局をはじめ、富山縣電氣局、富山スキークラブ、越中山岳會などの人々に擁せられて、驛前の千代館に這入ると、二階の座敷をぶつ通して、一行の爲めに朝餐の準備が整へられた。そのうち朝日社の旗を揭げた四臺の自働車が門前に横付けにせられ、多數の人夫が、がや〳〵と階下で荷物の結束をやり出した。

笹津迄自動車、それから神岡鑛山事務所の好意によつて、鑛物運搬用トロッコ四臺で、土迄人夫に押して貰ふことになつた。――高原川沿道の概觀は、山岳第十六年第一號「春の飛驒山脈越え」で廣瀨氏が詳述して居られるし、トロッコ道からの眺めは、街道筋以上に更に壯大ではあるが、要するに大體あれにある通りだから省略する――

昨夜、土の宿では、私達十人の爲めに、各自の專屬人夫を抽籤で定めて、堀田氏が一人〳〵その顏

繫ぎをやつた。私には佐伯三九郎が當つた。

出立午前九時十五分前。飛驒街道から大多和みちへ岐れる角のところに、活動器械を立てゝ、宿から一人宛出て來ては、その角を廻る姿をぎり〳〵と撮つた。みちは直ぐ跡津川の吊橋を渡つて、その右岸を溯ることになつたが、この峽谷も高原川程の大きさがあつて、兩岸の山が逼迫してゐる形は、あれ以上に雄々しく峻しかつた。川床の勾配も亦此方の方が急で、水勢の激越してゐることも亦猛烈であつた。

峠の頂迄は、概してこれの右岸沿ひに、土から丁度四里の登りである。ところ〳〵阪みちのカーヴしてゐるあたりを登つて行く姿や、小石を飛び〳〵に、細流を横斷するところなどを、技師の勝野君がぎり〳〵と撮るので、至る所、時間が掛つて、私達があたりを眺望したり、鳥渡休んだりするには都合が好かつた。

一里、跡津川。雪は土と同樣、ほんの班らに殘つてゐるに過ぎなかつたが、更に二十七町、佐古の村落が高く行く手の山腹に仰がれる頃から、みちにも時々雪を踏むやうになつた。流れはいつの程にかずつと脚の下に遠く距つて、巨大な瀑布が二箇所ばかり、水烟を揚げて轟轟と落下してゐる素晴らしく痛快な眺めも、一と目の下に展開した。

佐古の村に入ると、積雪三寸。ざく〳〵とざら目のやうな雪を踏んで行く心地も好かつた。道は高い山腹を絡みつゝ、次第〳〵に登つて行つたが、背後の空には、高原川の西岸に蟠る漆山岳續きの白く高い嶙峋や、廿五山の根張り強い大岳が、嚴めしく傲兀した。佐古から更に二十五町、大多和の村は、又一段と高い山腹にあつた。人家のあるところと、その附近丈けが、緩やかな、靜かな高原狀になつてゐて、もうこゝでは、積雪が八寸程あつた。併しそれも幾日か經つて、充分締つた雪であるか

ら、田圃はどこでも一面に白く蔽はれて、畦の下草などは、すつかりその下に隱されて居た。

零時十分、一番奥の古田長右衞門方に行つて晝食をした。私達の荷物で、專屬人夫の背負つてゐるほんの手廻り器具以外は、すべてけさ雇つた駄馬二頭の背に積まれて、一行よりもずつと早く土を出立したのであつたが、これから先きには、もう馬の脚が立たないので、すべて人夫が分割して背負ふことゝなつた。しかし迚も十三人では背負ひ切れないから、この村で更に强健な數人を臨時雇ひ入れた。家の門口から上り框へかけて、一帶に山積された雜然とした荷物、それを整理する人夫達で、暫くの間、家中大騷ぎであつた。

新しい人夫のうちに、古田の家のお春さんといふ十七八の娘が一人加はつた。姉さん被りにした白手拭の間から、血色の好い柔らかな頰や、潤んだ豊かな瞳がちら〳〵と覗くのも、荒々しい山男達によつて釀されたアトモスフィアを、不思議に和らげるのであつた。

「山國には珍しいシャンだね。」

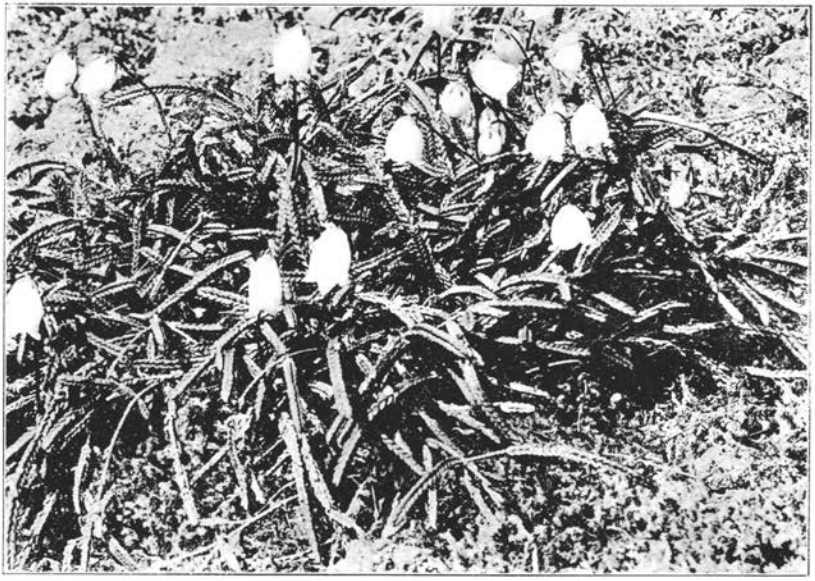
「名高いんださうだぜ。‥あれで、五斗俵の上へ、もう十貫許り何にか着けて、山を越すといふんだからな。」

古田の家の柱は、欅の八寸角ばかりが使つてあつた。大黑柱は一尺もあつて、建具から床板から漆でてか〳〵と深い光澤を發つてゐた。この村でも有峯でも、家屋はすべてこのやうに、頑丈なものばかりであつた。

出立午後零時三十五分。村外れから直ぐ冬枯れた雜木林の中に這入ると、積雪既に一尺に及んで、餘程注意しないと、凹んだところへ、ざくり〳〵と深く踏み込んだ。併し有峰へのみちは、伊藤氏の人夫達によつて、能く拓かれてゐるので、歩行には餘り困難もなかつた。

けさから曇つてゐた空が、やつと日光を漏らし初めると、雪の面が一時に眼醒めたやうに、際やか

ウチハマンネンスギ（樽前山喬木帶）



イハヒゲ（樽前山）

武田久吉氏撮影

な輝きを發つて、うるはしい明暗が華やかにきほひ立つた。そろ〳〵シユネーブリレを取り出す人達も出來た。富山から蹤いて來た純黑と純褐との逞しい日本犬が二頭絶えず前になり後になりして、雪の中を勇しく走り廻つてゐたが、灌木の半ば雪から頭を出してゐたあたりで、茶の方が山兎を追ひ出した。「それ！」といふので、年來腕に覺えのある後醍院氏は、人夫の擔いで來た銃を引つたくるやうにして狙ひを定めた。

「あかを擊つてやらないやうに……。」私は獨りでさう思つて、はら〳〵してゐた。

が到々山兎はどつかへ逸して了つた。空寂とした深林の高い梢から、小鳥の聲が聞こえた。

急な山嘴に、大きいチックツァックを描いて登るところや、頻繁に、「なぜ」の出さうな崖面を絡むところなどを過ぎて、次第〳〵に地盤が高くなつて來ると、いつか又、毛欅や栂や樅の深い森林に這入つたが、この森はどこ迄も長く〳〵續いた。みちはその下闇を縫つて、ゆるく登り一方であつた。左手の山隈から小さい澤の流れて來るのを横ぎるところが、三箇所ばかりあつた。人夫はそれを一ノ谷、二ノ谷、三ノ谷と云つて呼んでゐた。幾度びか小さい登り降りはあつたが、結局登りの方がずつと多く、もう峠の頂であらうと思つて、一としきり登ると、又向方に高い尾根が横はつた。そんなことが幾度びとも知れずあつた。

跡津川の峽谷も小さくなつて、もういつしか潺々とした、さゝやかな流れに過ぎなくなり、やがてはその流れさへ、雪の下に埋もれて了つた。積雪は既に三尺に及んで、行歩は可なり艱難を覺え出した。一歩々々と拔き足で登つて行く爲めに、すぐ疲れて了つて、幾度びとも知れず立ち停つては休憩させなければ續かなくなつた。

やつと千三百米突の頂上に達したのが三時二十分。小さい地藏堂は、屋根迄雪に埋もれて、向拜のあたり丈けが、纔に掻き除けられた間から覗いてゐた。はつと行く手、山袖の幾重にも組み合はされ

た深く暗い谷の上空に、高く藥師岳から上ノ岳續きの連壁が、雄々しくそゝり立つたが、惜しいことには、絶巓一帶が重い懶い雪雲で、すつぽり塞がつてゐた。雄大な藥師の左の側線が力强くその雲の中からなだれ落ちてゐるすがたは、それでも一方ならず胸を躍らせるのであつた。奥深さとか、重みとかいふ方面からでは、却つて恁ういふ狀況の時の方が好いのかも知れなかつた。この一帶の不可思議な暗い幢畫を背景にして、雪の緩斜面を下つて行く一行が、又活動に這入つた。

一寸の間、雜木林が切れたかと思ふと、やがて又深く濃やかな木立になつて、ひたすらその暗欝な下闇を、有峰へと下りに下つた。空は又ひどく曇つて、重い雪雲が頭上を壓へた。この下りが一里半ある筈だが、大多和から頂迄の一里半に比べると、傾斜がずつと緩く、スキーを用いるのには好かりさうだけれども、所々に細い流れがあつて、さういふところでは、雪が切れてゐるから、一々スキーの着脱をやるのが、隨分うるさいことであらうと思へた。それでも人夫であらう、きのふあたり下つて行つたらしいシュプールが殘つてゐた。勿論快い滑走の痕などは、どの部分にも見られなかつたが。

同じやうな深林の下雪を踏んで、ひたすら下り續けると、前途、脚の下に廣やかな眞白の高原が現はれて、その上にぽつり〳〵と有峰の人家が見え出した。

「あの右の端の家が、今晩のお宿です。」電氣局の廣田氏は、恁う云つて教へて呉れた。

二、有　峰

長い〳〵森林の下から出離れて、やつとその高原へ掛ることが出來た。幽かなうねりを打つて、廣く續いた雪の原は、生き物一つ影を止め得ない程、寥廓の趣を極めてゐた。半ば締つた濕雪を踏んで、靜かに歩いてゐると、七百年の昔、眞川の谿谷を溯つて、萬山の奥深く這入り込んだ人達が、この盆地を永遠の隱れ場所に見定めた心持が、何んだかはつきり解るやうな氣がした。限りなく暗く、

沈んだ胸を抱いた人々の心を、丁度今の空合がシムボルしてゐるやうにも思へた。私達の誰れもは、深い沈默を續けた儘、おもむろに迫つて來る雪曇りの黃昏の裡を、靜かに歩くのであつた。

先つき敎へられた家にやつと着いたのが五時二十分。附近積雪一尺三寸。專屬人夫は、それ〴〵の主人の足元に跪いて、靴を脫がせ、ゲートルを外づし、丁寧に身仕度を解かせて、手廻り器具の整理をした。大きい爐には、もう熾んに焚火が燃え上がつてゐて、私達はその周圍で快く暖を採つた。午後六時、屋內九度五分。

有峰の近況は、各方面で發表されてゐる通り、縣電氣局の買收以來、十二戸とも悉く、その懷にした幾萬といふ、彼等には生れて甫めての大金を抱へて、思ひ〴〵に都會へ出て了つたので、全村すつかり空家になつてゐた。唯こゝの岩段才次郎といふのは、伊藤氏が三月に山へ這入る迄の間、秋からずつと賴まれて、老父吉之助夫妻で、留守居に戻つて來て住んでゐるのであつた。すべてこの村の家は、大多和同樣、木割の太い、堅牢な構造で、ちよつと寺院のやうな感じのする、がつしりしたものであつた。岩段の家は十間に四間で、內部の仕切り方は、全然有峰特有の傳習的形式に據つてゐた。八疊の佛間の奧に、穩密な暗い四疊の一室があつて、そこには家長夫婦の萬年床が延べられるやうになつてゐるのも、矢張り一定の形式であつた。廣い頑丈な浴室の中には、三人程も這入れるやうな、巨大な味噌槽を据えて、そこで私達を入浴させて呉れた。

夜は吉之助老爺から、色々村の話しをして貰つた。老爺は無感覺のやうでゐて、どつかに何んか感激してゐるやうなところのある、不思議に人を惹き付けるやうな表情で、問ふが儘に話して呉れた。――山岳第五年第一號「越中藥師岳及上ノ岳」で辻本氏が詳述してゐられる項目や、各方面に幾度びか發表された事柄を拔きにして、要點を書くことゝする――

……有峰は七百餘年前から、一切墓碑を作らなかつた。唯土饅頭を拵へてその上へ石を積む丈けだ

つた。祖先の年代は過去帳に據つてのみ繰り出すので、

「おらがとこでも、二三年前に五百何十年とやら年回を濟ませたがや。」

百年餘り前には、全村の戸數七十、維新の前には三十六戸、三十六年前迄は十三戸、四年前から十二戸となつて、現在の全滅に至つた。尤も恁ういふところは、よし俄成金にならずとも、信州北安の小熊山續きにある黒澤（くろっつあわ）の村のやうに、いつとなく段々亡びて行くものに違ひない。

降雪は例年十一月中旬に初まり、春の彼岸を過ぎると、もう滅太に降らない。初雪の一番早かつたのは、吉之助老の記憶によると、十月五日がレコードである。積雪の深さは、毎年八尺が限度であるが、大正五六年に、一丈一尺七寸を測つたことがあつた。此邊の吹雪はさう烈しいことはなく、大多和峠の止まるやうなことはないさうだ。峠の雪は概して、村より二尺位深いのが通例である。寒氣も餘り酷烈といふ程でなく、零度になることは稀である。――翁の零度は多分F で云つてゐるのであらうと思はれる。――夏季に於いては最高八十六度で、九十度に及ぶことは絶無である。併しその八十六度も、年に二三日位のものである。尤も朝夕は盛夏で六十度位に低下する。

夏に一番困るのは大虻で、それが無數に群集するから堪らない。手でばつと叩くと、一度に三十匹位死ぬことが珍しくない。嘘のやうだが、本當の話しだ。頭でも肩でも、止まつたと思つて、傍から「おろゝ」（居るぞの意）といつて注意するうちに、もう刺してゐる。

村人の主食物は稗の白舂きで、少量の蕎麥や粟を用うる。野菜物は何んでも出來る。殊に大根などは、暖地で得られない、味の好い良質のものを作つてゐる。――私達がこゝで味つた漬物は、いかにも翁の言を立證してゐた。――果物は李だけで、その他は何んにも出來ない。栗のやうなものでも霜が早い爲めに實らない。

熊の肉は隨分燒んに喰ふが、二十年も前には、皆棄てたものだ。此邊から眞川へかけては、中々澤

山居る模樣で、昔も今も餘り變らない。尠くなつたなどゝいふやうなことはない。つい數年前、一と冬に二十六頭も獲つたことがあつた。大概「おどし」で捕つたが、手槍を用いたことも多かつた。

（おらが方にも一つ殘つてるがや。）

恁う云つて翁は、どこからか、丁寧に麻紐で捲き上げた穗先を一つ取り出して來た。

「氣の弱い衆は突き得んがや・・。愚圖々々しると、熊に手繰り寄せられるで。」

太くだみた聲、燈火にぎら〳〵と光る切先、遠い〳〵昔に還つたやうなこの時のシーンは、人々に異樣な印象を殘した。オーロックスを手槍で突いた頃の原人のさまが、譯もなく想像せられるのだつた。

翁の話はやがて冠婚葬祭の方面に及んだ。村は言ふ迄もなく、開闢以來他村との姻戚關係を作らずに來たもので、結婚の際には「鍵元」が宿元になることに定まつてゐた。「鍵元」とは村の藥師堂の鍵を預る家で、西谷に一戸、東谷に一戸、二年位の任期として、毎回抽籤を以つて決定する。元より大家族制の村であるから、一家に多數の夫婦が共棲するけれども、長男のみを重じた風があるので、嫡子以外のものは、次々と山を越えて、どこかへ出て行つて了ふから、從來四夫婦より澤山居た家を知らない。從つて人口も漸次減少の形であつた。・・維新迄は、親のない子は、「元へ戻す」と云つて、皆殺したものだ。・・此村の人は全體、昔から徒跣で歩いてゐたもので、まあ滅太に履物を用いない。

村は全部禪宗で、葬儀は總て土葬に限つてゐた。それに妙な土地で、幾らしても屍體が腐らないから不思議だ。三十六年位經つても、蛆一つ湧かずに白くなつてゐる。

村の祭は、舊六月十五日のお藥師樣だ。藥師岳の頂上のお祠で執行するのだが、當日は午前二時頃から登つて、晝迄に降りる。そして村で一同が熾んに飲む。鈴木主水の唄で踊つたりして、底拔け騷ぎをやるのだ。それからあの岳のお祠に、金佛が一體安置してあつて、これが村での一番古い佛像で

あつたが、今は何處かへ紛失して了つた。

加賀侯の頃であつた。村には三十石扶持が付いてゐたので、一切木を伐ることゝ、火を焚くことゝを禁じられて、村民が非常に困つた。それで奉行お見廻りのない時には、内緒でそれ等の禁を犯してゐた。巡視は五月、八月、十月の三回であつた。尤も伐木は、お指圖のあつた場所丈けで許されてゐた。

八十年程前に、不思議な御人（ごにん）が住んでゐたことがあつた。その人が松明を持つと、草に着けても火が移らず、屋内でも柱や建具に燃え移らない。寒中雪の上に、裸體でぢつとしてゐても、寒くはなく、氷を割つて潭水に入つても平氣であつた。死んだら、立つた儘で埋めて呉れいといふ遺言によつて、その通りに土葬した。

「ついあすこに土饅頭があるが、今でも立てつた儘でゐるがや。‥棺が長えで。」

兎に角村の記錄や寶物は一切、氏神樣に預けてあつたのだが、百年程前火災があつて、それ等は全部烏有に歸した。

「先祖は本當にえらい人だつたか、山賊のやうなものだつたか、分らんがや。」‥

三、小畑尾峠

夜來しと〳〵と小雪がちらついた。夜が明けても、滿天の雲は暗く、重く垂れて、そよ風一つない有峰の盆地に、紛紛とした粉雪が絶え間なく靜かに降り濺いだ。

寒氣はしかし豫想程酷しくはなかつた、今朝七時二十分に、屋内で三度、緣先の下で一度。何んしろ前夜から堀田氏の注意で、どつさり火を入れた大火鉢二個を、緣側に置いてあつたので、餘程溫度が高められてゐた筈だつた。檐先の氷柱も少しは垂れてゐたが、その尖端から時々ぽたり〳〵と雫が

滴つた。

人夫達は一行の衣類をすつかり整理して、靴の手入れ迄、殆ど競爭的に行き屆かせた。出立九時四十五分。けふの行程は、千八百米突の小畑尾峠を越して、眞川の谷底に、昨夏伊藤氏の建造せられた小舍迄行くといふのであつた。門口で岩段老夫婦と挨拶をしてゐるところや、一人々々順繰りに雪を踏んで進んで行く有樣を、勝野君はぎり〳〵と撮した。

こゝは西谷の領域で、東南から小さい尾根先きの出てゐるところから東が、東谷になつてゐる。その突つ端のところに、小さい地藏堂があつて、地藏尊には、もう住民が居らない爲めか、印度更紗のやうな感じのする木綿の袋が、頭からすつぽり被せてあつた。堂から少し行くと、東谷領に、二間四方位の藥師堂がある。小さいながらにも、建築はすべて有峰特有の木割の太い、がつしりしたものでまださう古くはなかつた。併し內部はもうすつかりがらん堂で、正面の高い棚に安置した本尊の厨子には、赤錆びた錠が下ろしてあり、左右の脇立は露出の儘、佗しくそこに放置されてあつた。しかしこの脇立は、氏神の狛犬と同じ系統の手に成つたものぢやないかと想像せられる節があつた。——犬は今亡くなつてゐて、見ることが出來ない——。木彫、高さ七八寸の、至つてプリミティーヴな像である。久しく香烟に燻べられて、殆ど刀痕の分らない迄に、眞黑く脂ぎつてゐた。亡んで了つた山村の遺跡といふ感が深かつた。堂前に又一つ、更に小さい堂があるが、雪の中から出てゐる向拜の下へ廻つて、何にか面白い發見でもと思ひながら、軒廻りを見ると、蛙股から繪樣肘木、繰形、虹梁、眉、鐸杖堀、ずべては近代の、有りふれた、しかも可なりお粗末なものであつた。奈良や西の京あたりで、ひよつくり珍物を見付け出すやうなことは、こゝでは全然失望の形であつた。

あたりの雪の原野には、村家がぽちり〳〵と散點してゐるが、いづれも空家ばかりで、戶口は几帳面に板ですつかり釘着けにしてあつた。それ等の家々は、永へに歸ることのない主人と別れて、その

儘次第に朽ちて崩壞して行くより仕方がなかつた。いかにも物悲しく、うら寂しいシーンだつた。

そのうへ縣電氣局では、下流に堰堤を築いて、こゝ一帶の盆地を貯水池にする計劃があるさうだから、早晩有峰の村は、あの神戸水源池の千苅と同じやうに、池底深く埋沒して了つて、七百年間の長い歷史の跡を、永遠に葬るであらう。——さま〳〵な葛藤の跡も、若い人達の熱烈な戀の跡も、奇異な「立てつた儘」の人の事蹟も、白くなつた儘で腐らずにゐる幾つかのマンミーも、・・ローカルカラーに豐かな、さうしたあらゆる場面の跡は——。

＊　＊　＊　＊　＊

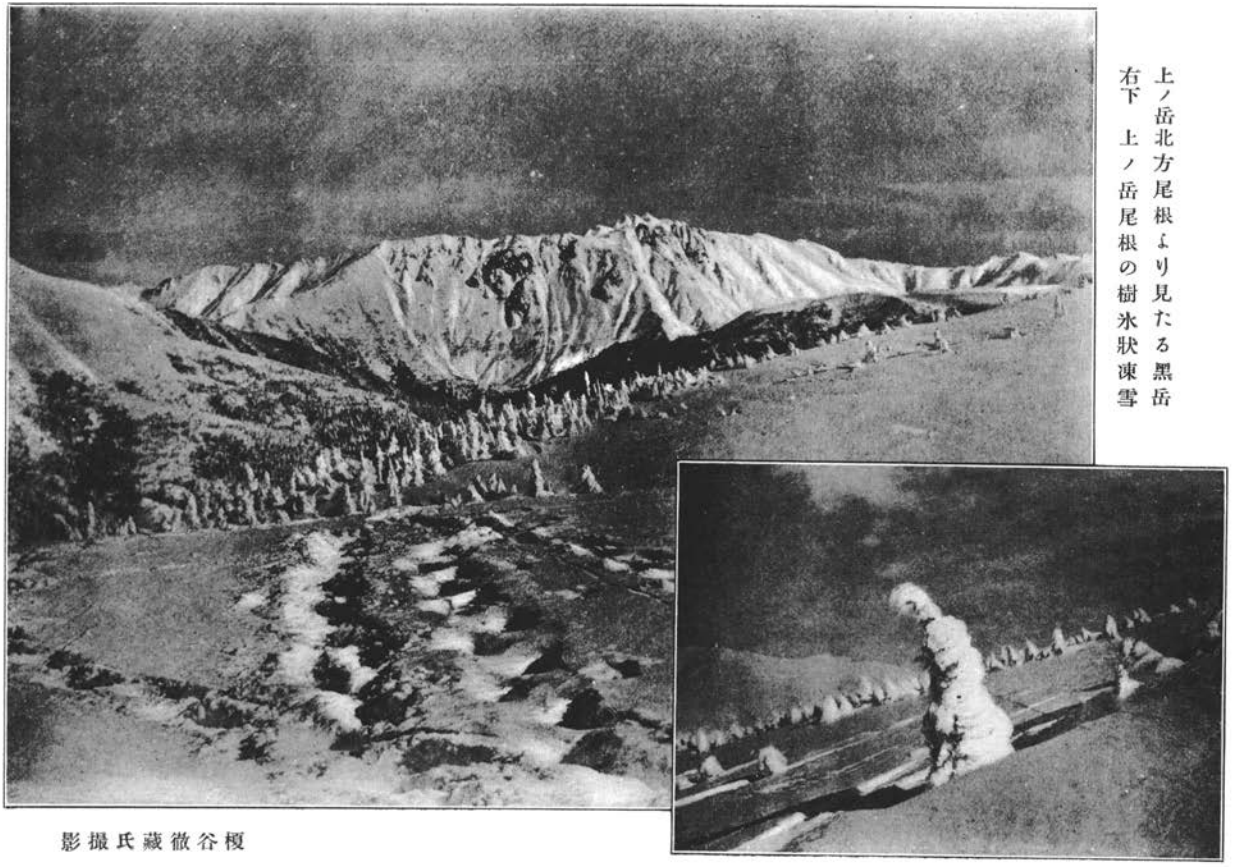
縣電氣局から私達を見送りの爲めに、後から急派された人は、昨夜遲く着いたさうで、けさは早くから村外れ迄出かけて、一行を懇ろに見送つて呉れた。人々の胸には、一縷悲哀に似た、樂しい別れの情が通つた。

村外れの東谷を渡ると、眞川へ越す小畑尾峠のみちが、いきなり當面の峻しい尾根先きに掛つて、今朝早發した一部の人夫達の足跡が、その急峻な雪の斜面に、小さなチックツアックを殘してゐた。見上げると、峠續きの、大尾根が雪闇の空に、高く髣髴として、朦ろな影を淡黑く描いてゐる。

「あの尾根を越すぢや。岩段の老爺も、嵩高な荷を背負つて、人夫の中に交つてゐた。「峠の“だわ”は、此處から見えんがや。」

これからは、ずつとこの尾根先きについて、ひたすら登り續けること、高距八百米に及ぶのである。或はなだらかに、又は急峻に、うねり〳〵と雪を踏んで、樅や毛欅や白樺の枯木立の下を登つて行く心地は、いかにも暢氣な、豐かなものであつた。雪の折でなければ味はない、落莫とした、しんみりした氣分を、私は堪らなく嬉しいと思つた。

時々南の方から、寒い切るやうな風が疾走して來て、紛雪を眞横に吹き付けた。それでも一行はめ



上ノ岳北方尾根より見たる黒岳
右下　上ノ岳尾根の樹氷狀凍雪

榎谷徹藏氏撮影

い〳〵赤く熱した顏を元氣よく晒して、快い汗を流すのであつた。村外れから凡そ半里位も登つたと思はれるあたりになると、次第に積雪の質が變つて來て、粘着せない粉雪になつた。シュトックのシュネーテルラーのあたりがぐう〳〵云つて靜かな底鳴りを立て初めた。靴の底も快い鳴り音が立つやうになつた。私達はけふの行程の安易を想つて、出來るだけ途々の光景を深く頭に殘すことを望んでゐたから、幾度びとも知れず休み〳〵しては登つた。まるでピクニックにでも出掛ける氣分である。

きのふ大多和で臨時雇入れた人夫達は、昨夜大部分歸して了つたので、けふは私達の人夫が、めいめいどつさり荷を背負ふことになつた。その人夫の後續部隊も、いつの程にか一行に追ひ付いて來た。勝野君はバックの面白さうなところを見付けては頻りにぎり〳〵とやつた。ある極めて急な登りを、側面からやつてゐる最中に、丁度うまく通信局長の藤木氏が、深い雪の中へ猛烈な尻餅を搗いた。どうしても獨力では起き上り得ないやうな姿勢になつて、酷たらしく雪に半身を埋めて了つた。

「おい止めて呉れ。活動！」

思はず大聲に、悲鳴とも何んともつかないやうな叫びを揚げた。

「關はない。やれ〳〵。」

「こんなところが面白いんだ。」

やつと富山スキークラブの牧野氏に助けられて雪達摩になつて起き上るところから、又ぎり〳〵やり出した。

「好いお芝居だつた。」

「あんなのが自然で好い。」

一行は手を拍つて、互に大笑ひした。

登るに從つて、雪は次第に深く、三尺四尺と加はつて行つた。さうしてテルラーに乘つたのを、輕

く搖ると、直ぐぱっ〳〵と散つて了ふ程の輕い雪になつた。顧ると、きのふ越して來た大多和峠の「だわ」も、もう眼より低くなつて、有峰全村の地形が、名殘なく脚下に遠く展けた。北に當つて鉢伏の峯頭が、降雪の中から、不思議な物寂しいすがたを一しきり、くつきりと現はした。頂邊の雪が、殊に柔らかな純白に目立つてゐた。

同じやうな登りが幾らとも知れず續いた。正午少し過ぎ、雪の中で毛皮や防水布を敷いたりして鳥渡した食事を濟ました。食後コッホアッパラートの熱いコーヒーや、板狀チョコレートなどを分け合つた。

峠近くになると、登りはゆるやかになり、毛欅や樅の深林から拔けて、雪を美しく被つた唐檜の疎らな木立の間を、大きく右倚りから迂曲すると、やがて爽やかなプラトー狀のグラートに達した。そこが峠の頂である。あたりには短矮にして老いた唐檜が、四尺以上の雪の中から、ぽつり〳〵と梢を出してゐた。藥師、上ノ岳續きの眺めは、無論重い雪雲に密封されてゐたけれども、何んとなく廣々とした、博大な迫らない四邊の情景が、おのづから胸を躍らせるのであつた。

眞川の谿底へは、二百米突ばかりの高距を、一氣に辷るやうに降るのであつた。脚下に遠く、雪を截つて流れる眞川の水が、黑く見え出してからそこ迄下り切るのに、二十分とはかゝらなかつた。

四、眞川の小舍

流れに臨んで、七間四方の頑健な新しい二階建小舍があつた。それが伊藤氏のもので、堀田氏の細君や、夏からの留守番四夫婦や、先發の人夫などが、賑やかな顏を揃へて一行を迎へた。

この小舍は、有峰の一戸を買ひ取つて持つて來たもので、そこへ眞川に流れて來る巨大な材木を以つて建て增しをしたものだから、日本の山中の小舍としては、申分のない立派なものである。殊に綴

密な堀田氏のプランによつて、細かしい色々な注意が、抜け目なく行き屆いてゐるから、その文化的施設の點に至つても、恐らく比儔す可きものがなからうと思へた。臺所の中央に切つた八尺に五尺の大圍爐裏の上には、暖房と換氣とを兼ねる爲めに、徑五尺に垂んとする鐵板製のフッドを吊るし、その中央のコニカルヴァーテックスから、屈曲した長いチムニーに繋がつて、炭火から發生する有毒瓦斯を屋外に排出するやうになつてゐる。下座敷には晴れやかなヴェランダがあり、大型ストーヴ三個を備へて、階上階下の座敷を、華氏百十五度迄暖め得るやうにしてある。階上の二室には、採光窓の外に小さい換氣窓があつて、嵌入のフラップによつて、室内の溫度を自由に調節することが出來る。その他廣くして清潔な浴場、厨房、特殊な考案による數箇の竈、いづれも深山のウッドウンシアレとしては、過ぎる位のものであつた。貯藏室には十五俵の白米が絶えず補給せられ、木炭六千三百貫は、有峰と此處とに分割して置かれ、白砂糖五十貫、人夫用の「お粥」約一石、その他これに準じた食糧の備へ付けがある。殊に下座敷を見せて貰つた時に驚いたのは、數段の美しい棚の上に、幾種とも知れない大小の罐詰類が、列を正して犇々と詰め合つてゐたことである。大阪の小さな食糧品店などでは、到底あれに及ばない。堀田氏は五升樽の蓋を開けて、

「熊の粕漬です。明日は一つこれで燒肉を拵へて差し上げませうか。」

芳烈な快い香りが、うつとりする程濃やかに迫つた。

「やあ、珍品々々。……結構ですな。」

「西洋料理の材料も、一と通りは揃へて御座いまするから、何んなら御自由に、あれをお使ひ下さいまするやう。」

私達に當てがはれた階上の二室へ落付くと、堀田氏夫妻は、色んなものを盆に乘せて、そこへ運んで呉れた。

「怎うか御勝手に・・・。」

有る〳〵。「こいつは素敵だ。」怎う獨りで想つた。學藝部長の後醍院氏と私との室は、四疊の穩密な、溫いところで、一寸した間食物類は、すべてこゝの棚へ列べられたのであつた。酒類ではセリーもポルトも、ウヰスキーは勿論のこと、マラガ、リキュール、カナリー、マデイーラ、芳醇にして甘美な、それ等晶液の奥深い光澤が、優美な容器を透して、蠱惑的な麗はしさを見せるのであつた、その他雲丹、有峰産鷄卵、紅茶、コーヒ、厳粉なども運ばれた。

＊　＊　＊　＊　＊

もう夕方に間がないので、スキーに好いスロープのあるといふ所迄は行かずして、小舍前の鳥渡した所で、關西スキークラブの山口氏や、富山日報の松能氏などゝ、日が暮れる迄滑つて見た。

浴後、階下の別廣間では、人夫達が圍爐裏を圍んで、安着の祝ひに、例の「お粥」を五郎八茶碗で煽りながら、盛んに唄つたり踊つたりした。餘り面白さうなので、私達もその仲間入りをして、彼等が無邪氣に亢奮して騒いでゐるのに調子を合はせながら手を拍つて囃し立てた。私はその時立つて、越中踊りは知らないけれども、一番踊り上手な私の專屬三九郎と一緒に身振りを合はせたりした。ラフな、ワイルドな、いかにも山國的な氣分が面白かつた。

「先生はもうこの踊りを御存じがや。」

二十幾貫の福松なども、大きい圖體を崩して、手を打つて燥ぎ廻つた。大原節が出る、新川節が出る、富山節が出る・・・。

「がいな風ぢや吹きや、しやーまんなんちう、きやあちちやかん。わいらおら共、おりきりき・・・」

「こんちや毎度はや、お有りがたう。あんなに云はれちや又來られ、いくちや來るちや、てつこうな

つさんぢや・・。」

ほか〳〵暖い一室へ戻つてから、藤木氏、富田氏、堀田氏などゝ一緒に、ぢびり〳〵とやりつゝ話した。雲丹、鷄卵、味附海苔、鯛田麩、蒡漬などを肴に、極端な下戸の私も、いつの程にか、つい眞赤になつてゐた。戸外の深い雪、寒い風を他所に、こゝばかりは春のやうに長閑であつた。五十燭光のアセチリン燈は、このがつしりした室内を暖く照らしてゐた。人々の悦ばしさうな顔は、脂ぎつて、てら〳〵と輝いた。

「あゝ好い心地だ。何んとも云はれない。」

後醍院氏は幾度びか繰返した。全くその通りだつた。G氏の言葉は、いづれもの氣持を代表してゐるやうなものだつた。

二十九日の朝になつた。戸外では雪が絶え間なくしと〳〵と降り續いてゐた。

室内の溫度は殆ど十三四度を保ち續けた。

昨夜餘り防寒の用意をし過ぎた爲めに、床の中でぐつすり汗みづくになつた。全くそれは大袈裟過ぎた準備だつた。下敷には大蒲團一枚、その上へ一等素地の厚い毛布五枚、上掛けには、敷きから續く分が四枚、寢着には毛織のシャツの上から綿入とネルの重ね、外に小型毛布一枚を頭から上體へ詰めたのだから、この溫度では暑かつた譯だ。起きて見ると、頭がぐら〳〵と重く痛いやうで、寒冒でもなければ、變な氣持だ。一行いづれも同じことを云つてゐる。多分昨夜の「お粥」の祟りと、それに階下の人夫部屋で焚く火の煽りで、溫度が高く、空氣が乾燥し切つた爲めらしかつた。

けふは初めから、終日滯在といふ豫定だつたから、ゆつくり落ち付いた氣分で、臺所の大圍爐裏のあたりで暖まりながら、談したりしてゐた。

十一時前から、山口氏をコーチに、五六人でスキーに出掛けた。小さい澤を越した向ひの急斜面を少し登ると、全く想理的な好いスロープが眼前に展開した。幾うねりした、なだらかなプラトーは、うるはしく雪に飾られた樅の木立を繞らして、靜かに横はつてゐた。輕くて、聊かの粘着もしない清淨な粉雪が四尺餘り、古く堅い雪の上層に在つて、心持の好い滑走が利くのであつた。少しく急な部分でも、相當深さのあるヴァージンスノーのことであるから、丁度好い按配に雪がスキーに抵抗して來るので、爽快な雪烟を曳きつゝ滑れるのだつた。少しくシュプールを亂してからは、滑走の調子が愈良好になつて、私のやうなノヴイスでも、倒れることなく、幾度びか全斜面の直滑降が出來た。こゝの一部は、丁度田口の馬場位のところで、幅はあれより大分狹いけれども、地形に變化があり、背景に美麗な森林があるので、全く恰好の練習場だと云つて宜かつた。最も元氣な藤木氏などは、少しの休む間もなく、滑つて々々々滑り續けてゐた。その代り轉がることも亦中々華やかに熾んだつた。彼はスキーに出る時だけ、シベリヤから持つて歸つた派手なウオルミユッチエを被ることにしてゐた。短軀にして精悍な彼れが、さういふものを被つて、喬大なタンネンの下を縫つて滑つてゐるすがたは、何んとしても日本のシーンではなかつた。

人夫等が後から毛皮や、餡餅の澤山這入つた函などを擔いで來て、雪中に好い具合の休憩所を作つて呉れた。私達は堅く凍り着いた口髯を押し分け乍ら、その餡餅で腹を拵へて、二時半頃迄盛んに練習を續けたが、その間に一度、ほんとの纔かばかり、日がぱつと照つた丈けで、殆ど絶える間なく雪がちら〳〵した。と俄に風が積雪を捲き上げて、ぐるりの峰々が一時に吹雪で暗く塞がれたから、急いで歸つた。

堀田氏手製の熊や兎や鷄の西洋料理は、スキーの後腹に幾らでも喰べられた。この夜、窓の眞下に流れる澤の向ひ岸へ、人夫に大きいアセチリン燈を持たせてやつて、枯木の幹を半頃から挽かせたその

切口へ置かせて見た。降りしきる雪の中にしよんぼりと輝く燈火を、此方から眺めてゐると、何んとも いはれない趣の深い情景だ。

「大閤さんでも、これはやらなかつたらうな。」

「全く、お大名以上だ。」

「怎うだ、あすこで誰れかペーゼントを一つやらないか。」

「丁度好いステーシも出來てゐるし、バックは甲分なし。・・」

この日、人夫共は終日餅を搗いてゐた。出來たのを白蒸しにして、私達のところへ持つて來て呉れた。「もうお正月が近づいて來た。」といふ子供らしい樂しさがあつた。

三十日も亦雪降りであつた。しかしけふは連日にない寒さで、午前七時、階下の室内で三度、戸外檐下に於いて零下八度五分。檐端の氷柱は、昨夜よりもずつと大きく發達して、十尺以上に及んだ大きいのが、何本も膠着し合つて、重さうに垂れてゐた。

一行のうちに、身體の輕微な故障者が、きのふあたりから續出した。Y氏が眞先に腹痛をやつたのを手初めに、四五人はちよい風を引いて、鼻を詰まらせた。尨大なH氏も過勞の爲めか、意氣甚だ振はず、G氏も亦何にやら故障があつた。活動君も寒冒で、これは白樺の下座敷にずつと寢てゐた。

殘る五六人は、十時半頃から、又きのふのところへ滑りに行つた。雪の狀態は、無論けふも良好無比で、唯きのふよりは深くなつてゐる丈けに、ヴアージンスノーの滑走が充分でなかつたけれども、少しく踏んでからは、快い大グラウンドが出來た。山口氏の細密丁寧な指導によつて、めい〳〵の進歩は目に見えて著しかつた。殊にも若いスケーターである大石、長谷川兩氏の如きは、一回々々と滑

走毎に進歩の痕が際立つて行つた。

妙高山麓で、幾度か「俺丈は駄目だ。」と嘆息した言葉を、私は今日も亦繰返さねばならなかつた。

「君！　ジャーク、クリスチャニアの水際立つたやり方を一つ敎へて呉れ給へ。」

しかし私には、幾らしても水際立たない。徒らに雪烟が立つばかりだつた。

雪の時々小歇みする時、上ノ岳續きの高い尾根が、朦朧として半空に純白の暖い輝きを現はした。あすはその上ノ岳へ登らうといふ意氣込みだのに、夜に入つても寒い東風が雪を捲いて、頻りに吹き續けるのだつた。

到々大晦日になつた。迚も駄目だと思つて、ぐつすり寢込んでゐるところを、藤木氏に起こされて、眼を覺ますと六時過。窓外は相變らず暗憺として、雪は靜かにしと〳〵と降り續いてゐるのに、階下の大爐邊では、もう一行が結束して、飯を喰つてゐる。

「おや〳〵。」と思つた。

人々は、今にも晴れて來るやうな心構へらしく、しきりに「雪はまだ降つてるか？」とか、「まだ歇まないか？」とか云つて、いら〳〵してゐた。

「おい平藏君、見込は怎うだ？」

「けふは迚も駄目ですちや。」

そのうち段々時間は經つて行つて、夜がすつかり明け切つても、雪は猛烈に降りしきつて、中々何時迄待つたところで、小歇みさへする氣配もなかつた。昨夜六時五十分、室内十四度、今朝七時同所同溫度、七時五十分。戸外檐下で零下九度。

一體今度の旅行の目的は、この眞川の小舍にあつたので、上ノ岳などは初めから書き入れてなかつ

上ノ岳頂下より黒部川水源を望む(右より槍・蓮華・鷲羽・祖父の諸峯)　　榎谷徹藏氏撮影

たのだつた。併し萬一にも天候の都合がよくば、どこか一寸やつて見ても宜いとは、出立前の打合會で藤木氏など〻話してゐた位のことだから、登れなかつたかと云つて、さうひどく失望することはない筈だつた。それでも、ひよつとしてどれか一つに登れたら、それこそ望外の幸と云つて宜い譯であつた。

それがもうあす一日の天候によつて、どちらかに決るのであつた。

夜は年の暮の祝ひに、晝間人夫等が、鉈で首を落としたり、銃殺したりした幾羽かの鷄を料理して貰つて、大圍爐裏でぢり〳〵をやつた。ワイルドで、プリミティーヴで、賑やかな快い人夫達の唄が暫く續いて、いかにも大晦日らしい夜の感じが、名殘なく屋内に溢れた。

五、上ノ岳

「星ぢやありませんか。」

「いかにも、快晴です！」

ゆふべ寢がけに、窓から仰いで恁んなことを言つたが、きのふは終日大分ひどく吹雪いたから、ことによれば、久し振りにこのなり晴れるかも知れないといふ一縷の望みを抱き乍ら、快く深い眠りに入つて了つた。

何んのはづみか、ふと眼が覺めたので、何心なく窓外を覗く。硝子面には水蒸氣が羊齒の葉のやうな形に美しく結晶してゐた。それを透して望を少し過ぎた月が、山中の、しかも嚴寒の時期でなければ見られない、物凄い程鋭く冴えた光りを、あたりの深い雪の上へ投げかけてゐるのが映つてゐた。寒さは此處へ來てから初めてと思へる程、窓外の大氣が冷え切つてゐるらしい氣配を感じるのであつた。三十八人群棲のこの大屋内も、今は閑寂として靜まり返つてゐる。時に午前三時。

「もう元旦の朝だ。」といふコンヴェンショナルな快感を伴つたやうな氣分と、「この儘で夜が明けれや、上ノ岳は屹度成功する。」といふ樂しい豫期とで、年甲斐もなく變に亢奮して了つて、もうそれからは眠れない。そのうち長谷川氏のポッケットアラームが慌しく鳴つて、他の連中もがや〳〵やり出したので、到々本式に起きた。午前三時五十分、屋外零下二十三度。私達の室でさへ四時五分に於いて二度だ。檐端の氷柱は、太い水晶の飴がくつ着き合つたやうになつて、到々地上迄、何十本となく垂れ下つてゐた。

「この冬になつて、初めての寒さです。」堀田氏は恁う云つた。

一同の氣分は、もう登山といふことにのみ緊張し切つてゐた。藤木氏のプランによつて、けふの隊形が表に作られた。この形は各員終始絶對に遵守することを約し合つた。——先登、除雪人夫十名、司令廣田、本隊、榎谷、富田、松能、大石、山口、牧野、長谷川、藤木、行進ピッチ調節係榎谷、後衛、食糧班人夫二名、平藏、甚吉——（私は私の役目に必要だと思つて、大阪から持つて來た大型ルンデマリネプファイフェと、トルペドプファイフェとの二個共携帶した。）

出發午前六時。各自は小舍を出る時から、爪の短い、小型の越中輪樏をしつかりと着けた。（ミッチあたりのシュネーライフェンは、あの儘では足の返りが充分でないのと、爪が無い爲めに、柔かい雪の斜面にも、踏ん張りが今一つしつかりしないのとで私は紐の掛け方やら、形狀を少し考案したのを大阪から携帶したが、それを用いた。別にシュタイグアイゼンも用意した。）一と歩戸外へ出ると、先つき窓から覗いた感じとは又違つて、滿目の天地は、名狀しがたい嚴かな死の肅殺の底に堅く沈默してゐた。月の光は飽く迄も冴えに冴えて、溢れるやうな白金の光波が、濃やかに、しかも冷酷に降りかかつてゐた。それに空の色の黑さ！　凄愴そのものゝシムボルを想はせるやうな、瑩徹した漆黑の、無限の深さに、慄然とさせられる程だつた。しかもその奥からは、鋭く際やかな無數の星が、異樣な

瞬きをしてゐるのだつた。

凍結し盡くした萬象の、涯てしなきしゞまの裡にも、深雪の表面に幽かな吐息を漏らす大氣の、ひた〳〵と膚に迫る寒さは、いかにも身に沁み亘るやうに思はれた。しかし私は肉體の窮屈さを考へて、つとめて防寒衣を尠く用いた。準備の衣類は、すべて三九郎の背に托して・・。

私達は先登人夫の一隊と少しく間隔を置いて、ひたすら默々と續いた。雪の凹凸は月光で充分見分けがつくので、左程足元の危いことはなかつた。眞川の丸木橋を細心の注意によつて、靜に渡つてから少し行くと、俄に急阪が前途に當つて、先登のラッセルが利かなくなつた。やつと二三歩進んだかと思ふと、又しても行き詰りになるので、後のものは立ち停つて、前の者の進むのを、もどかしく待ち合はさねばならなかつた。「あゝいふ精鋭を選拔して先きに立てゝあるのに、この具合では、果して頂上迄登り着けるだらうか。」といふ不安が、頻りに頭を往來し出した。

一としきり登つた頃、一人の人夫はひよこ〳〵と隊列から落ちて、ぐたりとのめるやうに全身を雪の上へ靠せかけた。はあ〳〵云つて頻りに喘いでゐる。

「怎うした！」人夫司令廣田氏は特曹らしい口調できめつけた。

「むでんに苦しくて、駄目ですちや。」云ふなり、げろ〳〵とむさくるしいものを戻した。きのふ大晦日の上景氣で呑み過ぎたのと、睡眠不足とに祟られたらしい。

よし！　歸れちや。・・荷を後の者に賴んで。」

併し彼は歸らないといふ。少しすれば治るといつて訊かない。そのうち又一人、後方の人夫が同樣な狀態になつたといふ報告が來る。

それでも十五六分間するうち、先つきの一人は後からすた〳〵登つて來て、除雪隊に加はつた。

「大丈夫か？」

「へえ、もう大丈夫ですちや。」

私などの及びもつかない頑健さに驚いた。しかし彼れの勇ましいゼスチュアは嬉しかつた。「長い軍隊生活の賜だ。」と思つた。

深林の下闇が長く續いた。あたりはいつとなくおもむろに、仄々とうす明るみを加へて來たが、その極めて微弱な光度の具合で、暫く雪面のディティルが全然分からなかつた。登りは緩く又急に尾根のやうなところを、うねくり〳〵し乍ら登り續けた。數分置き位に交代で先登に立つ人夫が、胸に雪の突つかゝるやうなところを、雪烟を飛ばして、一歩毎に唯ならぬ奮闘をしてゐるさまが、カーヴを作るやうなところで、又しても見えた。

あたりは愈明るく、爽やかな元旦の曙といふ特殊な氣分が盈溢するのを覺えた。顧ると、眞川小舍の近くはもうずつと脚下の、深裂した峽底に見えなくなつて了ひ、小畑尾峠の白いグラートも眼の下になり、遠く大多和峠の大だるみさへ、薄弱な光線の裡に、それと見亘された。鉢伏山の、のつぺりと白い頂も、もう眼の高さになり、歩々に展望が擴大する快さを味つてゐるうち、巨大な樅の木立を透して、思ひも寄らず、遙天高く、燻んだ藤色のバックから、くつきりと浮き立つた、寶石のやうな一座の山岳が覗いた。そこばかり旭の最初の光を眞面に受けた滿身の雪は、極調のローズマッダーを閃かして、硬く緻密な嚴襞が、氣持よく縱横に蹙んだ。それはミレージの世界としか思はれない。尊く森嚴な、フルインテンシティーの限度に達した美はしいきほひ立ちであつた。

「やあ、白山が見え出した！」

人夫の叫び聲に、一行は征矢のやうな瞳を一齊にそれへ瀉いだが、やがて爆發するやうな歡呼の聲が、いづれもの口から放たれた。その一瞥以來人々は一方ならぬ亢奮を覺えたらしく、今迄緘默を守りつづけてゐたのが、俄に樣々なことを次々と口走るやうになつて、もう雪中登攀の苦しみなどは忘れ

果てたやうだつた。

白山は次第にその麗らゝかな全容を展開して、深い薔薇色の赫きが、強烈なオレンヂの光輝に變つて來た。するうち飛騨の山々が廣く〳〵伸び擴がつた。いづれも白雪に鎧はれた、皺褶の硬直な峯巒の力强い群がりであつた。夜が明けるに從つて、殘月の光は次第に弱く、刷いたやうな卷雲の光澤と同じ位になつて了つた。右手の空高く、目指す上ノ岳の雄爽豪邁なすがたが、凍り着いたやうな眞體を、あからさまに捧げ出した。それはあたりに山もなげな、思ひ切つて派手な峭り方であつた。巓邊から左へ曳いた崇高なグロッスグラートの背後から、憧れの朝日が、今にも覗きさうな氣配を示して來た。

白山の輝きは、いつか眼の痛むやうな純白に匂ひ立つたが、時々薄弱な卷層雲の翳しに、その光度を低めたりした。鉢伏はもう疾くに眼下へ虐げられ、その左倚りに、笠岳の磨き上げたやうな眞白の絶巓が立ち上つた。しかしそのあたり一帶の眼に餘る雪の群巒の上から、髣髴として深い藍靛を靜かに横たへたのは日本海であつた。

小畑尾峠や、その向方の低い有峰の盆地も、今は漸次に擴大の度を增加しつゝある大幟畫の、ほんの一少部分を占めるに過ぎなくなつて、視界の感興を唆る力が、段々に弱められるのであつた。

「やあ、ヒマラヤのやうだ！」

遽然として、劈けるやうな大聲がしたので、ぎよつとして左手を見ると、もうそろ〳〵喬木帶を拔けかゝらうとする疎らな唐檜の間から、いかにも「ヒマラヤだ。」と直觀させるやうな驚く可きシュネーヘルナーが、瑩徹した氷雪の肌を鋭く、痛々しい迄に筋立てゝ、曙の片光線をうす薔薇色に浴びてゐた。先つき白山の一嘱から受けた雪の耀きは、距離が遠い爲めに、嚴かな靜かさといふ感じであつたが、これは近く、眉高に迫つてゐる丈け、その煌々と燃え立つ光りの强さは、眼を射すやうに思へ

た。しかも克明に染め分けられた襞の緻密な暗部は、透明な紫水晶のやうな色に澄み切つてゐた。二千九十米突の鍬崎山でも、恁ういふ境遇に置かれると、夏の頃などでは、夢にも想ひ及ばない位、全然別ものゝやうであつた。

一行の意氣は愈揚がつて、樣々な稱讃の辭が連發された。

八時過ぎ、やつと喬木帶を離れた。

斜面は一時に緩漫になつて、なだらかな絶大の雪の原が行く手に伸び亘るのだつた。疎らに立つた唐檜の枝が、多くは片靡きになつて、そこに附着した雪の形態も、今迄には見られない不可思議なものとなつた。白狗の立つてゐるやうなのや、老爺が横を向いてゐるやうなのが、今將に上ノ岳續きの脊梁を離れようとする旭の分散光線によつて、朦らな明暗を作りながら、奇怪なシーンを展いた。しかもどれ一つとして、枝巧的な無理のないのが嬉しかつた。

間もなく、元旦の朝の最初の光線が、賑やかに射しかゝつて來た。暗く深いしゞまの裡にうまゐしてゐたあたりの物象は、齊しく悅びのかうべを揚げて、さゞめき立つた。誰れからともなく發たれた歡喜の叫びに合はせて、コーラスが起こつた。それはおほらかな寒空に響き亘る妙へな音波として、何處迄とも知れずそのヴァイブレーションが擴がつて行くのであつた。積雪六尺。眞川以來ずつと乾性の粉雪ばかりであつたが、喬木帶を離れる頃から、下層の厚い雪が、著しく硬く凍結してゐた。又少しく森林が續いて、それを拔けると、もう行く先きは、何んの障るものもない、限りむく連なつた廣い雪のスロープで、それが氣持よく天半に緩い隆起を作つてゐた。稀れ〳〵に唐檜の樹氷狀膠雪に閉ざゝれたのが、ぽつり〳〵と小さな頭を現はしてゐた。

鍬崎が次第に全容をのし上げて來ると、その右に早乙女、大日續きの、更に雄峻な白い連壁が駢列した。殊にも大日の胸部は、到底日本の山岳とも思へない程の見事な褶襞を刻み付けてゐた。と左倚

りの天漢高く々々、これは又豪快無比の、山肌の髓心も氷結し切つたやうな巨大な絶巓が躍出した。云ふ迄もなく藥師である。すると大日から鍬崎へかけての下腹部に、彌陀原の高原が、ずつと低く快い素直な斜面を廓然と伸展した。

恁ういふ、冬期には稀有な、榮光に充ちた天界の聖い絶大觀に接し得た私達が、その上更に聊かでも、あたりの峯々にモルゲンロートの華やぎを豫期するなどは元より望み得べからざることであつた。卷雲、卷層雲の羅のやうな薄膜が、ともすれば天日のさやかな光りを、ほの和げるのであつた。大うねりにうねりを描いた雪の大斜面は、どこ迄も々々々々次から次へと前途に現はれて來た。上ノ岳の頂から、今私達の辿つてゐる雪のスロープ迄、幾うねりはあり乍らも、つまりは驚く可き巨大な一と續きの雪の原の感じであつた。唐檜を包裹する氷雪の形が、地盤の高くなるにつれて、溫度と風力との關係で、段々その結晶の狀態を變へて來た。先つき迄は、ぼり〳〵の硬い々々輪廓を樣々に、自由に描いてゐたのが、いつか水平なりのハッチングを無數に入れた、磨き立てたやうなものばかりになつた。

藥師のグロッスギプフェルは、此方のスロープのうねり具合で、隱れたり又現はれたりしたが、そのうち、左肩の大斜線の向方から、非凡なシュピッチェが一つ、によつきりと擡がつた。白く玲瓏と輝き亘つた、尖鋭にして堅緻なその容姿は、流石冬の劍岳の裝ひだと思はせた。

やつと氷雪の大高原を泳ぐやうに登り登つて、ザッテルへ達したのが九時五十五分。藥師から太郎、上ノ岳へと、おのづから緩漫に連續した幅廣い大尾根は、ひたすら白く滑らかなシュネーメールであつた。そこには偃松の密叢もなく、岩骨の崛起もなく、氣儘に疾走する天飈によつて、間斷なく吹き撫でられ、塗り淨められた雪と氷との無限の連りであつた。さうしてあちらこちらに風で築かれた氷雪の波浪が、幾つも列を作つてくねつてゐるのを見た。

このあたりは廣い〳〵平らで、高寒と風壓と日射とによつて、激烈に薫陶された雪は、下層がすつから氷り着いてゐて、上層の極めて輕い一二尺ばかりの粉雪が、いつも風の爲めに移動してゐるやうな狀態であるから、もう輪樏の踏み込むやうなことがなくなつた。

ザッテルに達しる少し前、氷雪の原のスロープを右絡みに大廻りする時、はつと東の空に、黑岳の崔嵬がそゝり立つた。續いて赤岳、割物、鷲羽その前に祖父、雲ノ平が、殆ど息もつかずに躍り出した。瑩然と氷結した連壁の聖い姿、それへ丁度右手から日光が際やかに射したので、精巧に刻まれた鋭い無數の襞には、强烈に過ぎる程鮮麗な明暗が浮き立つたのであつた。一行の歡喜は既に狂熱に近く惹き付けられてゐた。

上ノ岳の小舍は、南方の空高く、頂下に小さく仰がれた。これは先つき森林の中に居た頃から、高大なスカイラインの上に、ぽつちりと見えてゐたものであつた。上ノ岳の登りも、緩漫な大雪原の感じであつた。その絶大な原の面を見上げると、雪の色が部分々々で樣々な變化を表はしてゐて、今迄には無かつたウキンドブレットが、マルモルクルステらしいうす鼠色の大きい斑が、至るところに交つてゐた。

藥師の方から此方へ曳いた尾根筋には、「あぶき」――雪庇、信州北安地方山語――の長い〳〵スネーキーカーヴが走つてゐて、それがこれからまだ〳〵漸次に發達しようとする勢を示してゐるのが異樣な美觀を呈した。ヨッホから上ノ岳の登りへと、一と息の休むこともなく、私達は歩みを續けた。雪の原には唐檜の極めて稀疎な梢が、先刻よりは更に一層奇異な氷雪のホリゾンタルハッチングを描いた。しかもそれ等は枝や葉の生地が全然現はれない迄に、どつさり氷狀の緻密な雪に包まれて、アイヴォリーのやうに光つてゐた。

頂邊近くになると、下から鼠色に見えてゐた凍雪が多くなつて、輪樏の齒が立たない位に、堅くが

り〳〵で、浮石のやうな多孔質になつてゐた。さうしてその面には、小さな無數の縮緬皺が寄つてゐた。しかも全く水分が無いから、齒が當る毎に、破片が粉碎して、ぱっ〳〵と灰のやうな雪烟を立てた。ピッケルで檢べて見ると、矢張りウヰンドブレットであるが、ところ〳〵マルモルクルステを形成してゐる部分もあつた。しかしこの兩者は、私のやうなアマチユアでは精密に鑑別することが難かしかつた。登るに從つて、ヨッホ附近の西倚りに能く發達してゐたシュカヴラが、段々なくなつて來た。

やつと小舍に着いたのは十一時。日光はきつかりと刺すやうに濺ぎかゝつて、不思議な形に氷結した小舍のすがたを、現し世には見られない程鮮やかな返えた明暗の中に浮き立たせた。雪の陰影部には纖塵一つ漾はない清淨な大虛が反映して、純粹のアントラープブリューが、厭く迄も返え〳〵とそこに染め出された。こゝは風當りの烈しいところで、雪は大概吹き拂はれて了ふから、小舍の入口なども、半分以上は露出してゐた。それに屋根から側面から、檐下の控柱から、すべて殘るところなく石膏泥で細かしく塗りつぶしたやうに雪が凍結して堅く附着してゐた。その附着の仕方が、下方の唐檜と同じことで、てら〳〵に磨き上げた不規則な表面へ、無數のホリゾンタルハッチングを入れてゐるから面白い。殊に垂直な部分はその北方に面した各稜が、上から下迄、眞横の極めて鋭いヂッグザッグを連ねてゐるから、頗る奇觀である。午前十一時十五分、戸外日蔭に於いて零下十二度。

入口は南北とも堅く氷結して開かないので、人梯を作つて、南方の切妻の眞下にある小窓から、人夫清一を這ひ込ませて、ピッケルで內と外とから無理やりに開いた。小舍は三間半に二間半の、やはり伊藤氏が建設された丈けあつて、頑丈無比の建物であつた。設備も宜し、備品も相當あつて、恁ういふところで泊つて見たら、どんなに面白からうと思はれた。一行がその中で焚火をしたり、バケツに雪を入れて溶かしたり、食事をしたりしてゐる間に、私は戸外の切るやうな勁風に曝らされ乍ら、三

九郎を傍に着けて、スタンドを立てた。雪の中では、晩春でさへ、どうかすると三脚が深く沈んで困ることがあるから、尖端近くに穿かせる爲めの雪輪を三個用意して來たのであつたが、こゝではそれを使用する必要が更になかつた。唯シングルの際に、リュックサックを錘に吊るしても、蛇腹が風で震動するのには少々手古摺つた。

小舍の傍から尙少し登ると、もう直ぐ絶巓であつた。そこからの展望は全く比類を絶したものであつた。夏の頃とはすつかり違つた趣を呈はしてゐることは云ふ迄もないが、有らゆる自然現象の境遇が、極端に相違してゐる爲めに、目路の及ぶ限り犇々と居並ぶ雪峯の荒濤は、うゐ見參のやうな新しい刺戟を力强くも與へるのであつた。蓮華南峯の上から覗く槍と、双六、黑部五郎の兩袖が喰ひ違つた上からヘルナーを擡げる穗高とは、豫想通りに雪が尠く、慘ましいやうな岩骨の生地が玄くむき出しに曝されて、七三のアゲンストライトに、透明なアメヂスト色を染めてゐた。

西南から西北への展望も亦極めて廣闊であつた。白く雪の被ひかゝつた富山平原一帶の地形から、能登半島の全景、深い日本海の紫藍、視界の及ぶところ幾百里とも幾千里とも知れない位に思へた。私は暫くうつとりと、この珍しくも惠まれた天界の尊い賜に對して立ち盡くした。――夏期に於ける頂上展望の形容は、山岳第七年第二號「越中アルプス縱斷記」(下)で、三枝、中村兩氏の記述に詳しい。――

小舍に這入つて皆より遲く暖い食事を初めたが、誰れもは爐邊で休憩しながら快く暖を採つて居た。小舍の中は、宛然春のやうな氣持だつた。窓から射し込む明るい々々日の光り、焚火に溫められた柔かな空氣、戸外の凛烈としたアトモスフィアとは全くかけ離れて劃られた小世界が、こゝに現出してゐるのだつた。出立零時三十分。烈しい日射の下でスキーをやるもの、撮影をやるもの、モデルになるもの、天界の珍しい雪の原は、暫く私達の自由な悅樂の園であつた。併し午後になると、南

方からの恐ろしく寒冷な颪風が、雪の上を疾走し出して、向方の尾根、そこの嶺からは、烟のやうな吹雪が立ち昇り又横靡きした。先きに行く人の足跡も、灰を瀉ぐやうな粉雪が横に滑つて、瞬くうちに消えて行つた。風を受ける側の半身には少しも雪が附着せずして、その反對側ばかりに幾らでも粉雪が蓄つた。風は刻々に猛威を逞うする形勢を示し、つい眼近かに派出された尾根から不意に一陣の大吹雪が起こつたかと思ふと、茫逸混沌と雲霧のやうに亂れて、一行を掩襲する氣配に見えた。

「あれ〳〵大變な吹雪だ。」

「あの向方からも亦來るぜ。」

私達はひたすらに急いだ。しかし日光の直射が強いのと、からだを絶えず動かしてゐるのとで、寒いといふやうな感覺は少しもなかつた。烈風の中にあつても、藤木、山口、牧野氏などは熾んにスキーをやつた。中でも山口氏の滑走は見るさへ壯絶に思へた。廣漠とした氷雪の大スロープに、一團の雪烟を曳いてスラロームを描きつゝ、一列縱隊に下降して行く人々の間を巧みに縫ふてからは、見る目も心地よい直滑降に移つた。ギプフェル附近からザッテル、更に下方の幅廣いグラートへと、全長實に四キロ近くにも及ぶ大斜面を、何んの危なげもなく、左なりになだらかな絶大のボーゲンを劃して行く。後から見下ろしてゐると、彼れの姿は段々と小さくなつて、尺から寸、分、遂に黑一點の微影となり、動いてゐるのか停まつてゐるのか、分らない。

「もうあんな所へ行つて了つた。」

「うまいもんだなあ。」

藤木氏は大分右倚りにコースを執つたが、そこは雪質が段だらなりに樣々の變化を呈してゐるところであつた。淺い粉雪層からマルモルクルステ、深い粉雪、ウキンドブレット、次々と滑走狀態が激變するので、流石元氣の强い彼も、幾度となく破裂するやうに、猛烈な轉倒を繰返してゐた。そして

ザッテルに達しる餘程以前からスキーを脱いだ。牧野氏も陸軍中尉らしい嚴かな姿勢で暫くやつてゐたが、雪に隱れた唐檜の枝に、慘らしく突つ掛けてからは、脱いで了つた。それにしてもこのあたり一帶の大斜面は、寔に申分のない、種々のコンディションが良好な、比類の稀れな滑走場ではあるが、唯高度が高くして、色々な不便が伴ふことを惜しまれるのであつた。

風は愈烈しく、積雪の舞ひ立つことは益激甚だ、さしもの日光も、層卷雲の瀰漫に掩はれて朦ろに褪れ、天半、それのさゝやかな隙間からは、卷積雲が積卷雲へと連つてゐるのを心淋しく仰いだ。

ひたすら下りに下つて、三時、眞川の小舍へ歸る。けふの意外な成功に、緊張し切つた人々は、期せずして小舍前で、高らかに萬歳を連呼した。しめ〳〵した悲しい程の嬉しさの念が込み上げるのであつた。

夕に近く、空は復霽れて、窓から仰ぐ上ノ岳の頂邊一帶、うらゝかなアーベントロートに閃き亘つた。午後六時二十二分、室内十四度。

六、歸り途

その夜から又復雪降り、二日の朝になつても、濃密な雪が降りしきつた。午前五時三十分、戸外零下四度五分、午前六時、室内十一度。

豫定は午前六時半出立、土迄一氣に飛ばすといふのであつたが、これでは月明りを利用して早發することが出來ないから、夜の明けるのを待つて、七時、愈眞川の小舍と別れることになつた。數日の間親しんだ留守番の人々は、入口迄送つて出て來た。老婆達は、いかにもこれから續く佗しい冬籠りが、我々の立つた後で、そこに取り殘されるを想ふやうに、又は彼等の故郷へ、我々がこれから行かうとするのを、何等か一種の哀愁を以つて送るやうに、物悲しげな、祈るやうな態度をした。そのす

かたは、我々が小畑尾峠の急阪に差しかゝつて、振り返つた時も尙、濃やかな降雪の底に、朦々と透かし視られた。

一昨日迄の降雪、それから又昨夜來降り積んだ雪の爲めに、峠みちは來た時とすつかり模樣が變つてゐた。割合重い粉雪に深く埋もれた急峻な登り阪を、留守番の平作老爺が先きに立つて排雪して呉れた、全身をも埋める程な雪を、兩手と長い杖とで、一生懸命に拂ひのけては、掻き登つて行く有樣が、氣の毒な程に仰ぎ見られた。

ほんの八町そこ〳〵のところを一時間許りかゝつてやつと頂に達した。雪の小降りした間からきのふ登つた上ノ岳の肩部あたりから下が、柔かい調子を見せて、嚴かに壁立してゐるのが望まれた。勝野君は數日來の寒冒がやつと治ほつて、けふは一行に加はつてやつて來たのだが、そのあたりに三脚を立てさせて、一行が成功の歡びのすがたをぎり〳〵と撮つた、雪は又しきりに降りかゝつて、ゆるやかな長い〳〵下り阪は、ひたすら暗鬱な降雪の中に續いた。前途は幾ら行つても〳〵同じやうな朦ろな雪闇の底に消え込んで、目指す有峰の盆地が、更に現はれさうもなかつた。山毛欅や樅や白樺などの巨きい木立の間を縫ひつゝ歩々に深雪を踏んで下りに下つた。やつとのことで懷しい、寂しい有峰の平が、ぼんやりと幻影のやうに、脚の下に映り出した。

十一時、長い尾根先きの下りが終つて、盆地にかゝることゝなつた。細い東谷の流れ、それを挾んで疎らに立つ白樺、楊柳の冬枯れた幹や枝に、柔らかな雪がふつくり積みかゝつて、いかにも寥しく佗しげな有峰の情緒にふさはしい眺めであつた。亂石を飛び〳〵に小流れを横斷するところでは、輪樏を脱ぐのが面倒だから、人夫達も我々一行も、その儘で進んだ。丸木橋を渡るのも矢張りその儘であつた。何んしろあの二本の大きい爪が邪間になるので、足元が中々危く、隨分手間が取れた。

東谷の疎らな廢屋の間を縫つて、西谷との境目近くにある藥師堂迄來たのが十時二十五分。この間

の時とはすつかり違つて、雪が深く屋根を蔽ひ、堂の半ばあたり迄も埋めてゐた。西谷の危い丸木橋を輪樏の儘、無恰好な姿勢で渡つてゐるところを、又ぎり〳〵とやられた。正午岩段の家へ着。食後又出かける。この容子では、どうせ大多和泊りにせなければならないが、それにしても日の暮れることは覺悟せねばならなかつた。

雪はいつ歇むとも知れず、絶え間なく濃密に降りしきつた。落莫とした高原を横ぎり、雜木の深い森林中をわびしく登つて行つた。大多和峠の頂迄一里半の登りに三時間もかゝつた。いつ迄も〳〵同じ調子に、夕闇のやうな森林の下を、一歩々々と高脚を踏み乍ら、一行はひたすら沈默の儘で進んだ。

頂では雪が胸を沒する程深かつた。交代で先登に立つて除雪する人夫の苦痛は、上ノ岳の登り程でないにしても、あの時よりはずつと荷が重いから、さぞと思はれた。地藏堂はもうすつかり雪に埋め盡されて、ほんの纔かばかり妻の上部が、ちよつぴり見えてゐるに過ぎなかつた。

下りのみちも中々埒が明かなかつた。五時過ぎになつて、あたりが次第に暗く黄昏れて來ると、雪を踏む足元は愈覺束ないものになつた。淋しい深林はいつ迄とも知れず、ひた續きに續いた。そのうち、いつとなくとつぷり暮れ果てゝ、もう足元さへすつかり分らなくなつて了つた。

勝野君が眞川から持たして來たアセチリン燈を先登の人夫に照らさせ、藤木氏がラテルネを翳し、山口氏が懷中電燈を後尾から閃かして、やつと行進を續けることが出來た。深い闇中の、しかも降雪最中に、二十人餘りの一隊がたど〳〵しく歩んで行く光景は、何んだか悲壯を帶びてゐた。遠く先登の掲げるアセチリンの光が、あたりの雪に青凄い反射を見せながら、おもむろに動いて行く感じも、まことに奇異なものであつた。

晝と違つて、みちは中々捗らなかつた。幾ら行つても〳〵〳〵果てしがないやうな氣がした。いつも「なぜ」の出さうな、危い「へつり」に似た箇所も、充分の警戒をせねばならないと思つてゐながら

ら、闇のことだから、つい迂つかり通つて了つた。考へるとあれは多少冒險の氣味であつた。併しあすこは、よし何にか出たところで、今夜ならば小さいシュネーグライトに過ぎないのだから、惡〻行つても數間程押されるか、半身を埋められる位のもので、さうたいしたことはない筈だつた。

大多和の古田家へ着いたのは八時。汗と雪とで濡れ盡くした衣類を乾かすので、大混雜をした。上り框前の可なり廣い庭へどつさり炭火を起こし、天井裏へ低い縱横に張つた紐へは、衣類が雜然と掛け連ねられた。例の「お春さん」も、さういふ仕事をまめ〳〵しく手傳つた。

人夫のうち四人は、小用を利く爲めに我々と同じ家に泊めて、殘りは近所へ賴んで分宿させた。一同の寢靜まつたのが、やつと十二時半であつた。午後十一時、屋内十七度。十一時三十分、屋外零下三度。

* * * * *

一月三日は早發の豫定が、誰れもきのうの疲れで、ぐつすり寢込んでしまつた、私などは起きたのが七時二十分。きのふに打つて變つた快晴で、澄みに澄んだ群青色の空からは、快く爽やかな日の光が、きつかり濺ぎかゝつて、プラトー狀の村一帶を、厚く蔽ひつくした雪の面には、透明な藤紫色の影が氣持よく走つた。午前七時二十分、屋内四度。

立つたのは九時半。脚下に深く裂けた跡津川の溪間は、來た時とすつかり趣を改めて、今は一面の厚雪に、爽快な透徹した美はしい情景を展いてゐた。片畦道のうねり〳〵して次第に上つて行くあたりは、眞面に日光を受けて、白殺された大きい急なスロープに、蛇のやうな曲線を截り込んだ道が、いかにも面白かつた。所々小さい「あわ」の押した跡が、みちの上へ亂雜に堆高く盛り上がつてゐたり、「はみ」らしい下地へ眞白く雪の被ぶさつた高大な急斜面に、幾つも〻〻〻シュネーベーレの轉がつてゐる所などがあつた。

十時半、佐古の宮で少憩。土へ出たのが十二時半。もうこの邊では、雪も重く濕つて、一尺五寸位に過ぎなくなつてゐた。こゝから片掛迄三里の間、大型の馬橇を雇つて、荷物の間へG氏と私とが試みに乘つて見た。積雪が丁度橇に好い狀態になつてゐて、少しのショックもなく、危なげなところもなく、快く滑走した。大町から築場へ通ふ橇のやうな不安もなく、あれのやうに頭がふら〳〵することもなかつた。

高原川沿岸の雪の眺めを、二人は心行く限り眺め賞することも出來た。朝、快晴とはいひながら聊か白い羽毛のやうな卷雲の浮んでゐた空が、愈晴れ亘つて來て、滿天一と片の雲の漾ひさへも認められなくなつた。ひた〳〵と冷い谿風が、雪面を辷つて流れて來た。茂住の近くにある諏訪瀑も夏と違つて、樹木がすつかり冬枯れしてゐるので、その華やかに水烟を散らして落下してゐる全容が雪の中から勇ましく見えてゐた。千貫橋を渡つてからは、數日前トロで通つた崖上の高いみちが、絶えず此方側から見上げられた。あの夕、向ふから來る十八臺の鑛物を滿載したトロと出合つて、非常に手間取れた所なども、水面上二三百尺の直立した斷崖の上に、恐ろしい程高く仰ぐことが出來た。五時片掛着。徒歩で續けた人達は、大分遲れてから着いた。午後五時二十分屋内五度。午後六時屋外二度。

次第に山から町へ近づいて來た感じが深い。

* * * * *

四日は朝から寒く曇つて、陰慘な谷風が慌しく雪の上を疾走した。七時四十五分出立。三里のみちを徒歩で笹津に向つた。庵谷峠の途は、積雪の一旦緩んだのが夜來の寒氣ですつかり凍り切つて、歩くところなどは、ナーゲルも利かない位完全な氷になつてゐる部分が多く、つる〳〵滑つて、ほとほと困り果てた程だつた。峠の頂では、踏み固められた部分の、しつかりクルステに掩はれた締つた雪が三尺以上あつた

尚途の兩山は次第に低く開けて、庵谷から楡原、笹津迄來ると、もう雪が著しく濕つてゐた。驛前などでは、ぢやぶ〳〵の泥雪であつた。荷物をすつかり整理して、十一時二十二分の汽車に乘る。

富山から澤山の出迎者がやつて來て、狹い二等室内は、一行やそれ等の人達で身動きもならない程ぎつしり詰つた、成功祝ひだとおだてられて、巨大な折詰が幾つか開かれた。「立山」としか銘酒が酌み交はされた。私達のやつて來たことは、別に何んでもない平凡なものだけれども、さうした人々の熱い眞情に包まれて、何んだか泣き度い程の歡喜の心に囚へられた。

堀川新で、人夫全部は解放となつた。彼等はけふ芦峅迄歸るのである。一行が出發の際、微集に應じた爲めに、折角の結婚豫定が延期になつたといふ若い重藏は、今晩食式を擧げるのださうで、散々冷やかされて、頻りにあがつてゐた。

富山着午後一時少し前。此處で又澤山の出迎へを受けて、千代館へ落付き、そこで一行は解散の挨拶を交はした。立つた時と同じ座敷で、大部分同じ人々の歡待を受けてゐた爲ら、氣分には著しい違ひがあつた。

雨は佗しく雪の上に降り續いた。

――一九二四、三、七――

雜錄

○長白山(Changpaishan)に就いて

内地の山といふ山は殆ど踏破し盡され、今や高嶽巨嶂の仲間で記錄を有しないものはないともいへる程で、却つて二三流の山岳が屢登山されながら其記事を見ないものが多からう。眞に人跡未到といふべき幽境は北海道の谷奥か、臺灣の蕃地深くへでも出掛けないと求め難くなつて困つて居る探險家が少くないやうである。前人未到の絶頂でないと登山甲斐がないやうに信じて居る人達は、日本の狹いのが殘念であらうと誠に同情に堪えぬ。海外の山では歐洲アルプス……を想ふと共に辻村氏が今次の大震に遭ふて逝去されたことは眞に痛恨の至りである……印度のヒマラヤなどは近時漸く日本人の手に成る記事も豐富になつて來たことは慶ばしいことであるが、隣接の鮮滿山岳に關する登山記は餘り多くを見かけぬやうにも思はれる。其内で朝鮮の白頭山は近年登山者も增加し、山岳誌上にも城氏や杉本氏の紀行が見えて居る。日本人が未だ足を踏み入れなかつたと思ふ明治十九年頃に、青年英國人がわざ〳〵印度から飛び出して來て山頂を究めたことがある。この青年は印度生れの英國官史であつた、ヤングハスバンド C. F. Younghusbud)氏である。後に盛に中央アジアを跋渉して、中央アジア探險記や滿藏旅行記などを書いて居る。其内から一八八六年の夏に長白山を間島方面から登つた時のことを少し引き出して見やう。其時同行したといふよりも發案者であつた駐印遞信總長のシェームス氏(H. E. M. James)にも長白山(The Long White Mountain.)と題する著書があるとのことであるが、自分は未だ一讀の機會を得ない。更に古くは一七〇九年(寶永六年)にジエスキット教徒の一人が山中一帶を跋渉して可なり精確な地圖を造り上げて居るといふが、どんな地圖であるか勿論自分は見たこともない。

長白山は滿鮮國境に位置し、古來支那文學の題材となる機會も少く、從つて世人の注意を惹くこともなかつたが、清朝發祥に關聯して怪奇な傳說を藏して神祕の雲に裹まれて來た、無邊際の大森林に圍まれて、高さは天を摩し、山頂には深さも知れぬ物凄い仙湖を祕めて、松花江や鴨綠江の二大河も其懷深く孕まれて流れ出る程で山中頗る幽遠、絕えて人の登ることもないと昔から信ぜられて居たらしい。名からして長白山とか白頭山などといふから、山頂は恒に萬古の雪を戴き、山容秀麗な靈峰であるものと、少くも英國人抔には傳へられて居たと見える。彼等が恒白山 (Ever-White Mountain) と呼んで居るのは、本來さういふ意味のある山名もあるのか、または長へに白い山と解したのか、それとも長と常とを訛傳した爲めか判然しないが、恒白の名に憧れて、ヤング氏一行が登山するまでは、英人などは一種神秘的の聯想を結びつけて特別の興味を感じて居たらしい、それに加へて氏は先輩の誇りをも抱いて遠方の印度から出掛けて來たのであらう。

一八八六年、當時漸く丁年を超えたばかりのヤング氏は偶然のことでジェ氏と相識る機會を得て其勸誘に應じ、長白山登りに同行することに決し、三月末にケアルカッタを發して五月初に牛莊に着し、こゝでまた支那語に通じ民情に馴れた一人の領事館員を加へたので、初めて支那內地に入つた兩氏は非常な便宜を得た。一行三人は奉天に着し、食糧の購入や人夫の雇入れに一週間を費し、五月廿九日に奉天を立ち東方鴨綠江を指して途に上つた。

奉天市街を離れて一帶の丘陵地に入り、樫や楡の林を見ては到底印度で見られない英國風の樹があると嬉しがり、谷間の茅簷を繞る流の美しさ、野面に咲き滿ちた百合やイテフシノブ、アネモネ、菫など何れも故國に見慣れた草花の種類多く、野山の景色が見る眼に美しくとも、其處を旅するとなると、折から雨季に當り連日の雨で唯さへ不完全な道路は全く泥濘の海と化し、夜は宿屋とか農家に泊ることを得ても晝は濡れ通し、驢馬は進まず苦力は呑氣といふので行程は更に捗らない。每

朝四時半から五時に起き、夕方は六七時頃までも努力を續けるので、血氣のヤング氏も疲勞の餘り倒木に腰をかけ枝に倚りかゝつたまゝ、頭上に滴り落つる雨をも構はず睡つて仕舞つたことも一再でなかつたといふ。殊に牛乳とバタのないのには隨分困つたらしい。支那人は鼠や犬や鳥の巢をさへ食ふ僻に牛乳を飲むのを嫌ふからバタを得られやう筈もないのを夫を用意しなかつた大失敗を悔いて居る。降り續く雨に河水の澎漲するは當然で、水源から五六哩の下流では最早徒渉も出來ぬ。危險な原始的の獨木舟で渡るか、さもなくば大井川の川止同樣で水の減るまで幾日でも安閑と待たねばならぬ。一行も二三度此川止めを喰つて、其間は幸ひ農民生活の有りのまゝを充分觀察する機會ともなつたから無駄でもなかつたと負惜をいふて居る。

斯くて漸く鴨綠江岸に達した。併し奉天を發してから幾日目に河岸の何處へ着いたのか判然せぬが、そこでは河幅三百碼位、深さ十尺乃至十五尺に達する汪洋たる大江で、兩岸は汀まで悉々たる森林が蔽ひかゝり、其間に平坦な處があると掌大の耕地を控へた多少の農家もあり、樹木のない處は一面に草が茂り、花莖六吋を超ゆる見事な鬼百合の叢落せるものや、紫燕を擬す芋瑰草などの無數の花に飾られて居る。一行が碌々道もない河岸の密林中を掻き分けながら苦勞して居ると、上流から一連の筏が大江の水に駕して音もなく靜に滑り下りつゝ、藪潜りの迂を惜み舟行の便を敎ゆるやうにも見えた。奉天から二百八十哩といふ帽兒山驛に着いた時には、こゝで食料品などを補充し得るものと豫期して來たので全く裏切られて、事實は幾に鹽漬の豚肉少許と腐りかけた鷄卵とを得たに過ぎなかつた。既に二三日來極度の節食を續けて來た後であつたから餘程落膽したらしい。此處から鴨綠江と別れ、西間島の山地を横斷して進み出した。一帶に重疊せる支脈と溪谷とはすべて空さへ遥かせぬ密林に埋められて居る中を、數日の間日毎に尾根の乘り越しを繰りかへすのみで、元より路といふ程のものはない筈であるが、奉天から伴れて來た案内の支那人は山中の地理に通じ

た者らしく、六尺先も見透せない下生への数を掻き分けたり、流に荒れた岩の峡を無理やりに驢馬を驅つて曳くやら推すやら、果ては人馬共に疲れ切つて辛くも尾根の背に登り着いて見ると、矢張り犇々と立ち罩めた樹立の底で先の樣子は皆目知れぬ、剩へ蟆子の襲撃頗る猛烈で、殺面は片時も除けられぬのは勿論のこと、手先も手袋をはづせば衣襞に突込んで置かねばならぬ。汗に汚れた體を拭はうとでもする時は殆ど地獄の責苦に遭ふやうなもので、奮迅の勢で拭き終ると共に素迅く襯衣を被ても猶は無数に刺される。その上夜に入ると蚊の黒雲が湧いて來る。一度平手で一敲きすると忽ち十疋以上も潰されるといふのだから堪らない。人間は防衛策をも講ずるが惨めなのは驢馬で、獰猛な馬蠅に螫され通しで、全身を血に染めて狂ひ廻つて居る。

麁鹿狩りの獵師とか人參採りが數人一組となり、宿泊用に建てた小屋が山中十四五哩位毎に在るので、一行は勿論夜は其厄介となつた。元來數人が泊る爲めの破れ小屋へ一時に多人數が割り込むのであるから、窮屈を通り越して丁度壓搾機の中へ入つたやうな工合である。それでも森林中に露臥して濕氣に曝され蚊軍に責められては到底やりきれぬから、餘り清潔でもない支那苦力と頭手を交へて推し合ひながら毎夜を明かしたといふ。狹い小屋の中でも蚊遣りの焚火は闕かされぬから、夏の夜の蒸暑さと空氣の息苦しさとは蓋し想像以上で無論碌々睡られもせぬ。連日の疲勞に加へて夜は睡眠不足の爲め、一行の神經は尖り、五體は懶いのを努めて森林中を突破し、長白山から發する松花江の一支流に達した。途中の地名と道筋が判然しないが、帽兒山から鴨綠江の本流に別れて二道溝を溯つたのではないかと想像されるが、松花江の支流は何れを指すのか不明である。とにかくこの支流に沿ふて溯り始めた二日目には驢馬を通さぬ沮洳地に會し、此處に驢馬と共に荷物の一部を殘して、必要品だけを一行各自が背負ひ、食糧を苦力の一人に負はせて行を進めた。すると間もなく溪谷一面に亙る草澤となり、往々膝頭までも踏み込んでなほ足溜りを得ないやうな處を

重荷を肩にして、一日十五哩から二十哩の强行を續け、而かも森林に入つてから食糧の不足で行糧半減の情態であつたから、疲憊と饑餓との苦痛は全く旅行中の最難業であつたといふ。小麥粉などは容易に得られない。主として黍の粥を啜つて居たが夫さへも疲れに次ぐ空腹を充すに足らないで、ヤング氏は獵師小屋で空き鍋の底に殘つた雫を掻き集めて貪るに至つたこともあり、又た曾ては一行三人が搾せた一羽の雉を圍んで一片の肉塊と味もない煮汁少許で食事を終へたこともあつた。饑と疲とに苦みながらも、一歩毎に目指す山に近かづくことが不撓の元氣を皷吹して、驢馬を駐めてから四日目には終に森林帶を脱し、主峰白頭山の麓に達することが出來た。今まで幾日となく涯もなく續いた陰慘極る密林の底を空腹を抱へて潛行した後に、漸く開豁地に這ひ出したと思ふと、眼前近く居然として高く半宵に聳えた峰頭を仰望した瞬間に於ける一行の狂喜と感動とが如何なるものであつたかは、吾人由黨にして初めて理解し同情し得るものであるが、惜しいかな内地の山登りでは斯うした歡喜と滿足と回想とを適度に調味した快絶な衝動に接する機會がない。鰡留から一斗の汗を流して初めて德本峠の上に立ち、穗高の崔嵬を迎へた位では未だ物足りない。自分はかういふ記事を讀むと、毎に大陸なる哉の嘆を禁じ得ないのである。近年頻りに拓かれる林道が一間延れば伸る程、吾人にのみ惠まれた此歡喜の一部を失ふものではあるまいか。

一行は歡喜と共に又た幾分の失望をも免れなかつた。それは豫ねて想像を逞ふして來た神秘的の山が實は餘りに現實味に富んで居た爲めであつた。永恒の雲晃白光を射る筈の恒白山ではなくして、高距僅に八千呎前後、白いといへば噴出した輕石の爲めに斑白といへる程度のもので、彼等が欲したやうに思はず息をも止めて立ち竦むといふ崇高な感に撲たれることは出來なかつた。けれども密林で眞黑い周圍の群峰を抽いてすつくと峙つ空線鮮やかな山容は、英國などにあれば正に滿點を與へらるべきものであると、ヤング氏は褒めて居る。艶やかな豐草と絹刷毛のやうな羊齒とに包

まれた柔かさうな山腹は、容易に西麓を見ない美しさであつて、草を敷き詰めたなだらかな傾斜地はカシュミル高原にも敢へて珍しくはないが、到底之に較ぶべくもない。草の中にはアヤメ、オニユリ、苧環草などが相錯り、深碧の龍膽の花、黄金色の毛茛もあれば、緋に燃えるツヽジもある。山薊や其他無數の花が初夏の鮮妍を競ふて居る間に、疎らに立つ樅の男らしい姿が全體の色調に氣持ちの好い落ちつきを與へて居ると、艶説するのを見ると、虎豹と馬賊ばかりが跋扈して居るものと思ふた長白山も初夏から秋にかけては隨分美しいに相違ない。杉本氏の記事は時が十月で山頂には已に雪を見た程であるから、高山植物の美觀を説かれて居ないが、落葉松ばかりが續いた廣い裾野のさびれた秋景色も定めて風趣に富んだものであらうと思はれる。

一行は此處に着いた翌々日に愈々主峰の白頭山（記事の内には白頭山なる名稱は見えぬが）を登り始めた。急峻といふ外には格別の困難もなく朝鮮方面を展望する積りで急いで鞍部を登り切ると、意外にも脚下を刻り取つた絶壁の下に碧玉を展べたやうな激瀧たる龍王潭を俯瞰して、再び驚愕の叫びをあげた。湖は四周共に眩惑しさうな削壁で繞らされて居る。汀まで降りかけたヤング氏も道とすべき處もないので斷念したが、湖色は空と映じて分秒の間に其色調を變幻する樣を感心して居る。湖畔を割愛して最高の岩峰を登りかけて見ると、急峻驚くばかりで動もすれば踏み轉ろがしか岩と共に湖水まで逆落しにされさうなのを辛くも凌いで絶頂に達すると、眼の下の琉璃盆の外は眼の及ぶかぎりに鬱い密林が、東は朝鮮に西は滿洲に展開して居る。無邊際一色の荒茫の中に會ま松花江の銀光が煌くのを見ることもある。周廻六七哩と思はるゝ湖水の一ヶ所に排水口があつて、此處から溢れ出る一縷の松花江が二三百哩を流れる内に河幅一哩に餘る大江とまで成長するのである。

一行は長白山が思つたよりも低く夏時の雪を履む快を逸した失望を、花に裏まれた山腹、麓の草野、印象深い山頂の湖水と、更に恆白山は大きな

火口湖を有する熄火山である事實を確め得たことなどで充分に償はれ、長途多艱の旅行も茲に首尾よく最後の目的を達し、欣々然として下山の途に就いた。三日目に驢馬の居る處まで還り着き、殘し置いた鷄卵を餓鬼の如く貪り喫つた。食卓を離れる際には每に三分の食慾を保留せよといふが、一行は連日此の主義を最も忠實に實行せざるを得なかつた。歸路といへども勿論食料は頗る貧弱な上に第一不足勝ちであつたが、此時は肩の荷物が除かれて居たから驢馬に副ふて曳きずる脚は重くても、おのづと胸は凱旋氣分に滿ちて居た。

松花江に沿ふて下る三百哩の吉林に出る計劃で、方面は少し遙ふが來路に變らぬ暗い大森林を縫ひ分ける間には、幾多の支流を何度も渉つた。或日などは深さ腰に達する徒渉を二十四回も累ねたこともあつた。そして俄然森林から平野に拋り出されたやうに平原の人となると、其處は地味肥沃、人家稠密、物資豐富な里であつた。無人の森林中をばかり數十日の間彷徨した後では、どうやら人間が戀しくなり、幽寂に浸つて居た後に再び活潑な生活の渦動を眺めることは、誰にしても決して厭はしいことでなく、況して連日饑を忍んで旅行した一行が食物豐富な平野に還り得た時に感じた蘇生の想ひは如何に深刻なものであつたらう。

杉本氏の記事を拜見して後、x地圖を見ると、朝鮮方面からは惠山鎭、或は茂山の何れから行く道も靈頂峯附近で合致し、燕脂峰から定界碑を過ぎて絕頂に至るなり、又は三池淵から小白山を經て登るなり、ともかく山道はあるとのことだが、ヤング氏一行が辿りぬけた森林中には定つた山徑があつたのか、獵師などが歩いた迹を傳ふたものか、帽兒山から山頂に至る間には、三水から鴨綠江を渡り其支流の一つを溯り、タゴナイ峠(?)を踰えて松花江の上流に下り吉林に通ずる山道を必ず一度は横切る筈で、此溪谷には多少の部落もある筈だが、夫等に關する記事が充分でないのが頗る遺憾である。併しシュ氏の著書は書名からして長白山である程だから、必ず地形其他の記載が詳しいだらうと思ふ。(吉岡八二郎)

○大井川の荒廢

これは大正十年の夏、私が大井川の一部を歩いたときの見聞に從ひ、書きつられたものであります。その後兩三年の内に更に大に荒廢に導びかれたこと、思ひます、道路なぞは所々に造られ、ある意味に於て便利になつたことも亦多いと存じます。それ故此方面を御歩きになり、新しき見聞を持つて御出の方は是非誌上に御投書なされて、參考材料に御提供にならんことを希望致します。

大井川の谿谷の森林が、大規模に着々伐採されつゝあり、そしてその全谿が、殘る隈なく伐採されんとしつゝあることを聞く丈でも、私等には信じられない位、意外な事實であることを、私は悲しむ。

日本アルプスの姉妹川。白峯赤石の兩大山脈から滲出し、奔放し、汪洋として漲ぎり流るゝ、あの大川を育くむ溪山が、數百數十年來鬱々として繁茂してゐる、喬木や大森林を一と度び失つたならば、南方特有の豐潤濃密な森林が、雜然たる藪の如き林叢となつたならば、恐らく爾後私等は顧をそむけて、この谿谷に入る程の勇氣を失つてしまうことであらう。

大井川は數年前より、大倉氏の經營にかゝる東海紙料會社によつて、千有餘人の人夫が伐採に從つてゐる。その一隊は右岸に、他は左岸に各々樞要の地に大きなバラックや事務所を建てゝ谷下より上流へ向つて伐り上げて行くので、聖澤も赤石澤も奥西河内の澤も、更に東俣も西俣も、何れは數年を出でずして悉く薙ぎ盡さるゝ豫定であるさうだ。

私の行つたときには、左岸は諸の澤を盡して倉澤へ入らんとして、千梃木山以下の大井川に面する山側は全く伐採し盡され、笹ヶ岳の頸の邊まで道を付けて、盛んに伐り出してゐた。右岸は上河内の澤を伐り了つて、聖の日影澤の可なり高い處まで入つてゐた。唐檜、白檜、落葉松、樅等は製紙材料に、檜、山毛欅、七葉樹、桂等の所謂かね木は建築材料に供する爲、川末を押し流されて島田の製材所に送らるゝのださうである。苟くも製紙及建築の材料に用ひらるゝ程の木は、悉く伐り出されるのだから、その跡の荒廢は實に慘憺たる

ものである。然しながら事務所員の語るところによれば、地味豐沃のこの溪側では、後からずんずん若木が密生して來るので、植林の必要は全くなく、やがて數年ならずして相當の森林を以て蔽はるゝと云ふことである。

私は笠ケ岳より千樅木山を越え、國境の山稜から分れ、伐採された跡を降つて、諸の澤の小舍へ出て一泊し、翌日は倉澤の尾根を大井川へ降つた。到る處に小舍が營まれて、掛場々々には越中何々組、群馬何々組と書いてあつた。伐木の響の喧しい中を通つて、笠ケ岳の伐採道と分れ、倉澤の尾根へ入つて、漸く落ち着いた樣な氣持になつた。そこには根の大木が美くしい森林をなして、見渡す限り大井川の緣までも續いてゐた。長く垂れ下つてゐるサルオガセの幽麗な姿を見、駒鳥の涼しい聲を聞きながら降つて行くと、まだ伐り始められないこの尾根の森林は、私に極端に厭はしいものゝ樣に思はれた。大井川の釣橋を渡つて赤石の丸山の下を戻り氣味に歩いて行きながら下流を眺めたとき、私はもう堪らなく不愉快な氣持に襲はれたのであつた。

諸の澤から下の谷も山も、皆樹木を切り盡されて、見ゆるものは累々たる伐木の殘骸と、慘憺たる山の地肌と、また使用に堪へないひよろ〳〵の若木が疎らにとり殘されてあるばかりで、禿頭病の頭へ白毛が生へ出した位の醜態を暴露した。溪流のみ徒らに淙々と流れてゐるが、森林を失つた溪谷のつまらなさには、とてもこの下流へ降つて見る程の勇氣を失つてしまう。私は逃げる如く赤石澤へと入つてしまつた。それから聖澤を溯つて、その壯麗な溪觀を見るにつけ、私の傷ましい心は中々消えさうにもなかつた。

鬱葱たる大森林の間から迸ばしり出つる聖の大瀑も、その周りに茂つてゐる幾抱へもある檜や樺、檜、黑檜などの大木を薙伐されたならば、恐らく崩壞せる岩石の間から落下する、平凡の瀑となつてしまうことであらう。日影澤と聖の本澤との間の尾根に續いてゐる立派な檜の林も、上流聖平の白檜の密林と、その密林の中を曲走してゐる美くしくして且つ愛すべき清流も、最早今頃はふみ

にじられて、見る影もなくなつてゐることであらうと思ふ。

大井の上流櫻島に水力電氣の小舍が出來て、早川の内河内の附近で白峰山脈にトンネルを貫ち、川床の高低を利用して、大井川の水を早川に取り入れる計畫をしてゐたが、今では既に着手してゐることゝ思ふ。

禍なる哉大井川。その溪側は見る影もなく慘賊せられ、溪水はトンネルによつて他に引き去られ、さすが海道一の誇りを持つたこの大河も、その純美な源流地に於て既に救ふべからざる墮落の境に導びかれてゐる。

東海紙料會社も早川水力電氣も共に社會經濟に稗益するところは少なくあるまい。然しながら私は登山家として、山を愛するものとして、日本アルプスの内、最も深邃豐麗な大山谷を、まのあたり荒廢に委ねられるのを默視するに忍びず、本文を草して、同志と共に大井川の爲に悲しむものである。

（冠）

○屋久島行

前から考へて居たことでしたが、大隅の屋久島へ行つて見たいといふ希望で、何でも物はあたつて見れば分ることだと極めて、船の出る日時も、島の事情もろく〳〵調べもせず、十二月（大正十二年）二十九日の朝博多驛から乘り出して、其夜鹿兒島へ着きました。早速交番に入つて水上署へ電話で船の有無を問合せて貰つたら、今夜は勿論出る船はないとのことで、然る可き宿屋を敎へてもらひ、其所へ行つて船の都合を聞くと、一月の二日迄は船は出ないといふ、それですつかり出鼻を挫かれた形になつてしまひました。然し二日まで鹿兒島の宿屋にくすぶつて居てはたまらないと思つて、翌廿日指宿の溫泉地を訪ふことにして、其日は喜入迄行つて泊り、廿一日は有名なメヒルヤの白生地を見などして暖地氣分に浸りながら、夕方指宿の鴻口溫泉へ辿り着いて宿屋を物色したが、どこも滿員で斷られ、漸く一軒見つけて重い背嚢を下ろすことが出來ました。

一月一日は鰻池へ登り山川へ下つて、又瀉口に歸り一泊。二日は乘合自働車に鮨詰にされながら、來る時は二日がゝりの路をアッケなくも一時間半で鹿兒島に着いて見ると、船は三日の夜に出ることになつたといふ。餘りの馬鹿らしさに腹も立たず、三日は天氣もよかつたし、城山やら南洲翁の墓やら、お上りさんらしく見物に一日を費して、兎に角夜の十時前大川丸といふ百噸内外の小さな汽船に乘ることになりました。

汽船は種子ケ島の西岸に數ケ所寄港して行くので、約廿時間を費した後、漸く目的の屋久島の宮ノ浦へ着くことが出來ました。

一月五日は宮ノ浦から約三里の一湊といふ漁港へ泊ることにして、ゆつくり植物景觀の寫眞等を撮りながら歩き、一湊では日沒迄に可成時間があつたので、更に一里許り先迄行つて口ノ永良部島等を眺め、日沒の美觀を賞しなどして、日が暮れてから一湊に引返して一泊しました。

六日は再び宮ノ浦に引返し、七日は宮ノ浦川の上流へ二里許り林道を辿つて、森林美にスッカリ魅せられてしまひ、翌八日は宮ノ浦に在る上屋久小林區署を訪問し、いろ〳〵島の由林事情等を承り、更に署長の肝煎で、九日島名物の屋久杉自生地を視察することにしました。

然るに九日は朝から大雨で、折角案内にと來て下すつた白石主事にも一時はお斷りをしやうかと考へた位でしたが、少し小降りになつたので、午後から出懸ることにしました。宮ノ浦から小一里南の楠川から山に入り、約千米の辻峠を踰えて、午後四時過安房川上流の斫伐事務所に着くことが出來ました。海岸では秋だか春だかわからないポカポカと好い氣持の暖氣ですが、辻峠では全く冬で、五寸位の積雪がありました。植物景觀の變化も、下部では榕樹やヘゴの半熱帶的であるのに、最早五百米を上ると全く一變して、針葉樹の直線的な樹冠を交えた森林となり、羊齒等も非常に種類と數とが限定されて來ます。

斫伐所では古根技手から深更迄いろ〳〵山の事情を承り、談話は更に種々な方面に飛んで、その盡くる所を知らずといふ有樣でした。

寒さに寢覺め勝な夜を明して、十日はこの斫伐所から約一里の川上に杉の森林美をたづね、引返して古根氏の案内で斫伐の現場を見學し、伐木の狀況から、トロリーによる運材、人夫宿舍の設備大規模な製炭場等を廻つて、斫伐事務所に歸り一泊。翌日は早朝眞白な霜を踏み、寫眞機を手にして背後の高地に登り、折からの旭に銀白に輝き亘る宮ノ浦岳一帶の寫眞を撮り、太忠岳の高さ三十三間周り三十三間と云はれてゐる大石柱を仰ぎ見て引返し、朝食後四里餘のトロ軌道を、安房川の大峽谷の絶勝に見恍れながら、トロリーで一氣に馳せ下り、安房では林區署經營のトリモチ製造所を視察し、下屋久小林區署を訪ひ、直に徒歩にて五里の小徑を宮ノ浦に引返しました。

其夜四日以來姿を見せなかつた便船が入りましたが、荷造りなどの都合で乘り遲れ、遂に十四日夜迄一日千秋の思ひで便船を待ち、十五日早朝宮ノ浦を出帆して、約卅時間の後、十六日早朝鹿兒島に入港、屋久島行を終ることが出來ました。歸航の時は種子ヶ島を離れ、佐多岬に向ふ迄の數時間大暴風で、可成難航をしたやうでした。

鹿兒島で二日遊んで、櫻島を見物などし、福岡へ歸つたのは十八日になりました。

屋久島は東西七里南北六里周囲廿六里といふ決して大きな島ではありませんが、其地形は極めて高峻な山岳地であつて、最高點宮ノ浦岳は千九百三十五米といふ實に九州に於ては比類のない高度を有してゐます。

島の大體の地形は、海岸に狹い臺狀の低地があつて、間もなく急峻な傾斜で一氣に千米内外の山地となり、それからは比較的緩やかな山稜で、島の中央部の高地に連り、其最高點が宮ノ浦岳となつてゐます。それで島では此海岸に近い千米内外の外圏を前山と云ひ、其中の高い峯は千三百米以上に達してゐるものがあります。夫から内部の山を奥岳と唱へ、其高所は孰も千七百米以上であつて、宮ノ浦岳、永田岳、栗生岳の三峯を三岳と稱し、全山を總括して八重岳と呼んで居ります。

其間に發源する谷は、多くは急流であつて、海岸に近く急に三角江狀をなして緩流してゐます

が、孰も谷の兩側が非常に深く且急に刻まれ、其斷面は皆V字形をなしてゐることは、この山中の谷の特色であります。

年中雨量が多く、從つて植物の繁茂も良好であり、且土壤蘚苔等すべての地物は、殆ど水分に依て飽和された狀態にあるので、一朝大雨の時は雨水は忽ち急流を一氣に奔下し、凄まじい勢で洪水を起すといひます。しかし夫も雨が歇めば間もなく元の通りの水量に復するのだそうです。

島は黑潮に洗はれて居ますので氣溫が高く、又前記のやうに雨量も多く、植物の繁茂は實に壯觀であり、且地形が高峻である爲に、半熱帶的な植物景觀が海岸に見られると思ふと、既に千八百米内外に登れば、植物景觀は一變して寒帶性を帶びて來、數種の高山植物要素を包含してゐることも最早多くの學者によつて世間に知られてゐます。そして其山の植物區系は、日本の植物區系の研究上甚だ重要な位置にあることも、亦既に認められてゐることであります。夫に就ては今こゝで論ずべき問題ではないと思ひますから、これ丈にして置きますが、屋久島の植物中古來最も有名なのは屋久杉或は神代杉と呼ばるゝ杉材を生産する杉の老木の多いことであります。屋久島の杉は現今高度約五百米以上の山地に、他の樹木と混生して居ますが、地元ではそれを二つに分けて子杉と屋久杉とにしてゐます。子杉といふのは樹齡數百年を經たるもの以下の若木で、枝葉よく茂り、樹皮の剝落も著しくなく、普通杉としての特性美觀を保つて居ますが、屋久杉となると樹皮は剝落し、樹幹は物凄い灰白色を呈し、枝は大部分枯死して葉も萎縮したものが極めて僅にしがみついてゐるばかりで、一見頗る怪奇な樹形を呈し、幹の内部は多くは穴洞となつて、樹齡も時に三千年に及ぶものがあると云はれてゐます。材は特殊な色澤と杢とを有し、樹脂を多く含むので防腐性高く、非常に貴重視されて來た材であります。古昔は神木として禁伐であつたものが、島津氏管理中其禁を解いた爲、伐採されたものが多く、しかも伐採造林法が拙劣であつた故に、根株を高く殘して伐つたり、伐りにくいものは伐りかけて其儘放置したり

したので、後者は切口から腐れが入つて、現今の立木價値を減じて居ますが、殘された株は現今の重要な屋久杉の原木となつてゐます。夫といふのも林區署の計畫では屋久杉は當分立木は全部禁伐としてあるからです。子杉とても杉材としては重要なものであり、其他數種の有用な林木があるので、林區署でも大きな斫伐計畫のもとに事業を進め、將來は沿岸鐵道の敷設とか安房村の築港とかいふ計畫もあるやうです。

島の現狀は現代の文化からは少くとも數十年を取り殘されてゐて、道路といへば原始的な細い石ころ道であり、橋は壞れたら其儘に一本橋で我慢し、大きな川には手繰り舟といふて、一隻の小舟を兩岸に張り渡した綱で曳いて、渡る時には渡る人が綱を手繰りながら舟を進めて渡るといふノンキさです。牛馬の頭數は少なく、總ての仕事は人力にのみよる有樣で、且つ最近海底電線が不通となつた爲に內地との通信連絡は斷たれ、便船も少し荒模樣であれば、十數日に亘つて來ることなく、不便この上もないのです、しかもその便船が小形で耐波力なく、屢々難船することがあるといふに至つては餘り好い氣持でもありません。

島の人はといへば島國根性といふものか、素朴な所もあるけれども、浪常識で其上排他的ださうで、此島に來て居る官吏等に對して野菜などを賣るやうな時にも、法外な高價を貪るのださうです。一例を擧れば或官吏が薯蕷芋を一升、村のさる農家から買つたところ、驚く勿れ十錢を要求されたといふのです。村人の產業は主として漁業と農業ですが、漁業は或部落に偏して居て一般的ではなく、農業は南部の砂糖キビを除いては問題ではありません。兎に角經濟的にも極めてみじめな島ですが、將來は林業に依つて開發されることでせう。

しかし私共から見れば、原始的な森林、高峻な山岳、兎に角素派らしい憧憬的な島であることは事實であります。

（一九二四年一月二十日竹內　亮）

○板倉勝宣君を想ふ

一

一九二三年一月、立山に起つたアクシデントに就ては當時リーダーであつた槇有恒氏が山とスキー第二十六號に發表せられた所により明かである。これは日本に於ける最初のスキーアクシデントではないが、(最初のスキーアクシデントは、一九一四年一月二十日金井勝三郎氏をリーダーとする富士登山隊がその隊員の一人、酒井薫氏を失ふたのにある。その後スキー中、迷路、飢餓、夜暗又は雪崩の爲に發生したスキーアクシデントは稀ではない。)而し最も注目すべきものであつた。それは常に最も合理的な登山法を採つてゐる、熟練したアルピニストによつて醸されたと云ふ點である。從つて今や發達の第一歩にあるところの、日本の冬季登山のために、幾多の技術上の考慮すべき問題を呈供し、それに暗示を與へたのである。

私は今こゝに此のアクシデントに就てかゝる方面から是非の論をしようとするのではない。それよりも此が爲に一命を失ふに到つたところの學士板倉勝宣君の事に就て書いて見ようと思ふのである。

板倉君は正しいアルピニズムを抱いてゐた所の眞摯なアルピニストであつた。そして彼の一生から山と云ふものを除いたならば、殆んど何物をも殘さないのである。人として彼が二十七年の生涯には、山谷の想念が深く深く織り込まれてゐるのである。それ故單なるアクシデントに於て生命を墮した人としてより以上に、彼の死は彼の全生涯と共に、人を離れることの出來ない私共にとつて、看過し得ない特殊の啓示を有してゐるのである。私はさう思ふが故に貧しい筆をとつて此處に板倉その人の幾部分をでも傳へ得たならばと志したのである。たゞ私は彼の生涯を傳へるにはあまりに短かい交友であつた事を心もとなく思ふのである。それは彼が北海道帝國大學に學べる在札三年の間にすぎなかつたのであるから。が而したとへ彼は既に學習院時代から好んで山岳に入り多くの登山の經驗を得、自分自身を山の中だけに見出

し、また特に多くの登山を好む人々の中にあつて、特異な考を抱いてゐたのであるが、彼が生涯の最後の四年間は彼にとつて、をそらく最も價値ある年月であり、彼がスキーに熟達し、冬季冬山の技術を全く手に入れたのは札幌時代であると云ふ事から、私は此の筆を力づけてゐるのである。

二

此の一個の近代的自然兒が、戸籍上に畫いたところのローカスに就ては、彼自身に於て無價値であつたごとく、吾々にとつてもあまり顧慮すべき事柄ではないが、簡單に之を示すならば、彼は一八九七年(明治三十年)二月十二日、東京市本郷區湯島天神三ノ三板倉家の七男として、此の彼が常に同情と皮肉とを以て眺めたところの世界へ生れたのである。少年時代の彼に就ては、彼自らが私に語つた事の他は、私は何も知らないのであるが、それらの事柄は多くは單なる少年の無邪氣なし追想であり、之より僅かに家庭に於ける生活を推し得るけれども此處にはそれは必要のないことである。初め湯島小學校に入り後、轉じて學習院初等科に學び、中學科を經て一九一九年六月同院高等科を卒業した、同年九月には北海道帝國大學農學部植產分科に入學して居を札幌に轉じた。人或は彼が此の經路を選んだに就て、單に雪を求めて北に赴いたものゝ如く考ふるものもあるが、かく見らるる程、山は彼にとつて大きな存在であり、スキーが彼を強く蠱惑したことを私は疑ふものではないが、彼は尙多くの智識慾を持つてゐたことを私は記したい。自然を愛することが強かつたゞけ、彼が自然の驚異に對してもつた所の憧憬は熾烈なものであり、自然科學に就て或は正統的研究を好まなかつたのかも知れないが、決して之を輕んじてゐたと云ふわけではない。彼は坂村徹博士に就て植物生理學を專攻し、「麥類花粉の滲透壓に就て」一編を以て卒業論文としたのである。此の研究に當つても彼はまた幾多の挿話を殘してゐる。

一九二二年三月卒業し、四月には既に東京の人であつた。卒業後彼は自らの將來に就て少からず迷つてゐた樣であるが、落ついて迷つてゐた。そ

れはさしづめ食ふに困ると云ふわけではなかつたからではなく、彼の性格に基くものであつて、たとひ食ふに困つたであろふとも彼はそうあせらなかつたであろふ。足もとに火がつく樣になりても、平氣で見てゐると云つた風の事柄をしばしば日常生活に於てやつてゐた彼である。

世俗的な慾望の尠かつた彼にとつては、あまりに人間的な職業をとることが出來なかつた。そして殆んど多くの仕事が野心に滿ちたものであるが爲に、彼が純なる彼である限り、又世俗的な野心から全く遠ざかつてゐる限り、心よく彼が手を下し得る樣な仕事があり得よふ筈がなかつた。それでとうとう死ぬ少し前に再び學究の世界へ——比較的世間との交渉の尠い方向へ還つた行つた。即ち京都帝國大學理學部植物學教室に大學院學生となつたのであるが、未だそこに實驗服を着ることなしに逝いたのである。

かくて彼はその全生涯に於て何等世俗的の仕事をなすことなくして終つたのである。板倉君の一生は、彼が最上の自己をそこに見出した所の山岳をおいて、他に探ぬることが出來ない。然らば彼の山岳の生活は如何なるものであつたろふ。

三

私は今こゝに彼の登山履歴を漫然と記さうとは思はない。彼は世の常のピークハンターではなく、山を希求する熱情に於ては誰人にも劣りはしなかつたが、時と金とにはそう惠まれた人ではなかつたし、またそんな野心も持ち合せてゐなかつたのであるから。

彼は常に山に對してより深く、より眞に迫らん事を望み、その心に清新の氣をもつてはいつて行つた、一日の登山旅行と雖も彼にとつては此上ない嬉びであつたのである。

彼は一九一三年から一九一九年までの七年間に於て一九一六年七月大町から針木峠を越えて立山に到り、立山溫泉を經て山を下つた他は毎夏、上高地を中心とする諸山の登攀を企てたのであつた。彼は功名を掠奪するかの如き登山、峯頂を踏んで得々たる底の登山を以て苦々しき限りとなしたのであるからして、たとひ彼が上高地附近の諸

山――乘鞍から烏帽子に到る――に足跡を印したとは云へその事を以て誇りとしてゐるのではなかつた。彼は時に一ヶ所に小屋を組んでは、日々を山と語り暮す樣な、そんな生活を送つたのである。彼には登山は旅行ではなく、生活であつたのである。

一九二二年の七月には大槍の北尾根の初登攀を行つた一人であり、八月には穗高の岩壁にクレッテライの練習をやつた。

スキーは既に學習院時代より練習を初め、一九一五年より一六年にかけては赤倉に、一九一六年の末には關に、一九一七年末及び一八年末には五色に於て雪を友とし、一九一九年三月には牧より常念、中山を經て槍澤に入り、德本を越えてゐる。此は天候の不良であつたゝめにその望を達しなかつた。札幌に學んでからは冬季三シーズンは雪の在る限り、日の在る限り機會をとらへてはスキーの研究に腐心したのであるが、此の間に於ける彼のスキー術の著しい進歩は何人も驚くところであつて、云ふまでもなく多くの冬季登山をやつてゐる。(彼は北海道山岳中、昆布岳、余市岳、旭岳、サオロ岳の冬期初登攀に加はつてゐる。)一九二一年の四月には再び牧より常念、中山を經て槍澤に入り、槍のピークを半ば登つたのであるが、一人であつたゝめザイルテクニークを用ふることが出來ず引返して上高地に出たのであつた。一九二三年一月に於ける登山は周知の事實であり、彼にとつては最上のそして最後のものであつたのである。

四

さて彼が如何なる登山家であつたかを記さねばならないのであるが、しばしば云つた如く、彼は山岳に於て最上の時を持つたのであるからして、彼の登山は單なる登頂の目的の爲に隊をなして喧囂のうちに歩を運ぶ體の企てを嬉ばず、たとひ誰かゞそうした中に彼を見出さうとも、彼は自らの心に靜かなる道を行きつゝあつたのである。

彼は即ち氣まぐれの登山家ではなかつたことは明かであるが、例へば或る一つの難場に遭遇しても、此れを打越えなければならない運命に置かれ

たときに於て、たゞ目的の爲に手段を擇ばず、或は兎も角もこの難關を切り拔けさへしたら、いゝと云ふ樣な心持ではなしに、靜かに之れを省察して最善の方法を發見する爲に考慮したのである。即ち難場は彼にとつて困厄の障害としてゞはなく、眞に自らを意識し、より正確なる技術を試むるものとして快よく彼にはとり入れられた。

登山を一つのスポーツとしてより以上に高く考ふる所の人にとつては、登山は人格の最高の表現でさへあるのであるからして、仲間の氣質がより深く顧慮せらるることになつて來る。此は一人一人異るところの個性の撰別ではなしに、たゞ深き信頼と敬愛とを必要とするものなのであるが、彼はをそらく此の點に於て他の何人からも、充分の滿足を以て迎へられたであろふと思ふ。彼と共に山に入り、彼と共に雪を味つた所の全ての人は、人として、また登山家としての彼を充分に信頼し得たのである。此は單に技術の問題ではないのであつて、全人的の事柄である。

彼がその性格として在俗的な事柄に就て出來るだけ之を避けようとしてゐたことは前にも記したが、此の事がはじめ彼を山へはいらしめたかどうか私はこゝにそれをはつきりと示すことは出來ない。しかし彼は元より彼が山へはいるに就ては何にもテレオロジカルな考へを持つてゐなかつた樣だ。彼自身に於ては、どうしても山へはいらなければ居られなかつたので、決して他動的なものではなかつた樣に思ふ。あまり山に親しんだから却つて、俗世間の事柄から遠ざかる樣な傾向になつたのかも知れない。そして多くの眞に山を愛し親む所の人々の如く、彼も亦決してたゞ山岳に限つてかゝるあくなき憧憬を持つてゐたのではなく、なべての自然そのものに就て、深い悅を持つてゐた。それ故彼は必ずしも高い山ばかりを目ざしては居なかつた。槇氏の書かれたごとく、錢函のテレースから、雄冬岬のつきでゝゐる北の海をながめたり、中山峠の無人の驛遞に自ら薪を切つて、秋の美に眺め入つたりしたのであつた。たゞ平凡な田園に於てすらも彼は自然の美しさと、宇宙の現象とを視て、限りなき悅を得たものであつ

た。たゞ山は人環を離れて、そして昔しからの多くの自然哲學者が云つてゐる樣に、自然は山に於て綜合されてゐるのであるからして、をのづから彼は深く山へと志したのであろふ。自然及人間に對する各人の思想の相違するによりて、山へ這入る多くの人々の胸には樣々の感が持たれることになるのであらうが、板倉その人には、かく靜かなる、角なき性格が惠まれてゐてより深く自然へと沒入して行つたのではなからうか。

山岳の愛好が幾分でも嫌人的性質を帶ぶるに於ては、そしてかゝる事柄が他の二三の素因と共に自らをより深く山へと追ひやるものであるが、此が爲にまたより高度な登山術を必要とする樣になる。而し乍らその登山術の要求するところの合理的方法は、單獨の登山を決して賞讃するものではないのであるからして、こゝに大きな矛盾を生ずることになりはしないか。

此の點に關しては多くの山仲間は夫々解決の條理を見出してゐることであらふが、よく論議せらるるところのオーネフユーラーの問題の如きも廣義にはかゝる事柄と切離すことが出來ないものと考へられる。彼も亦此事に就ては、しばしば語つたのであるが、その謂ふ所を要約すれば、眞に山へ志すものは、各眞摯なる且つ止み難き意圖を理解し合ひ、宏やかな心で敬愛と信賴とを持ち得るに於ては、かゝる矛盾に苦しむことなく、此等の人の連環は深き山にあつて自然に對する限りなき懷かしみにつゝまれつゝ眞に新しい人の世界をさへ見得るものである。

事實眞に山を愛する人は、山に於てその親しい仲間と共に人間ばかりの築いてゐる世界とは別な、美しい世界を幾分かでも體驗することである。彼はこうした氣分が人の世により廣く見得るならば如何に正しい社會が生れるであらふかと云つた。

彼はまた、こうした嫌人的一面に惑はされて、かゝる點に抱泥することなく、登山術の研究によつて更に山岳の觀念が、心に新生面を與へるであろふことを云つてゐる。即ち登山術の進歩が本來の心持に背馳するものではなく、却つて更に深く

親はしく人を山に近づけしむるものであると云ふのである。山登りは、一通りの身體を持つたものには誰にでも出來るものであるが爲か、登山の特種の技術の眞價が認められる樣になつたのは我國では比較的新しい事である。登山法として、幾多の敎訓的の事柄が述べられてはゐたが、熟練と研究とを必要とする合理的な技術であらねばならないことが理解されるのは遲かつた。それは氷河が日本にはなかつた事も一つの原因ではあるが、クレッテライなどはやればやり得る所が尠くはないし、アイステクニークもさう我々とかけはなれたものではないのである。板倉君は早くから此の點に氣づいて合理的な方法を採用することを主張し、研究しつゞけた。そしてその場限りの所謂冒險を嫌つてゐた。

そういふ彼であつたからして行を共にしても、驚くべき敢爲を示すことはあつても、決して齒のうく樣な行動はしなかつた。そして山に對しては常に精細な研究と調査とを怠らなかつた。日本アルプス諸山の冬季登山は日本にスキーが行はれる樣になつて以來一二の人達によつて試みられたが、彼は山とスキー第十號に於てその將來を語り此點に就ての最初の意見を公表した。彼が二度も槍ヶ岳に向つてゐるのを見ても、たとひ峰頂には到らなかつたとは云へ、此の地方の積雪期に於ける狀態を明かにして、日本の登山界が新しい方向に進む重要なベンチマークを打つたのである。

立山方面に於ける冬季登山に就ても彼は早くから考へてゐたのであるが、札幌時代には時を得ることが出來なかつたのである。一九二三年一月、計らずも二人のいゝ仲間を持つことが出來、彼は多くの期待を持つてはいつて行つたのである。

スキーの技術に就ては恐らく當時のアルピニストの中に於ては彼の右に出づるものはないであろふと思ふ。或は彼よりももつと鮮麗な壯美な滑降をするスキーロイフェルは數多くあろふが、彼の如く確實で豪宕な技術を持つものは尠いであろふ。確實は恐怖を含むものゝ如く曲解され易いが、彼に於てはそのヂッヘルハイトの上に、敢爲な多くの特長を表はしてゐた。

登山に於けるスキーは滑降を目的とするものではなく、登行の技術に於て甚だ多くの體力と頭腦とを要するものであることは云ふまでもない。彼は登行に際して、スキーの場合のみならず常にその速度に不整を來すことがなく、またシュブールアンラーゲンの撰定にしばしばその熟練さと、明敏さとを示したのである。

狀況の順潮に乘ずることもなく、事情の惡化に落膽することもなかつた。かくの如きは眞の登山家の最も必要とする氣質であろふが、彼に於てはそれが如何にも自然であつた。限りなき心の悅に遭つても靜かに之を觀照する性質で忘我の昂奮に陷つて之を消失することを惜んだのであつた。

槇有恒氏の「板倉勝宣君の死」を讀むとき、そして彼が刻々死に近づき行く經過を想ふとき、登山家としてよりも人としての彼を最もよく知ることが出來る。

五

彼が立山に死んだことは全ての山仲間にとつて直接、間接の大いなる損失であつたとは云へ、彼の死後、その性格と全生涯とを見るに於て、或はそれが彼にとつて幸福であつたかも知れないとさへ思ふのである。

私達は山で飢餓や、睡魔や、寒氣などの惡靈に取りつかれた場合を想像し得るのであるが、あの場合の樣な悲慘な情況は到底考へられない。そしてこうしたアクシデントから單に準備的の事柄に就ての色々な點を、あの悲しみのうちから、敎へられるのみならず、更に大きい山での死と云ふ抽象問題に深く深く引き入れられるのである。

板倉君はよくその事に就て話してゐた。準備の缺陷や、技術の未熟に原因する種々の不詳事については彼はよく注意した。吾々の間では、いつもよく、誰かがいまにやられるだろふと、警戒し合つてゐた。がそうしたときに於ても彼は山での死をそれ程、いまわしいものとは思つてゐなかつたと思ふ。彼は死を擇ぶ悲觀論者では決してなかつたが、世俗の生活に多くの望を抱いてゐなかつたのであるから、そう云ふ方面から來る死の恐怖、或は生の執着はあまり大きくなかつた樣に私は思

ふのである。

あの死の經過から想像するに、强い吹雪の中に一夜を過した翌朝には生命の問題であることが意識せられて居り、その後の狀況を聞いても、板倉君は彼の死時より可なり前に刻々死に近づきつゝあることを知つてゐた樣に思ふ。彼が息を引とる樣は、私には涙なしに想起し得られない悲しみではあるが、見苦しい昂奮にからるゝことなく、靜かに槇氏の胸に永眠した事は彼には如何にもふさはしい事の樣に考へられる。あの連續的の困苦の中にあつて、何等肉體的苦痛をも口にすることはなく、素直に運命の手に導かれて行つたと云ふ事は、彼の性格を表して居ることにもなる。と云ふのは、この場合に初めて見ることではなく、大小の差はあるが、彼の生前の登山に於て、否山に於てのみならず、日常の生活に於ても、あせつたり、もがいたりする樣な事のない性質であることを私達はよく觀取することが出來た。

しかし前から死を意識したとは云へ、それが爲に全く努力を棄てたとは思はれない。現に彼は最後までその力を用ひ盡してゐる。こう云ふ場合によく有り勝ちな無役な力の用ひ方ではなしに、合理的に有效に之を消盡してゐる。

また彼が何等の遺言をも遺すことがなかつたのは、若し彼にその意志さへあれば出來得たと思はれるのであるが、それをしなかつたと云ふのも、彼としては日常からそうした事柄を好んではゐなかつたのによると思ふ。

人として、山岳家として彼の生涯はあまりに短かかつたかも知れない。而しながら嚴冬の立山に吹雪の晴間に輝く星の下、靜かにその生を終つたことは彼にとつて他の如何なる死よりも最もふさはしいものではないか。

彼に就ては尙書くべき多くのものがあるが、その趣味や性格の巨細にわたつて正しく記すとは、私の貧しい筆には重すぎる事柄であり、あまりに多く書きすぎるとによつて彼を傷つけることをおそれるが故に此處に一先づ筆を擱くことゝする。

青春の二十七年を、山と雪とに献げたる自然兒

よ、君の後には多くの正しく自然を愛する人々と、美はしき社會とが從ふであろふ。

一九二三年秋君と生別一年の後（加納一郎）

○第三回エヴェレスト山遠征

英國皇立地學協會と山岳會と合同して設立したエヴェレスト山委員會では、別項雜報欄所載の如く愈本年第三回の遠征隊を送つて、エヴェレスト山の完全なる登攀を遂行するといふことである。

一昨年行はれた第二回の登山では、最初五月二十一日にマロリー、ノートン、ソマーヴェルの三氏が酸素を用ゐずに二萬六千八百呎の地點に達し、次で五月二十七日にフィンチ、ブルースの二氏は、酸素を用ゐつゝ二萬七千三百呎の高所に攀ぢ登つた。これは高さの記錄から言へば、アブルヂ侯の二萬四千六百呎を拔くこと實に二千七百呎であつて、常に登高の記錄を伊太利人に保有されてゐることを心外に思つてゐた英人は、必ずやこれで一斗の溜飲を下げた感があつたであらうと思ふ。

然らば今まで探檢された大ヒマラヤ山脈中に於ける二萬五千呎以上の高峰で、エヴェレスト山ほど容易に主峰の頂上直下まで、人間の足跡を印するとを許した山があつたであらうか。二萬八千百五十呎のカンチェンジュンガは如何であつたか。二萬八千二百五十呎のK²は如何であつたか、此二山はエヴェレストに劣らぬ大規模の準備の下に探檢されたにも拘らず、探檢者は其麓を匝る氷河を辿つて、二萬呎若くは二萬一千呎の地點から近付き難き莊嚴の本體を瞻仰したのみではなかつたか。二萬六千六百廿九呎のナンガ・パーバットは、山の天才として古今に絕した名登山家といはれたマムメリー氏が、三日間に亘つて四十八時間も不撓不屈の最も恐ろしい岩登りを續けてさへ、其の西北西面に當る二萬一千呎の地點に辿り着き得たのみで、其處からの登攀を斷念しなければならなかつた。稍低い所でガアーワル・ヒマラヤの覇者ナンダ・デヴィー（二萬五千六百六十呎）も、カイラス山脈（西藏）のグアーラ・マンダータ（二萬五千三百五十呎）も、又はパミール高原の東端に位置するムスター・アータ（二萬四千四百呎）も、皆

倦むことを知らない大登山家の勇猛不轉退の努力に對して、どれだけの讓歩を敢てしたつたか。私の知つてゐる範圍では、カンチェンジュンガの西南約八哩に在る二萬四千十五呎のカブルーが一千八百八十三年にはグラハム氏、千九百七年にはルーベンソン及アアスの二氏に依りて、殆ど其頂上を極められたのを除いては、ナンダ・デヴィーと共にガアーワル・ヒマラヤの兩横綱と稱す可き二萬五千四百四十三呎のカメット山が幾人かの登山家に幾回か登攀を企てられて、終に千九百十三年ミード氏の爲に、主峰と東イビ・ガミン山（二萬四千百七十呎）との鞍部二萬三千五百呎の地點を明け渡すの餘儀なきに至つたことが記錄されてゐるのを見るだけである。此鞍部からカメットの絶頂を窮めることは困難ではないらしく、成功は最早手の中と想らはれた其時、ミード氏の一行は山岳病に打ち勝たれてしまつた！

其後千九百二十年にドクトル・ケラスの一行三人も亦此鞍部に達したが、適當に調理された食物の缺乏と非常な寒さとが結び合つて人夫の素質を惡化し、絶對に前進を肯じないやうになつたので、同じく此處から力なくも下山してしまつた。

英國山岳會の會長ノーマン・コリー氏は、千九百二十年十一月八日に催された地學協會の集會の席上に於て、「若しもどの遠征隊かゞエヴェレストを取卷く未知且禁制である土地へ行くことを許されるものとすれば、それは英國の遠征隊でなければならぬ。英國政府はどんな條件の下にも吾等に先んじて其處へ行くことを他國人に許す可きではあるまい。エヴェレストに近付く許可の出るのをあれ程長い間待つてゐたのであるから、實際吾等は其地へ行くことに就ては誰よりも優先權を持つてゐると思ふ。のみならず山岳會の立場からいへば、山に登る道を敎へたのは英國山岳會である。世界に於ける他の山岳會や登山家の多數は、最初の英國山岳會員の追蹤者であつた。たとへモン・ブランはスウィス人に依て登り初めれらたにせよ、アルプスで眞面目な登山を始めたのは英國山岳會員が最初である。其後殆ど五十年を過ぎて他の高山大岳が登られるやうになつたが、其時でさ

へも登山を精神の休養であると眞面目に考へたものは實に一人もなかつたのである。英國山岳會の會員は初めて登山を上首尾の冒險たらしめた。されば此等の條件からして、予は英國人たる許りでなく、世界の最高峰エヴェレストの登攀に關して最初の發言者である英國山岳會員でなければならぬと思ふ」と氣焔當る可らざるものがあつたが、そのコリー氏でさへもエヴェレストの北面の性質が如何なるものであるかを知つた後は、聊か物足らぬ感があつたものか、山岳會長の任期盡きてブルース少將を後任に推薦した時の告別の辭の中に、「マカル（二萬七千七百九十九呎）やガウリサンカー（二萬三千四百四十呎）やブモリ（二萬四千呎）の如き此等の巨大なる山峰は、世界に於ける最大の山脈に屬して耻しくない價値を有してゐる。然しながら是等總ての中の最高峰であるエヴェレスト山が少くとも其北面に於て、稍平凡たるを免れないやうに構成されたのは不仕合である。他のK^2でもカンチエンジュンガでも、マカルでもナンガ・パーバッドでも極めて美しい。又エヴェレストの北側に於ける氷の世界も、あの驚異す可き二の大氷河と其貢流即ちバルトロ及シアチェン氷河に比較したならば、跌宕の趣に缺けてゐる。勿論吾等は、偉大なる絶壁が稍低い山々の間を深く穿鑿して豐富な森林を有する溪谷に下り行く騷々しき氷河を見下しながら番してゐるエヴェレストの西南側に就ては餘り多くを知らない。其處には閉ぢ込められた水が泡立つてネパルの低地へ奔下して行く極めて壯大な隘峽がなければならない。

ヒマラヤの知識が單にエヴェレストの北面の土地にのみ限られてゐるならば、其人は眞のヒマラヤに就ては何にも知らないのである。K^2やグッシャーブルム（三峰あり最高峰は二萬六千三百六十呎）の峯々やムスター・タワー（二萬四千九百五十呎）等を圍む氷の畏ろしき寂寞は遙に違つたものである。其處は總てが一の巨大な氷雪の世界で、幾つかの素派らしいマッターホルンや幾つかの莊重なモン・ブランが、其驚嘆す可き土地を儼然として支配する主君に從ふ侍者の如く互に競ひ立つて

ゐる。エヴェレストの連脈にサルトロの尖峰と比較す可き何物があるか、ゴーアの下の印度河の隘峽に見るやうな宏大と重々しい莊嚴とに似通つたものを何處に覓めて得られやうか、實にゴーアの隘峽はアルプスの大を幾倍した山地と、殆ど千哩を隔てた水源地から流れ來つた大印度河がヒマラヤの主脈を横斷して作つた、深い荒涼としたそして較べやうもないやけに宏大な地の裂け目に外ならないのである。其北側に於ては懸崖が層々相重つて一萬二千呎の高さに峭立し、他方に於てはナンガ・パーバットの雪が水面から二萬四千呎の峯頂を飾つてゐる。（英國政府はこの隘峽に沿ふて軍用道路を開鑿した）。

けれどもエヴェレストの北側が比較的おとなしいことは、見方に依ては仕合である。何故なれば二萬七千呎を超えてゐる他の峰々は、莊嚴ではあつても、到底峯頂に近付き得るあてもないものと誰でも絶望する程むごい斷崖と急峻な氷河とを示してゐるが、エヴェレストには斯樣な困難がない。かくてマロリー及ソマーヴェルの二氏は二萬七千呎を少し缺いた高さまで登り、フィンチ大尉とブルース中尉とは酸素を用ゐて二萬七千二百三十呎に達した。夫許りではない、人夫は重い荷を二萬五千呎まで背負ひ上げたのである。」と述べてゐる。

第二回エヴェレスト遠征隊の一員であつたロングスタッフ氏は、「私は斷言するがエヴェレストはやさしい山ではない、夫をやさしいとけなすのは、きいた風であり且他日頂上を窮める人によくないことだ。」と書いてゐると同時に、路の充分眞直であることを否まない。東ロンブク氷河の上部から西に向つて千二三百呎も登ると、チャン・ラと稱する海拔二萬三千呎の鞍部に達する。其處から路を南に取つて、本來甚しくは足場の惡くない——雪にも依るが——山稜を眞直に四千四百呎程登り切るとエヴェレストの頂上から東北に延びた肩の上に出る、さうすれば最早絶頂までは距離にして一哩、高さにして千六百呎に過ぎないのである。エヴェレストが世界最高の峰として、當然非常なる或は寧ろ殆ど不可能に近い登攀難を豫期され

てゐたものとすれば、ヒスパー、ビヤフオー及バルトロといふやうな最長四十哩にも亘るカラコラムの三大氷河を跋渉し、K²を始めとしてブロード・ピーク、グッシャーブルム、マッシャーブルム、ムスター・タワー等の二萬四千呎を超えた峻險近寄り難き氷山の偉觀を目のあたり見て來たコリー氏が懐焉の情を禁じ得なかつたのも無理はない。

それにしてもエヴェレストは、どこまでも二萬九千呎を超えた世界の最高峯である。登攀の容易でないことは、一度其酷烈な寒氣と氷の如き風とを想像したならば、たとへ酸素吸入器を使用するにしても、困難は察するに餘りがある。斯る高度の山稜上に於て、若し嵐に遭遇したならば、渺たる人間は到底之に對して面を向け得らるゝものではあるまい。ロングスタッフ氏がやさしい山ではないと言ふたのも亦尤もな次第である。

然しもう一遍考へて見る。骨の折れる山と、てんで取付けない山とは、出發點に於て既に非常な相違がある。如何にもエヴェレストは骨の折れる山であらうが、K²やカンチエンジュンガのやうに取付けない山ではなかつた、それは恐らく探檢隊も或は意外に感じたであらう。夫と共にこれはどうやら頂上が極められさうだといふ希望が新に強く一行の胸に燃えたことであらう。

試に大ヒマラヤ山脈に屬する高峰の幾つが完全に登攀されたかを數へて見ると、前記カブルー山が殆ど頂上を極められたのを第一とし、ロングスタッフ氏のトリスル（二萬三千四百六呎）、頗る疑問とされてゐるグラハム氏のドナギリ（二萬三千百八十四呎）、ケラス氏のランブ・ピーク（二萬二千八百呎）等があるのみで、今日尙ほ五指を屈すれば足りる程である。しかも四十八座を下らない二萬五千呎以上の山は一も登られてゐないのだ。が、若しエヴェレストの頂上を窮めることが出來たならば、一擧にして人間が歩いて到達し得る最高の記錄が作られるのである。そしてエヴェレストは登るに骨は折れても、先づ無雜作に取付ける山だ。想ふてこゝに到れば、どの國人よりも何かにつけて便宜を有する英國人が巨額の費用を厭はず、第二回の後僅に一年にして、第三回の遠征

隊を送つたのも故なきに非ずと首肯される。

三月廿八日の東京朝日新聞に據れば、遠征隊は本年もブルース少將を隊長とし、三月廿六日にダージリンを出發したとのことであるから、一昨年と出發の日が同じである。從つて目的地へ到着するのも亦一昨年と大差なく、五月初旬には登攀の準備を整へて、直に登山を決行する)であらう。かくて天候と雪の狀態さへ甚しく惡くなかつたならば、今年こそは頂上に達せられるものと豫想される。

序にエヴェレストの標高は、從來二萬九千二呎となつてゐるが、其後更正を加へたものと、千九百二年迄に六ヶ所で測られたものとを平均した結果二萬九千百四十一呎となつた、之を日本尺に換算すれば則ち二萬九千三百十二尺である。けれども地圖には元の通り二萬九千二呎として載つてゐる。(木暮)

○デッチョウの茶屋の一夜

最早三年になる。西山溫泉へ行かうと思つて、甲府から自働車を走らせて歐澤へ着いたのは。待つてゐる筈の宗平を尋ねて粉屋へ行つたが、とうとう行き違ひになつて會ふことが出來ず、午後の日盛りの暑い峠道を喘ぎながら、友人Iとデッチョウの茶屋へ登り着いたのは。黄昏近い靜寂な夕の空の彼方に富士の悠容を眺めながら、峠の頂上で一と息入れた。

デッチョウの茶屋は今尙ほ舊の如くであつたが、曾て伐り盡されて見る影もなかつたこの周圍の樹木が、何時の間にか殖林された唐松が叢生して、もう立派な森林となつてゐたのが何よりも嬉しかつた。私等はその木下路を小谷へ降つて、流れで漱き身體を拭つた。どうせ今夜は溫泉迄は降れないので、むさ苦しく思つたが、この峠の茶屋に一泊を賴むことにした。

冷やかな夕暮の空氣が、その大きな吐息のなかに、この小舍を浸してくれた。晝の疲れを忘れ、私しは後ろの高みへ登り、蒼茫たる夕の山谷に目を送つた。夕霧は蓬々として、今しも富士川の大谷を埋めて、川末の方へと舒々として押し流され

て行く。その切れ目から下の部落の電燈の光が、螢火の如く明滅して見える。昨日まで都會の人いきれのする中の、塵埃を透して眺め得た星が、僅か一日の差で、珠玉の如く頭の上で輝いてゐるのを見ると、私は自分の頭が急に明るくなつた樣な氣持がした。そして何となく救はれた樣な幸福を感ぜずにはゐられなかつた。

椎茸に麩の煮付け、それから味噌汁、山薺の香の物で夕餉を濟ませたが、空腹なので中々美味しく、溫泉で出された食事よりも遙かに口あたりがよかつた。疲れてゐるので、床を延べてもらつてまどろんだが、唐草木綿のゴツ〳〵の煎餅蒲團でも、清潔なので案外氣持がよく、こう云ふ小屋にしては珍らしく蚤一匹もゐなかつたのと、凉秋の樣な氣候は、私等を深き眠りに親しましめた。

眞夜中頃目を覺ましたが、風全く死し、四境閒として物の音のけはいもしない。戸締りがしてないので、障子を開けて、暫くの間水の如き靑空と、燦然たる星の世界に對した。何と云ふ靜かな夜であらう。森閑寂寞、私は未だ曾てこんなに穩かな泊りを經驗したことがない。人寰をかけ放れた山上の小屋の樣な物凄い感は更になかつた。何となく親しみのある峠の茶屋の夜の靜けさを聯想せしめた。

又うと〳〵と一眠りしてゐる內、鶯が後ろの茂みで囀り始めた。障子を明けると表は霧で一杯である。直ぐ前にある唐松の老木が馬鹿に大きく見えた。やがて朝日の第一閃が差し入ると、今まで小屋の周りになびいてゐた狹霧は、麓の方へとなだれ落ちて行く。それでも峠裏の唐松の林の中は、まだ模糊として煙の樣な薄霧が一面に罩めてゐる。私等は顏を洗ひにその內へ入つて行きながら、思ふさま氣持のよい朝の空氣を吸ひ込んだ。食事を終つて森閑たる峠の茶屋に、小鳥の囀を聞きながら澁茶を飲んでゐると、ひよつくりと宗平が入つて來た。そして私の顏を見て破顏一笑した。山へ來て舊知の山人を見て、私も喜ばずにはゐられなかつた。昨日宗平と登路が違つた爲、行き違ひになつたので、私等が登つたと云ふことを鰍澤で聞いて、夜を戻つて、途中の矢川の部落で

泊めて貰ひ、今朝大急ぎで登つて來たと云ふてゐた。

午前九時頃、宗平と連れ立つて、茶屋を出た。木下濕りのする靜かな峠道を、私は幾年ぶりかで、景色をむさぼりながら降つて行つた。奥山に入る峠の裏路ほど、私等に緊張した壯快味を與へるものは少ない。表路で暑つかつたのが、裏へ入ると急に涼しくなり、樹木は多く、その種類、形態を異にし、清水は潤澤になり、溪聲は深くなる。喧噪な蟬の聲でうんざりしてゐた頭が、鈴の樣な駒鳥の聲で急に蘇る。それよりも何よりも嬉しいのは、今迄見えなかつた、あこがれてゐた、巡礼の對象である、自然の巨人は、深谷の彼方に堂堂たるその豪容を示してくれることだ。夕立に苦しめられ、僅かに峠の頂きに辿り着いたときは、雷鳴は遠く去り、夕陽に反映して、紫赭色に輝いてゐる嵩岳の頭顱や、肩壁を仰ぎ見るとき、私等は眞に自分達のあこがれてゐる心が償はれた樣な氣持になる。

峠道は舊の如くであつたが、附近一帶に殖林が生長したので中々美しくなり、更に深奥の感をさへ加へた。飴の茶屋で憩ふ。この茶屋の前に聳り立つてゐる栂？の大木の間から、雲のない日は惡澤岳がよく見られると云ふてゐた。早春に晩秋、氷雪に蔽はれたこの大岳を望み見る丈でも、この峠道を歩く値は充分であると私は思つた。三時頃に溫泉へ着いたが、以前には古湯の方へ泊つたので、今度は新湯へ宿をとつた。山崩れの爲、溫泉の附近も大分變つてゐた。二階の見晴しのよい座敷へ通してもらつて、私は先づ群巒重錯してゐる白峯の峯續きを辿つて、その積翠裡に農鳥の肩壁を仰ぎ見た。そして暫くの間默々として、曾遊の樂しみを思ひ浮べたのであつた。（MK生）

雜報

○頸城アルプスの登山路完成

人跡未踏と神祕を誇つた信越國境頸城アルプスも、文明の發達に依つて遂に征服され、近年スキー及夏季運動の目的で登山する者著るしく增加して來た。登山者の感想に依ると、日本アルプスより氣分に於て全然異ると喜んで居るにも拘らず、登山道路のなきは甚だ遺憾だと云ふので、今夏北安曇郡小谷溫泉有志は一は土地繁榮の目的から田口、赤倉、關の各溫泉地と聯絡旁燒山迄の登山道路の開鑿を長野小林區署に申請し、又新潟縣西頸城郡上早川村に於ても燒山登山道路の開鑿を許されて今秋迄に全部完成し、斯くて夏季に於ける各地即ち戸隱から糸魚川及小谷溫泉から赤倉附近へ、又小谷から柏原へと從來の部分的道路を統一して茲に初めて神祕な山中を聯絡する事が出來るやうになつた。（大正十二年十二月東京朝日新聞）

○避難小屋と觀賞地をアルプスに設置

登山者の便と生命確保を主眼として曩に日本アルプス登山道の完成を計畫した松本小林區署では、登山道と共に最も重要な避難小屋と觀賞地の設備に關し考慮中であつたが、明年度に是非共完成すべき豫算編成を終り、東京大林區に提出した。前記避難小屋は乘鞍頂上のすぐ手前及中房より燕に至る間に各一箇所、上高地と槍の間に三箇所、計五箇所建設することになつて居る。建物は極小さいものであるが暴風雨其の他の避難に十分なものを建設することになつてゐる。一方觀賞地區は

（一）乘鞍（二）白骨溫泉上高地間（三）上高地（四）常念（五）中房（六）燕（七）白骨溫泉附近に何れも二箇所及槍に三箇所計十七箇所

とし、ベンチ九備へ附近を地均して危險を防止し、登山者に十分な觀賞と休憩をさせる計畫であると云ふ。尙同署では去九月以來上高地の清水屋と五千尺旅館との中間に建坪二十一坪の事業監督所を建設中であつたが、本月初旬竣工したので、明春より同所で一般事業及び高山植物採集の見張をする一面、一般登山者に開放し登山及び避難の便を計る筈である。（大正十二年十二月東京朝日新聞）

○黑部の門戸を開く峽谷鐵道

國立公園の候補地として將た又日本第一の峽谷美として有名な黑部に、其の關門の字奈月まで電氣鐵道が開通したのは、昨年十一月の廿三日である、普通の時なら、多くの登山家や黑部の山水崇拜家に依つてかなり喧傳される筈であつたのが、あの大震火災の結果、一部專門家と地方人士の外には餘り話題にも上らなかつた。併し此の僅な鐵道の開通に依つて、黑部大峽谷の美が漸次紹介されて行くことは注目すべきである。黑部鐵道が最初工事に着手したのは大正十一年四月であつた、北陸線三日市を起點として、宇奈月まで十哩に過ぎないが、更に支線を敷設して泊にも延ずる計畫がある、併し之は直接黑部峽谷の探勝者には關係は少

い、最初に開通したのは三日市、下立間の六哩であるが、下立まで〻はほんとに地方の人々の便利に資する外に特筆すべきことはない、夫れから引續き、愛本を經て宇奈月に至る四哩餘が開通され、兎も角も此の一線だけでは全通といふ形式になつた。愛本には日本三奇橋の一である愛本橋があり、長さ二十五間で、一本の支柱もなく懸崖の下に碧潭を湛へ、橋上にあつて下を覗くと自ら肌に粟を生ぜしめる、世に飛驒の内匠の作と謂へられて居るものである。此の愛本橋から一里近く行くと愛本の温泉がある、温度二百三度、無色透明で、少し鹹く、胃腸病や腺病質のものによいといふ、隨分遠くから湯を引いて居るのだが餘りぬるくなく氣持のよい温度を保つて居り、四圍の風景もよい。此の鐵道が愛本へ通じたことは、温泉好きにも歡迎されやう。元來黑部の沿岸には温泉が非常に多く、上流には有名な黑薙や鐘釣の温泉もある。

宇奈月は烏帽子嶽から流れ出す宇奈月の溪谷が黑部の本流に合する地點にあり、道路もこゝまではどうやら歩行に差支へなき程度に拓かれて居る、土地の人々は更にこれから三里ほど上流に遡り、黑薙川の支流に沿うて左へ黑薙温泉へ出かけるのである。鐘釣温泉は黑薙の方へ行かず、本流の方を更に三里ほど絶壁の中腹や岩角を曲るから、險路三里を進まねばならない、東鐘釣山、西鐘釣山を過ぎると、山谷の間に煙の立登るのが見えるので、戸數だとて僅しかない、更に奥へ進めば祖母谷の温泉があるが、此處は豐富なる水力を利用し、二十萬キロの大電力を開發する爲め、高峰讓吉博士等の東洋アルミといふ會社が手をつけたのが始めである、その後、古河工業の方からも多數の技師が人夫を伴つて上流の探險を企て、之に依つて幾多の隠れた奇勝が紹介されたことがあつた、旅行家の方から見れば、こんなことまで興味中心本位で見るが、實は、之が爲東洋アルミと古河との間に妙な爭ひが起り、水力の權利でかなり揉めたのだといふ、併し今は妥協がついて、東洋アルミは、此の開通を機とし、更にその事業を進めつゝあるといふ話だ、かくの如くして、天下の秘境黑部の門戸はどうかかうか開かれた、處が滑稽なのは、此の影響を受けた温泉で、今までは原始的な、木賃制度で、土地の人と山岳家位しか相手にして居なかつたのが、俄に文明の恩澤に浴して是から多くの都人士を迎へることにならうと急拵への會社まで成立したといふことである。併し開通はほんの玄關の宇奈月までゝある、眞の黑部の峽谷美は寧ろ鐘釣から奥にある。文明の力も、そこまで山水の靈を俗化することは出來ない。（大正十三年二月二十七日都新聞）

○南アルプスで行方不明となる

赤坂區田町城南山岳會理事田中信夫（二五）大學生大塚弘二（二六）の兩氏は去る二十三日南アルプス連峰鳳凰山に登山し、同夜は頂上に露營し、二十四日午前六時出發下山の途中、山梨縣北巨摩郡清哲村字本島より約二十一丁を隔てた森林中に於いて濃霧に遭ひ、疲勞も手傳つて田中氏は其場に卒倒し、大塚氏は救助を求むるため清哲部落に向つた其後で田中氏が蘇生したが、大塚氏は更に其儘姿を現さず、同村青年團其他で行方捜索中であるが三十日朝迄には發見されなかつた。（甲府電話〇大正十二年十二月一

京朝日新聞）

大塚氏の死體發見す　南アルプス鳳凰山で遭難行方不明となつた大塚弘二（二六）の捜索は山梨縣巨摩郡圓野村字圓井役場と青木温泉の人夫及び東京から急行した城南山岳會員等協力積雪と戰ひつゝ續行してゐたが、一日山中で死體となつてゐるのを發見したので一先づ青木温泉に收容し一行は四日歸京する事となつた。大塚氏が死に到つた經路は今日迄不明であつたが、同行した城南山岳會の田中氏が同會に宛て送つた通信に依ると、大塚氏は基督教青年會の山岳會員で、二十五日兩名は鳳凰山中で、猛烈な吹雪に遭ひ、青木温泉の上流で離れ〳〵となり、田中氏は寒氣と飢の爲め雪中に失神昏倒して了つた。翌二十六日田中氏は正氣に返つたが大塚氏の姿は見えず、先に下山したものと想像してその儘歸京して了つたが、廿七日に至り大塚氏の歸京しない事を知り、田中氏は大に驚き再度青木温泉に引返し捜索隊に加はつたものである。因に大塚氏は震災以來芝離宮バラックに住み海軍省經政本部に勤めて居たもので、原籍は靜岡縣榛原郡金谷町二千七番地で、早大で電氣を研究する傍ら海軍省經政本部第一部の製圖に從事してゐた。（十二月三日東京朝日新聞）

案内人なしの登山は危險

南アルプス鳳凰山で遭難した大塚氏の死體捜索に向かつた田中巡査部長は四日夕刻歸來して語る。「大塚氏は觀音嶽の中腹に達したころ大濕へ墜落しあの慘事をまねいたものらしく衣類も死體も瀧壺にこほりついてゐた、遭難の原因は全く案内人なしの冒險が禍をまねいたものである。雪中の南アルプス踏破は極はめて危險であるから充分の用意が必要である」と、（四日甲厯發）（十二月五日東京日々新聞）

○伊藤氏の映畫隊大成功

嚴寒の日本アルプスに映畫撮影の壯擧を敢行しつゝあつた名古屋山岳會家伊藤孝一氏一行は最終の目的地たる藥師岳の絶頂を三度の遭難にも屈せず萬死を賭して四日遂に成功し、尙人跡未踏の黑部渓谷の源を探勝し全部之をフイルムに收めて八日午後六時無事下山した、一行は昨年暮れ積雪少き爲一先づ下山し、一月十日更に此壯途に上つたのであるが、往昔より人力を以ては全然不可能とされてゐた嚴寒に於ける立山山脈の神祕も愈茲に征服する所となり、日本山岳界に特筆すべき一新記錄を殘すこととなつた。（富山特電）（大正十三年二月十日東京朝日新聞）

○榛名山麓の御料林

上毛群馬縣の秀峰榛名山の湖畔なる御料林沼の原の平原を拂下げて東京の芳川寛治氏等は之を別莊地に、伊香保町では遊園地に、地元なる室田町では町有財産に、東京某大學では生徒の運動場に爲すべく計畫して、昨夏以來運動に當つて居るが、群馬縣では之に對し一部のものが利慾に供する事は面白からず、縣に於て之が拂下を受け縣營公園と爲すべく山岡知事は帝室林野管理局に對し運動中であつたが、折衝も相當進んだものゝ如く二十日の臨時縣會終了後縣會議員の協議會を開いて之を發表した。（前橋電話）（大

正十三年一月東京朝日新聞)

○英國の探檢隊今年もエ峰登山を決行

英國のエヴエレスト山探檢隊は本年三月を期してエヴエレスト登山を決行する旨を發表した、そのプロクラムによれば今年の登山隊は三月末に英領印度のダージリンを出發し、昨年の探檢隊の通つたチユンビ谷を辿つてロンブクの谿谷に至る豫定である、ロンブクに到着するのは多分四月末頃になるであらうが、一行は同地に假小屋を建てそれから愈々頂上に登る手管を決定する筈であ[illegible]、隊長は昨年通りブルース少將で今日までに決定した一行の顔觸れはノルトン少佐(副隊長)、ジョージ・レー・マロリー氏、ホワード・ソマーヴエル氏、ノーエル大尉、ジョフレー・ブルース大尉、モーリス大尉等である、右の中ブルース少將、ノルトン少佐及びレー・マロリーの三氏は一昨年の登山隊に加はつて二萬七千呎まで登つた人達である、尙今後の登山隊にはエヌ・イー・オテル氏、ベンドレー・ビータム氏、エー・シー・アーウイン氏、ジエー・ヴイ・ハザード氏、ヒンストン少佐及びイー・オー・シユツペーヤ氏等の新顔も參加するとの事である。(國際ロンドン郵信)(大正十三年二月二十九日)

エヴエレスト探檢隊出發

エヴエレスト探檢隊は探檢隊長ブルース少將の報告によれば諸般の準備を終り、二十六日印度ベンゴール州ダージリンを出發した。(倫敦特派員二十六日發)(大正十三年三月二十八日)(東京朝日新聞)

○大鳴動の後噴煙猛烈

阿蘇山の噴煙は二十日午後三時から俄に激增し、六時頃から大鳴動と共に降灰甚だしく、二十一日朝鳴動は歇んだが噴煙は依然として激しく、當地方面では人心惶々として居る旨宮地警察署から縣警察部へ報告があつた。(熊本特電)(大正十三年三月二十二日東京朝日新聞)

○十七の火山活動

十日ペトロパウロスク發電によれば最近カムチヤツカの噴火山は活動し始め、連日小地震を伴ひ、雪交りの暴風雨と化し、附近の通信機關は破壞され家屋の倒壞されたものが多い、當地方の火山は總計七十箇所で現在活動してゐるものは十七箇所である。(浦潮東方十二日發)(大正十三年三月十三日東京朝日新聞)

○會員通信

△去る廿三日夜行にて遠刈田より青根溫泉を過ぎて峨々溫泉一泊。廿五日藏王山登山、此日は稀なる暴風にて非常なる困難を感じ、漸く上ノ山方面に下り高湯一泊。廿六日は蔵首泊り。廿八日黑澤を登り、黑澤岳の鞍部を過ぎ、羽後の湯俗に出て稻住溫泉に入る、天候頗る惡し。(大正十二年七月廿九日稻住溫泉にて松本善二)

△前略。急に思ひ立つて十月廿九日の夜行列車で博多を立ち、

霧島山への旅に出ました。一行は小生の外に大學昆蟲學教室のメンバー四人でした。

牧園驛から明礬溫泉へ徒歩、十月廿一日は濃霧中を大浪の池迄登り、新湯を經て霧島に下り一泊。十一月一日は霧島から御池を經て高原驛へ出て、夜行にて二日朝博多へ歸りました。

連日雨と霧に惱まされ、山の高所への登行は全然放棄の止むなきに至りましたが、然し思ひ出多い旅を了つて來ました。(大正十二年十一月四日竹内亮)

△去る十日の夜行にて別宮、岩永の二君と共に東京出發、十一十二の兩日にかけ、三峰山の岩壁を研究致し候。十一日は御長屋跡に天幕を張り、荷を輕くして樅現の尾根をのぼり、絶頂より本道を歸り野營、次の日羅風岩の端近き所より八十度の岩壁(礫岩)を攀ぢ、棚の上を尾根の反對側に廻りて、そこのガレーを登り、以後は度々小規模の岩登りをなしつゝ尾根傳ひして一小平地を經、それよりは普通の尾根のぼりにて頂上着。之を荷なし及荷ありの二回試み、はじめは偵察に時間を費して約三時間、二度目は約一時間半かゝり申候。勿論本式にロープをつかひ申候。幸に岩は堅く、近來思ひかけなき壯快なる登山を果し候。但し天候は霧多く候ひき。(大正十二年十一月十五日沼井鐵太郎)

△本誌第十七年第二號磐梯山の記事中、四三頁の終から四行目に、約十九立方里の岩石云々、と記したのは小生の誤記であつたことを心附いたから、更に精確なものを得るまで、此數字を全部取り消して置く。(吉岡八二郎)

會報

○臨時茶話會

昨年九月に開催す可き筈であつた本會小集會は、大震災の爲に自然延期の止むなきに至つたが、其後市内の混雜も次第に緩和されたので、十一月には恒例の小集會を催し得る迄になつた、然し此際小集會よりも寧ろ茶話會を開いて、會員各自の震災當時及其後に於ける安否動靜等を相互に知り合ふやうにした方が宜からうといふことで、在京濱及近郊の會員に通知を發して、十一月十一日午後一時に麴町區清水谷の皆香園に集つて貰ふことにした。尤も多數の罹災會員諸君は出席覺來ないとは承知してゐたが、夫にも拘らず三五の諸君は來會されて、震火災當時の狀況を目擊するやうな談話が交換された。席上吉岡八二郎氏は、來會者の希望により、白峰の頂上であの地震に遭ひ、同夜間の岳と農鳥山との間の野營地から、東北方の地平線上に火光の漲るを望見して、帝都の大火を知り、歸途山民の親切が反て累をなし、其上に交通機關の故障の爲に、非常な迷惑と困難と迂回とを餘儀なくされて、幾日かの後に漸く大井町の自宅に歸られたことを話された。當日の來會者は佐藤文二、鄕郁三郎、吉岡八二郎、森喬、山内淳一、中村常雄、岡野德之助、横山光太郎、本多友司、神宮德壽、馬場忠三郎、野口末延、木村鑛吉、酒井忠一、別所梅之助、辻莊一、松本善二、青木軍二郎、飯塚篤之助、中條常七、五十嵐芳雄、磯貝藤太郎、丸山晩霞、志賀重昂、冠松次郎、槇有恒、烏山悌成、武田久吉、田部重治、高頭仁兵衛、木暮理太郎の三十一氏であつた。

○第二十三回小集會記事

大正十三年二月二十四日午後二時より麴町區紀井町皆香園に於て、槇幹事司會者として開催、左の講演ありたり。

登山用小舍の問題に就て　槇　有恒氏

雪の朝日岳

沼井鐵太郎氏

槇氏は、此題を單に提供する範圍に止めて置いて、今其方針の論斷を下さうとするのではない。然し私等がこれに就て考へなければならぬ必要は、我國の登山の現狀を見る時に直に了解が出來る。私の理想としては何等登山用の小舍なき原始的な山岳や溪谷を歩きたいことは申す迄もないが、遺憾ながら我國の山岳は、無謀な登山に依つて、其自然の具ふる處を荒廢し得る程度の高さと廣さと容易さとを持つてゐる、從つて登山者のため年毎に伐られて燃料とせらるゝ植物を一時も早く保護する必要、或は露營地點の清潔、又は登山者の增加と共に之に伴ふ自然的無計畫不完全な營利業者の小舍設置、若しくは冬季春季登山の傾向に伴ふ小舍の必要等の點を考へたならば、此問題の等閑に附す可きものでないことを、富士、槍澤等の例を擧げて論じ、夫より瑞西、獨、墺山岳會の小舍統一の例を述べ、出來得べくんば我國に於ても登山用小舍設置に際しては、各關係管轄官廳、各地の山岳會等の間に意志の連絡を取り、設立の位置、設備、使用法等に就て一貫せる統一ありたきこと、之に反して餘りに各會が分立割據せるはとらざる所なりとし、斯くして若し一定の考の下に小舍が設置せらるれば、最小數と必要の最小限度に於て、即ち山岳を傷くることを最も少くして、燃料、防寒、休憩、避難等の諸問題が解決せらるゝことゝ思ふと說き、次に參考としてベッカー氏の瑞西山岳會年報(一八八六年)に揭載せる「登山用小舍の設計」に據り

一、小舍の位置　二、建築方法　三、建築材料　四、大さ　五、設備　六、建築費

の六項に亘りて細說された。

沼井氏の講演は大正十三年二月十日より四日間に亘つて、會員別宮貞俊氏と共に羽越境に近き大朝日岳の登攀を企てられたスキー旅行の梗概を述べられたもので、先づ奥羽本線の支線なる長井線の鮎貝から朝日鑛泉に至る冬季の道は、頭殿(トドノ)山の尾根を傳ふものであるが、それが意外にも狹い尖峯の連續であることに一驚されたことから說き起し、二日目は登路の下調べとして、朝日俣澤と黑

俱澤との合流點まで遡り、人夫を使用して三ケ所に架橋し、三日目に快晴に乘じて中ツル（中峯）を大朝日に向ひ、尾根の上部はピッケルとクランポンとの助によりて初朝日より大朝日の絶頂間近く進んだ時、吹雪となつたので終に目的を果さず、往路を辿りて引返されたることを話され、序に該地方の雪及山に關する興味ある事實に就て說明を試みられた。

來會者は、高畑棟材、酒井忠一、磯貝藤太郎、飯塚篤之助、小松喜一、別宮貞俊、岩永良三、古谷孝一、辻莊一、野口末延、三輪勳、本多支司、山田應水、小倉仲吉、横山光太郎、松本善二、小瀨孫作、岩永信雄、吉田直吉、安藝皎一、沼井鐵太郎、青木軍二郎、木村鑛吉、冠松次郎、木暮理太郎、横有恒、高田達也、高頭仁兵衛、鳥山悌成、武田久吉、梅澤親光、高野鷹藏の三十二氏にして、會員外來會者一名なりき。

○會務報告

大正十二年十一月十一日午前十時、清水谷皆香園に於て評議員會開催、左の件を協議す。

一、幹事の缺員は當分現存幹事に於て兼務すること。一、會員章再貸與のこと。一、日本山岳會を法人團體になすこと。

（出席評議員）冠、木暮、横、鳥山、高頭、高田（委任）、辻本、武田、田部。

此日入會を許されたるもの左の如し、

小松喜一、成瀨岩雄、堀内博、車谷新一、辻達治。

大正十三年二月二十四日午前十時、右同所に於て幹事會を開き、左の事項を附議す。

一、本會第十七回大會開催の件

（出席幹事）冠、木暮、横、高田、高頭、鳥山。

（常任評議員）高野。

此日左の十名入會を許可せらる。

深山東一郎、西田誠一、大山爲三郎、中村兩造、山田光男、水谷陳、帝大スキー山岳部代表者末弘穆太郎、原田道男、永見政吉、山根歡治。

○名譽會員城氏の訃報

本會發起者の一人にして名譽會員たる城數馬氏は、高等覆審法院長として朝鮮京城に在職中なりしが、病の爲本年二月薨去されたる旨通知に接し

たり、氏は夙に山草家として其名を知られ、且知人の間に高山狂を以て呼ばれたる程、早く既に明治二十八九年頃より各地の諸高山に登られたるが、明治三十八年に至り、偶山岳會設立の議起るや、發起人として大に盡力する所あり、事務所の如きも日本橋室町なる氏の法律事務所内に置きて、四十一年控訴院長として朝鮮京城に赴任するまで會務を取扱はれたり。大正十年名譽會員に推薦さる。

○本會規則拔萃（大正十二年三月改正）

第二條　本會ハ山岳ニ關スル研究ヲナスヲ以テ目的トス

第三條　本會ハ第二條ノ主旨ニ基キ機關雜誌「山岳」ヲ發行ス、又時宜ニヨリ別ニ臨時又ハ定時ノ出版物ヲ發行スルコトアルヘシ

第五條　本會ハ會長ヲ戴カズ幹事若干名ヲ置キ一切ノ會務ヲ處理セシム

第六條　本會ハ別ニ評議員ヲ置キ重要ナル會務ニ參與セシム

第十條　本會會員ヲ別チテ正會員及ビ名譽會員トス、名譽會員ハ幹事會ノ決議ニヨリテ推薦セラルヽモノトス

第十一條　正會員タラント欲スル者ハ會員三名ノ紹介ヲ以テ住所姓名年齢及ビ職業ヲ記シタル申込書ヲ事務所ニ送附スベシ、但シ紹介者ノ一名ハ本會評議員タルヲ要ス（入會申込用紙ハ事務所ニ備付ケアリ）

第十二條　入會ノ許否ハ幹事會ノ決議ニヨルモノトス

第十三條　入會許可ノ通知ニ接シタル者ハ直ニ入會金五圓ニ會費ヲ添ヘ拂込マル可シ

第十四條　正會員ハ會費年金參圓ヲ毎年二月末日迄ニ納付ス可キモノトス、三月一日以後ノ納付者ハ特別取扱手數料トシテ金五拾錢ヲ附加シテ拂込マル可ク、尚ホ三月末日迄ニ納付セザル者ハ之ヲ除名ス可シ（以下略）

現任幹事（八名）

藤島敦男　冠松次郎　木暮理太郎　槇有恒
六鶏保　高田達也　高頭仁兵衛　鳥山悌成

評議員（十八名）

小島久太（在桑港）武田久吉　梅澤親光　高野鷹藏
近藤茂吉　中村清太郎　三枝守博　辻本滿丸
田部重治　山川默

及び現任幹事八名

○投稿規定

一、會員は勿論會員以外の何人も投稿隨意のこと

一、用紙は半紙又は半紙半枚大、天地左右ゆとり、毎紙片面のみに字體明瞭に認め、各行二十二字詰とし、毎紙同一行數のこと

一、、。「」（）等は各一字畫宛とし、行を更むる時は一字下げのこと

一、地名には片假名を振り、漢字不明にして宛字をなす時は其旨を括弧内に明記す可きこと

一、原稿は必ず左記宛て送附のこと

東京市本郷區駒込萍蓬町三十一番地「山岳」編輯所

尚編輯に關する用件は總て前記宛御照會のこと、殊に插圖寫眞等のある原稿は其の調製方印刷方につき一應御相談あらば幸なり（スケッチは複製の際誤記脱漏等の憂あるを以て豫め本誌面に適當せる大さに調製あらんことを望む）

山岳第十一年總目錄（大正五年度）

表紙（第一號（秩父號）富田溪仙氏筆
第二號 同 同 上上
第三號）

卷頭畫　三窓の雲溪（第二號）　茨木猪之吉氏筆

挿畫

○白岩三角點より和名倉山（白石山）を超えて甲武信岳を望む○雲取山頂より大洞山を望む○三峰神宮より雲取及白岩の二山を望む○一五二三米の峰より南方に白岩山を望む○雲取山頂より西望（第一號）

○山に登る人三人○エリオットウエンクリよりフインシュテラールホルンを望む○シュレックホルンのクーロアール○遭難の後○ヒルテルフインゲンよりニーセンを望む○トウーネルゼーの夕（ベヤテンブーフトよりシュトックホルンを望む）○ブリュームリスアルプホルン○エッシネンゼー○長次郎澤にて○つるギ澤にて○女學生の登山振り（第二號）

○劍ケ峯より見たる武尊山。武尊山頂上（東南より）。前武尊より見たる燧至佛平ケ岳○前穂高岳より奥穂高岳○藥師岳の一角より槍ケ岳穂高岳を望む○八島ケ池採集綠藻圖○東京市内及近郊所望二千米突以上山岳高度表○しらたまのき○シルビヤ山頂。大鞍尖山頂の奇巖。南投社シカヨウ社より見たるシルビヤ山○ Anubis Alpium とタツタサウ○雪の伊吹山○ミチノクコザクラとカツコウサウ○トガクシショウマとシラネアフヒ（第三號）

本欄

	執筆	頁	通シ頁
秩父の旅	南日重治	一	一
奥秩父の山旅日記	木暮理太郎	三八	三八
三峰より白岩及雲取越え	辻本滿丸	八二	八二
甲武信岳と奥千丈岳	森喬	一	一
武藏風志山岳篇	河田黑	九二	九二
岩井谷と藥師ケ岳	冠松次郎	一一〇	一〇〇
尾瀬の事ども（附至佛山）	沼井鐵太郎	二	二六五
日光遊行雜記	武田久吉	一七	二八一
霧島の山々	明石國助	二八	二九二
槍ケ岳から日本海まで	田部重治	四八	三一二
スウイス日記	辻村伊助	六〇	三二四
黑部川奥の山旅（中編）	木暮理太郎	八三	三四七
武尊山	日高信六郎	一三五	三九九
槍より穂高へ	伴野清	一	五二一
霧ケ峯と鏡ケ池及八島ケ池	武田久吉	一一	五三一
千梃木山	守島伍郎	三一	五五一
布哇キラウエヤ火山を見るの記	國府精一	四二	五六二
秋信	冠松次郎	五三	五七三
雪の熏那山へ	長谷川鬱峯	六四	五八四
大雪山登山記	小泉秀雄	八一	六〇一
高山植物檢索便覽（一）	武田久吉	八八	六〇八
		一二四	六四四

雜錄

○奥秩父の登山に關する注意（木暮）○笛吹川の上流（東澤と西澤）（木暮）○秩父の印象（南日）○秩父旅行の思ひ出（南日）○武奈岳の裏山道に就て（黑百合生）○劔岳に就て（伊藤德之助）○ハヒマツの生長の劇合（H、T）○燒岳山麓の原生林保護（鵜殿）○穂高の三山説に就て（鵜殿正雄）○雲に對する疑問（山本德三郎）○山腹傾斜地の濕氣に就て（山本德三郎）○再び前の篇に答へて（ツルモドキ生）○L'Amateur の科學（森の人）○新著紹介「霧の王國（一）」「日本アルプス登山案内」「信濃鐵道案内」「黑部峽谷」「登山の栞」

第一號　自一二九　至一八五　一二九　一八五

○淺間山より男體山まで（木暮）○嘉陵記行（木暮）○遭難記（中村孝三）○秩父遭難に就て（木暮）○秩父遭難の原因（甲藤新）○出案内者に對する批難に就て所感（はひまつ）○立山溫泉の新設備（岳雄）○伊藤德之助君（木暮）○圖書紹介（日光の栞）（T、T）○各地の山岳會彙報○大阪府立夕陽丘高等女學校登山部近況（竹下英一、朝輝記太郎）

第二號　自　一七〇　四三四
至　二四四　五〇八

○後立山は鹿島槍ヶ岳に非ざる乎（木暮）○八ヶ岳の北（笹湯生）○祖父蛭ヶ岳（裕澤親光）○東京市内所望の山岳高度表に就て（木暮）○黑部峽谷の春（吉澤庄作）○しらたまのき（武田）○日本の山地に見るオダマキの種類（T・T）○臺灣の高山（野呂寧）○菅沼なる名稱に就て（武田）○山中の傳說（山本德三郎）○空と雲（山本德三郎）○机上談山（笹湯生）○信越線附近スキー練習地の主なるものに就て（外山高一）○白馬詠草（古家實三）○大正五年七月はかり越中國立山にのぼりけるときによめる（田口虎之助）○圖書紹介「高山植物の研究」「高山植物」日本アルプス縱斷記」「信濃の山」「鹿澤溫泉と高山植物」○各地の山岳會彙報

第三號　自　一三六　六五六
至　二二〇　七四〇

雜報

○東久邇宮殿下日本アルプスを御踏破あらせらる○秩父の慘事○秩父の慘事餘錄○落合海軍屬の死

第一號　自　一八六　一八六
至　二一三　二一三

○燒岳と淺間山○御嶽山○八ヶ岳の高山植物採取と取締○赤城山中の遭難○涼榻閑話

第二號　自　二四五　五〇九
至　二五〇　五一四

○中學生行方不明となる○寒中淺間登山○マラソン登山を恥ぢよ○天下の名山大盛原山の破壞せられんことを惜みて志士仁人に檄す○比叡山の天幕討訪問記○山の傳說○山へ山へ○乘馬富士登山隊○女學生の登山熱旺んなり○白馬山雪深し○小黑部鑛山に郵便局○武甲山中の慘事○日本アルプス山岳戰記○谷間へ墜落して慘死を遂ぐ

第三號　自　二二一　七四一
至　二四一　七六一

會報

○日本山岳會第九大會之記○名古屋の有志晩餐會○名古屋の山岳會○神戸講演會の記○第十六回有志岳魂餐會記事○會員芝川又之助君の死を悼む○會員登山報○編輯係より○寄贈○新入會者○退會及除名者

第一號　自　二一四　二一四
至　二三四　二三四

○信濃鐵道割引乘車券發賣の事○山岳寫眞展覽會○會員登山報○高山深谷第八輯の豫約募集○第九回大會豫告○編輯係より○新入會者

第二號　自　二五一　五一五
至　二五六　五二〇

○幹事の改選と新任○第十回大會の記○名古屋に於ける山岳講演會○豐橋市に於ける山岳講演會○横濱市に於ける山岳展覽講演會○會員登山報○登山の注意の頒布○寄附二件○會員の著作○會員石崎光瑤氏印度より歸る○幹事中村清太郎會員加賀正太郎兩氏の外遊○高頭高野兩幹事慰勞會記事○雜誌の廻る入言ひわけ

第三號　自　二四二　七六二
至　二五八　七七八

附錄

日本に於ける氷河問題　大關久五郎　第一號　自二三五　至二四四
マッターホルン最初の登攀に就て（圖版二）　岩村圓　同上　自二四四　至二六三
會員名簿（第一號別冊）

山岳第十二年總目錄（大正六年度）

表紙（第一號　中村清太郎氏筆
　　第二、三號　茨木猪之吉氏筆）

圖版

○雪溪仰望（小黑部大窓）○峽谷に臨む山（黑部谷より百貫山を仰ぐ）○峽谷の底（黑部川鐘釣上流の一部）○高谷野地の東隅より其一部と霧に蔽はれたる火打火山を望む○ほていらん（秩父十文字峠產）○あかもの

（第一號）

○地圖第一「樺太・北海道・本州地質地形系統比較關係圖」○地圖第二「北海道山脈明細圖」○地圖第三「北海道の地學的成立圖」○地圖第四「北海中央高地內地脊圖」○附圖「北海中央高地地方地形詳圖」

（第二、三號）

本欄

		號	頁	通シ頁
黑部川峽谷の話	中村清太郎	一	一	一
火打山と燒山	大島永明・田中薫	一	四二	四二
霞澤岳に登る	中村直男	一	五八	五八
白馬岳より越中小川溫泉に出るの記	鈴木益三	一	六八	六八
山の生ひ立ち	辻村太郎	一	九四	九四
高山植物の研究	武田久吉	一	九七	九七
北海道中央高地の地學的研究	小泉秀雄	二・三	一	二〇五

雜錄

○登山者の德義（木暮）○飛騨山脈と皺曲（T・T）○八ケ峰の斷裂に就て（木暮）○サークの二三の性質（T・T）○あかもの（武田）○ほていらん（武田）○甲州七面山の「御神木」と「萬歲草」（武田）○鮫ケ岳併折方面の登路案內（冠）○根石岳の登路（筌魚生）○針木峠の

◎第十二年總目錄　一

林道（木暮）○黑部谷の射撃演習（木暮）○雪の南アルプス觀望臺としての伊豆修善寺（佐伯）○大隅高隈山登山談（辻莊一）○黑姬山傳說（田中蘭）○科學と詩（山本德三郎）○山岳氣分（山本德三郎）○立山詠草（澁柿帶麿）○嘉門治を憶ふ（辻村）○大町登山案內者組合の設立○机上談山（駝鳥生・あづさ）○各地山岳會彙報○圖書紹介○山岳彙報　第一號　自　一一〇九　至　一一七九

雜報

○東久邇宮殿下白馬岳御登山○燕岳登山者露る○上高地の害蟲○單身前穗高岳の嶮を攀づ○白馬岳雜記○御嶽山雜記○東西婦人記者の穗高登り○雷鳥の巢○岳の雪　第一號　自　一一八〇　至　一一九一

會報

○第十一回大會豫告○山岳畫展覽會に就て作家及び所藏家に○會員登山報○第十八回有志晩餐會記事○第一回在濱會員有志晩餐會○秋田縣小坂町に於ける山岳講演會○學習院輔仁會山岳幻燈會○外人會員交歡會○上條嘉門治の死○會員名簿○大正六年寄贈及交換圖書○圖版解說○投稿規定　第一號　自　一九二二　至　二〇三二

○日本山岳會小集會の開設○第十一回日本山岳會大會の記○山岳畫展覽會出品者諸君及び同會の爲め厚意と便宜を附與せられたる諸君に感謝す○第十九回日本山岳會有志晩餐會○第二回及第三回在濱會員有志晩餐會○名古屋に於ける第三回山岳講演會○小田原中學校に於ける山岳幻燈講演會○慶應義塾山岳會○東京基督教青年會體育部山岳會講演會○山形山岳研究會○高山深谷第九輯發行期について○名譽會員ウエストン氏の近業○會員消息○山岳彙報○新入會者　第二、三號　自　二四九　四五三　至　二六二　四六六

山岳第十三年總目錄（大正七年度）

表紙（第一號　第二號　第三號）　中村清太郎氏圖案
同　上

圖版

空瀑。玉簾瀑。丁子瀑。大瀑。胎内瀑。裏見瀑の舊態○粘澤の瀑。七瀑。唐瀑。慈觀の瀑の舊態○刈田岳。寒の河原西望。雁戸山。熊野岳○八峰つゞきのキレト。八峰のキレト

（第一號）

○ロホナガールの頂上の東望○ロホナガールの積石○ロホナガールのサーカス○デイー川の水源○ケールンゴルム山脈の一部○カーランダー・クレーク附近○ベン・レディ

（第二號）

○岩菅山頂より裏岩菅を望む。四方の山麓より望める岩菅山及び裏岩菅山○岩菅山登路の一部平穩堰沿岸の濶葉樹林。南面の鞍部ノッキリより仰げる岩菅山嶺。東麓北麓清水の小屋場より岩菅山及び裏岩菅山。岩菅山梯子澤の二重瀑○小佛峠の舊觀。和田峠より運行峰及鹽山を望む

（第三號）

本欄

		號	頁	通シテ頁
劒越え	冠　松次郎	一	一	一
日光山の瀑布	武田久吉	一	一七	一七
御前屏風紀行	沼井鐵太郎	一	三九	三九
八峰のギヤップ	山口末次郎・朝輝記太留	一	五二	五二
「だいうだん」の惠那山	西園寺萇公	二	一	一四一
ハイランド	辻村伊助	二	一二	一五二
信州岩菅山	辻本滿丸	三	一	二八七
九州の山々	八代　準	三	一一	二九七
丹澤山塊	戸澤英一・藤島敏男	三	三八	三二四
駒岳仙丈岳及鳳凰山塊	柳　直次郎	三	四九	三三五
雁ケ腹摺考	武田久吉	三	六七	三五三

雜錄

○山の物理學（伊藤德之助）○山の物理學補遺（伊藤德之助）○原口林學士の「赤石白峯山脈縱横記」を讀む（木暮）○高山植物雜記（武田久吉）○登山案内者（百瀬。雄山。武田）○火男火寶（大河内四磨）○近江國山岳登路表（馬場）○落合海軍屬死體發見の顚末（寶閣、小島、小寺）

第一號　自　六二
至　一一〇　一一六二

◎第十三年綴目錄

○立山東面の登山路に就て（冠）○大日岳早乙女岳奥大日岳登路（冠）○高山植物雜記（武田久吉）○L'Amiteur の科學（森の人）○丹澤山塊（きた生）○仙丈岳より鹽見まで（中條）○吾邦最初の登山錄道（たゝた）○山ばなし（高頌）○登山案內者（百瀨。武田。沼井）○山岳彙報（飯柴）

第二號　自　七四　二一四
　　至　一二五　二六三

○日光湯川の小瀧（八代）○白崩山の古道に就て（梅澤親光）○北相の一角（武田久吉）○机上談山（梅澤）○高山植物雜記（武田久吉）○山岳彙報（中村。松本自動車運輸株式會社）○登山案內者「北城村」「烏川口」「有明口」「柳澤口」

第三號　自　七四　三六〇
　　至　一三〇　四一六

雜　法

○朝鮮王白馬へ○白馬山今年の初登山○加賀の白山山麓より○上高地溫泉場より○今年の富士山の物價○大和大峯山の昨今○伯耆の大山登り○日本アルプス北部の登山道○今夏の霧島○中房溫泉より○槍ヶ岳を中心とせる登山路○海拔八千尺の冠帽峰○日本アルプスの婦人學校○アルプス學會近く設立されん○上高地○山を秘めよ○山に行く心○山嶽美保護施設○種蒔翁○登山には酸素袋○藏王山の參事

第一號　自　一一一　一一一
　　至　一二五　一二五

第二號　自　一二六　二六四
　　至　一四〇　二七八

○富士登山の魁○日本アルプス初登山○無常念方面先登登山一行無事下山す○日本アルプスに石室を十箇所新設提案○山上の物價○伊吹山頂の觀測所

第三號　自　一三一　四一七
　　至　一三六　四二二

會　報

○本會々則一部變更○第一回小集會○神奈川縣横濱市役所主催山岳講演會○上智大學山岳會講演會○會員通信○福地信世氏の來狀○立山劔岳附近五萬分一模型圖頒布○外國文欄の創設○新入會者

第一號　自　一二六　一二六
　　至　一四〇　一四〇

○第十回大會豫告○第三回小集會○第廿回有志晩餐會○會員通信○星忠芳君逝く○木本光三郎氏逝く○寺崎廣業氏逝く○會務報告○寄贈圖書

第二號　自　一四一　二七九
　　至　一四八　二八六

○本會規則の改正○第十二回大會記事○第四回小集會○第廿一回有志晩餐會○大阪に於ける山の會○信濃山岳會と日本アルプス會成立○登山消息○會務報告

第三號　自　一三七　四二三
　　至　一五三　四三九

附錄英文欄

第一號、第二號、第三號（合七十二頁、圖版二）

山岳第十四年總目錄（大正八年度）

表紙（第一號　第二號　第三號）　中村清太郎氏圖案　同　同上

本欄

		號	頁	通シ頁
信州笠ヶ岳と横手山	辻本滿丸	一	一	一
九州旅日記の中より	吉岡八二郎	一	一〇	一〇
白砂登山記	森（日高信六郎）喬	一	三四	三四
山嶽諸相	辻村太郎	一	四四	四四
高瀨川湯俣より上河内に出る記	濱谷泰次郎	二	一	一四三
雪の乘鞍岳	小野隆義	二	一三	一五五
春の上河内へ	板倉勝宣	二	二一	一六三
針ノ木峠を經て劔岳に登る	村瀨圭	二	二七	一六九
石狩川上流の旅日記より	竹内亮	二	四二	一八四
吉野川水源地大臺ヶ原山北麓	宮田琴治	三	一	二七五
黑部の秋	廣瀨壽雄	三	二〇	二九四
高處の氣象現象に就て	藤原咲平	三	五〇	三二四

圖版

○萬座峠より望める笠ヶ岳。笠ヶ岳頂上の神祠。澁温泉寺附近よりの東南望。硯川附近より望める横手山。硯川附近より見たる笠ヶ岳○澁峠の山道より望める笠ヶ岳。白根山より上信國境の山脈を距て丶笠ヶ岳及坊平山を望む。白根山水釜を距て丶横手山を望む。澁峠西端約二千米の地點より望める笠ヶ岳及小笠○野反池東北岸より辨天山遠望。ネンバ坂より南望。辨天山の鞍部より北に野反池を望む。野反池南端より北望。同上。

（第一號）

○湯俣水俣の出合○硫黄澤乘越より西北望。湯俣に於ける湯の花○大岳山頂より望める御前山。御前山の神祠。御前山頂より望める大岳山。

（第二號）

○大臺ヶ原山巓牛石ヶ原。大臺原山中の瀑。大臺原山巓正木ヶ原○刈田岳頂上より御釜を望む。五月の御前岳。御前岳賽の磧上部の一溪より水引入道を望む○會津駒ヶ岳中腹より望める燧ヶ岳。同上稍上部より燧ヶ岳、大津岐峠、景鶴山を望む。會津駒ヶ岳中腹より同山の一支峰を望む。

（第三號）

雜錄

○神戸岩と御前山（武田久吉）○一二山湖の名稱（武田久吉）○コンバの意義（武田）○四阿山上州方面の登路（武田）○萬田山卑考（武田）○伊豆の大室山（武田）○登山案内者「駒ヶ岳强力組合」「甲斐柳澤」○山岳圖書批評「白馬岳登山案内」

第一號　自　八五　至　一一九　一一九　八五

○神戸岩と御前山（武田久吉）○天然林保護に就て（古家實三）○雛

山

鶏峠（武田久吉）○初冬の赤城山（中村直男）○顯見ヶ嶽なる名稱に就て（武田久吉）○地形圖に就て（梅澤親光）○二合半坂（武田久吉）○山の讃歌（廣瀨壽雄）○机上談山（聒々兒）○諸高山の登山人員に就て（鶏殿正雄）

第二號　自　一一七〇　二一一二
　　至　一一五　二五七

○仙臺附近の山々（沼井鐵太郎）○燒山より丹澤山塊縱走（松本善二）○會津駒ヶ岳（戸澤英一）○岩菅山に關する一二件（辻本）○登山案內者「奈川口」○山嶽圖書批評「登山必携山嶽めぐり」

第三號　自　五七　三三一
　　至　一〇六　三八〇

雜報

○立山頂上の氣象觀測○北アルプスの湖沼調査○石室十ヶ所位置決定○阿蘇山噴火○伊豆大島三原山噴火○燒ヶ岳噴火○砲兵中尉行方不明となる○富士山の初雪○雪來る○會員通信

第一號　自　一二〇　一二〇
　　至　一二八　一二八

○天然記念物保存○爺岳石室竣工○岩菅岩室閉鎖○四高山岳會○山岳寫眞頒布○會員通信

第二號　自　一一六　二五八
　　至　一二四　二六六

○今年は岳に雪が少ない○燒山噴煙○高瀨川の水色變ず○白骨溫泉震災○有明口及奈川口の人夫賃と物價○登高行○會員通信

第三號　自　一〇七　三八一
　　至　一一一　三八五

岳

會報

○事務所の移轉○小集會規定の變更○會員章の變更○會員章貸與及び再貸與規定○不在會員規定○會費拂込に關する注意○會費の改算に就て○第五回小集會記事○第六回小集會記事○幹事改選に就て○會務報告○會員の訃報○退會者○會籍削除○交換及寄贈圖書目○會員名簿○規則の正誤○本會規則拔萃○投稿規定

第一號　自　一二九　一二九
　　至　一四二　一四二

○新會員章に就て○會員章番號割當につきて○會員名簿○入會申込者及び紹介者に告ぐ○會費領收報告に就て○第七回小集會記事○萬國山岳大會○會務報告○交換及び寄贈圖書○本會規則拔萃○投稿規定○第十三回大會豫告

第二號　自　一二五　二六七
　　至　一三二　二七四

○圖體の入會に關する規定○會員章の引換に就て○會費拂込に就て○第八回小集會記事○會務報告○會員名簿の訂正及追加○死亡○會籍削除○無効會員章番號○交換及び寄贈圖書目○本會規則拔萃○投稿規定

第三號　自　一一二　三八六
　　至　一一八　三九二

附錄英文欄

第一號、第二號、第三號（合三九頁）

山岳第十五年總目錄（大正九年度）

表紙（第一號　第二號　第三號）　中村清太郎氏圖案　同　同　上上

本欄

多摩川相模川の分水山脈　武田久吉　一號　一頁　通シ頁一
大町より下廊下へ　沼井鐵太郎　一　二四　二四
大武川より三峰川まで　柳直次郎　一　七一　七一
西澤、國師岳、東澤　冠松次郎　二　一　一二〇
臺灣中央山脈横斷記　濱谷泰次郎　二　一三　一三二
秩父行　田部重治　二　三四　一五三
三峠山　又木周夫　二　四三　一六二
甲谷陀より金剛寶土及サンダクフへ　石崎光瑤　三　一　二三〇
冬の鈴谷山　六鹿一彦　三　一八　二四七
瓜哇メラバブ登山記　武田信　三　三二　二六一

圖版

○黑部川（御前澤の合流點附近）○黑部川（御前澤と御山澤との間）
○間の岳北方の高所より北望

（第一號）

○濁水溪の上流○尾上駐在所より見たる能高山と花蓮港木瓜溪○西方より見たる三峠山最高峰○三峠山の最高峰

（第二號）

○トンクル附近溪流の結氷○サンダクフ附近の樹氷○北より望める鈴谷山主峯と山麓より望める鈴谷山○長次郎谷の雪溪。蓮華岳中腹より針木岳及スバリ岳を望む。針木岳より立山、別山、劔岳を望む。劔岳頂上附近

（第三號）

雜錄

○大門山（廣瀨壽雄）○七倉岳と不動堀澤岳（木暮）○河の右岸左岸に就て（木暮）

第一號　自　九七　至　一〇六

○丹澤山塊に關する資料（武田久吉）○釜澤行（木暮理太郎）○河岸

第一號　自　九七　至　一〇六

の左右と河堤の内外及雲の表裏（山木德三郎）○黑部峽谷の步道（木暮）○コロラド州内の高峰（H・T）○登山案内者「平穩村案内人組合」

第二號　自　五三　一七二　至　九四　二一三

○雛鶴峠道記（武田久吉）○樽前山の近況及支笏湖（竹内亮）○森林とスキーと冬の登山（加納一郎）○女子飯岳登山記（竹内鳳次郎）

第三號　自　五六　二八五　至　九一　三二〇

雜　報

○樽前山爆發す○富士登山者三名行衞不明○富士山の强風雨○白山登山者暴風雨中遭難○會員通信

第一號　自　一一〇七　一一〇七　至　一一二　一一二

○朝香宮殿下御登山○上高地の大荒れ○鷲島山上に大競艇所○小倉村登山口○山小屋閉鎖期○各高山の登山客○北海道の初雪○富士の初雪○大阪高商山岳會○會員通信

第二號　自　九五　二一四　至　一〇四　二二三

○槍岳新登山路○淺間登山道改造○北海道山信○淺間山爆發○淺間山爆發調査○淺間山の噴出物研究○淺間復爆發○豪濤の初雪○會員通信

第三號　自　一九二　三二一　至　一一一　三四二

會　報

○第十三回大會記事○第九回小集會記事○會務報告○會員の住所移轉○新入會者○會員の計報○無効會員章番號○會籍削除○交換及び寄贈圖書○本會規則拔萃

第一號　自　一一三　一一三　至　一一九　一一九

○本會規則の變更○本會規則の變更に就て○警告○第十回小集會記事○會務報告○新入會員○交換及寄贈圖書○本會規則○投稿規定

第二號　自　一〇五　二二四　至　一一〇　二二九

○第十一回小集會記事○第十二回小集會記事○會務報告○新入會員○會員住所移轉○退會者及び死亡者○交換及寄贈圖書○本會規則拔萃○投稿規定

第三號　自　一一四　三四三　至　一二〇　三四九

附　錄　英文欄

第一號、第二號、第三號（合三七頁。圖版一）

山岳第十六年總目錄（大正十年度）

表紙　第一號　茨木猪之吉氏圖案
　　第二號　同

本欄

		號	頁	通シ頁
山と日本人と	別所梅之助	一	一	一
春の飛騨山脈越え	廣瀨壽雄	一	一七	一七
下廊下の記	冠　松次郎	一	四三	四三
スキー登山術	六鹿一彦	二	一	一一四
白髮山登山記	吉永虎馬	二	三二	一四五
冬の赤城山へ	黑田孝雄	二	三七	一五〇
上越境の山旅	藤島敏男（森喬）	三	一	一九四
臭海山紀行	木暮理太郎	三	二〇	二一三
晩春の神流川上流へ	高畑棟材	三	三四	二二七
秋の鬼怒沼	木暮理太郎	三	五七	二五〇
春の山旅	藤島敏男	三	七六	二六九
秋の四阿山	鵜殿正雄	三	八七	二八〇
黑岩山を探る	沼井鐵太郎	三	九六	二八九
利根川水源地の山	木暮理太郎	二	一一三	三〇六

圖版

○地藏岳三角點より白峰三山を望む○切合附近より望める大日岳。地藏山頂より飯豐本山・草履塚・種蒔山等を望む○種蒔より飯豐本山及草履塚を望む。御秘所の下段。飯豐山頂より御四方面を望む

（第一號）

○中山峠への道にて○黑橋より中山への道と中山峠傍近○高見石より西北望○高見石より白駒ノ池。新雪の賽ノ河原

（第二號）

○矢場より見たる仙ノ倉山と萬太郎山○三國山より大源太山及仙ノ倉山を望む○谷川村附近の丘上より谷川富士を望む○臭海山三角點より見たる西峰及武尊山○鬼怒沼より燧及袴腰の二山を望む。鬼怒沼より南東望○寺小屋の峰より岩菅山を望む○北より仰げる赤石山○野反池○越後澤山より荒澤、兎、丹後の三山を望む○利根川水源をなせる大殘雪を隔てゝ中、駒、小兎の諸山を望む

（第三號）

雜錄

○飯豐山御秘所の下段（辻本）○立山と劔岳に就て（鵜殿）○高山薬類雜記（笹岡久彥）○山岳林の趣味的方面（山本德三郎）○恩若峰と源次郎岳（白然）○鼠鼠談山（木暮）○岩菅山の登路（藤島敏男）○日本アルプス雜詠（古家實三）○アルプス歌卷（横山光太郎）○山岳圖書批評「あの山この山」

第一號　自　六七　六七
　　至　九七　九七

○玉川溪谷の案内者に就て（沼井鐵太郎）○美ヶ原（木暮）○日本百富士考（中村直男）○十和田湖に遊びける時に（田口虎之助）○高見石と白駒ノ池（武田久吉）○甲斐駒ヶ嶽の新登路（T、T）

第二號・自　四七　一六〇
至　六四　一七七

○寶川を溯つて笠ヶ岳に登る（武田久吉）○四阿山に就て（藤島敏男）○花敷溫泉より四萬へ（木暮）○利根川上流地方の方言二三（武田）○古圖の信じ得可き程度（木暮）○庚申山と阿世潟峠（鄕郁三郎）○藤原より武尊山への登路（武田）○上州の古圖と山名（木暮）○玉原越（武田）

第三號　自　一六八　三六一
至　二一二　四〇五

雜　報

○林道六萬間○日本アルプス公園地○淺間山爆發○夏期日本アルプスの氣溫○登高行○廣島山岳同好會○奈川口本年の人夫賃及物價○モン・ブランの頂上崩る○エヴェレスト山探險隊○會員通信

第一號　自　九八　九八
至　一〇七　一〇七

○淺間山の爆發○樽前山の大噴火○里流山の爆發○越中山岳會成る○新刊圖書紹介「大和アルプス大臺原山」「山の幸」（木暮）○會員通信

第二號　自　六五　一七八
至　七五　一八八

○淺間山爆發○四阿山て小學生の遭難○上越線に東洋一の大隧道○會員通信

第三號　自　二一三　四〇六
至　二二〇　四一三

會　報

○第十三回小集會記事○第十四回大會記事○第十四回小集會記事○會務報告○新入會員○會員住所移轉○退會及死亡者○無効會員章番號○交換及寄贈圖書○本會規則拔萃○投稿規定

第一號　自　一〇八　一〇八
至　一一三　一一三

○第十五回小集會記事○第十六回小集會記事○會務報告○本會規則改訂○交換及寄贈圖書○本會員名簿○本會規則○投稿規定

第二號　自　七六　一八九
至　八〇　一九三

○第十七回小集會記事○第十五回大會記事○第十八回小集會記事○第十九回小集會記事○幹事改選○大正十二年度會費の拂込に就て○會務報告○會員の訃報○退會者○交換及寄贈圖書目○本會規則拔萃○投稿規定

第三號　自　二二一　四一四
至　二三一　四二四

附　錄　英　文　欄

第二號、第三號（合一九頁）

會員名簿　第二號

大正十三年五月二十八日印刷
大正十三年五月三十一日發行

【定價金壹圓貳拾錢】

著作權所有

發行兼編輯者　新潟縣三島郡深才村深澤　高頭仁兵衛

印刷者　東京市神田區美土代町二丁目一番地　島連太郎

印刷所　東京市神田區美土代町二丁目一番地　三秀舍

發行所　新潟縣三島郡深才村深澤　日本山岳會

東京市芝區高輪南町三十番地
日本山岳會會計取扱所
振替口座東京四八二九番

發賣所　東京市神田區表神保町　東京堂

山岳殘本販賣

奥上州號

山岳 第十六年 第三號

本欄及雜錄二百十二頁 定價金貳圓五拾錢

奥上州は巨流利根及其貢流の發源する所、山や谷や殘雪や森林や登路や果して如何に、奥上州號は其詳を盡して餘蘊なし。

山岳

第二年第三號。第四年第二號。第五年第二號。第三號。第六年各號第七年各號。第八年各號。第九年各號。第十年第二號。第十一年第二號。第十二年第一號。第十三年第二號。第十四年各號。第十五年各號。第十六年各號。第十七年各號。以上何れも定價異り、且つ部數も僅少につき、御註文に先立ち往復葉書(又は返信切手附)にて一應御照會被下度候

東京市芝區高輪南町三〇

健全社書店

振替口座東京三二〇五二番

The Journal of the Japanese Alpine Club

SANGAKU

Vol. XVII 1924 No. 3